

サハリン・樺太の朝鮮人

—安山市「故郷の村」でのインタビュー—

今西一（編）

2013 年度科学研究費(A)「帝国日本の移動と動員」代表

サハリン・樺太の朝鮮人

－安山市「故郷の村」でのインタビュー－

2009年の9月12日から14日の3日間、私たちは、韓国京畿道安山市の「故郷の村」で、約20人ほどのサハリンから引き揚げてきた韓国人から、一人2～3時間のインタビュー調査を行った。調査の概要は下記の通りである。

No.	氏名	生年月日	聞き手	該当ページ
1	尹興	1924年12月12日	今西一・金鎔基	p.2～7
2	崔智海	1930年9月29日	今西一・金鎔基	p.2～7
3	朴大吉	1928年2月8日	三木理史・中山大将	p.8～15
4	金永日	1929年10月	今西一・許粹烈・金鎔基	p.16～19
5	任宗善	1930年9月29日	今西一・金鎔基	p.20～27
6	李世鎮	1931年4月28日	三木理史・金鎔基・中山大将	p.28～40
7	李起正	1931年9月16日	天野尚樹・中山大将	p.41～54
8	李炳玉	1933年4月22日	今西一・天野尚樹	p.55～61
9	金都榮	1933年10月15日	今西一・金鎔基	p.62～65
10	張日三	1933年12月3日	倉田由佳・中山大将	p.66～74
11	高昌男	1935年11月2日	三木理史・中山大将	p.75～84
12	金相吉	1936年3月25日	三木理史・中山大将	p.85～93
13	平山清子	1939年2月19日	三木理史・中山大将	p.94～102
14	文道心	1924年	今西一・許粹烈・金鎔基	p.103～109
15	黄龍門	1930年3月10日	倉田由佳・中山大将	p.110～120
16	金鐘聲	1935年	倉田由佳・中山大将	p.110～120 p.121～133
17	張永福	1933年12月30日	倉田由佳・中山大将	p.121～133

なお、本研究は2013年度科学研究費(A)「帝国日本の移動と動員」(今西一代表)の研究成果の一部である。

注意事項

- 1) 本粗原稿では、録音データをそのまま文字化したわけではなく、以下のように何点かの改訂をくわえている。それは必ずしも録音データそのままの文字化が、読者の理解に結びつくわけではないと判断したからである。
- 2) 聞き手の発言については、そのまま書き起こすのではなく、質問等の趣旨が明確になるように、シンプルにした。理由としては、聞き手の質問と、インフォーマントの返答とが表面上、噛み合っていないことが、しばしば見られたからである。インフォーマントが聞き手の質問を無視したり、聞き違えたり（以上は、高齢のため）、また、聞き手が勘違いした質問をしたり、逆に聞き手がある単語を出しただけでインフォーマントが意図を察知して回答を始めてしまったりしていることがしばしばある。
- 3) インフォーマントの発言も、表面上食い違ったことを発言しているように見える場合や、表面上何を言っているのか判断しづらい場合もしばしば見られた。音声ではその抑揚などから、意図が理解できるが、文字化してしまうと、上記のように正反対の意味や、意図が不明な箇所が散見された。これらのうちいくつかは、読者が誤読しないように改訂したが、改訂してしまうと、文章を大きく変えてしまう場所や、独特の言い回し（方言など）については、そのまま残してある。特に、文字化すると標準語と同じだが、実際には意味合いの異なる方言も多く、樺太・北海道方言に不慣れな読者は誤読するおそれがある（とくに接続詞、間投詞。たとえば、文頭の「したから」は、「そのことをなしたので」という意味ではなく、ただの間投詞として用いられることが多い。したがって、因果関係を示すものとして読むと、誤読する恐れがある）。これらの箇所は要検討課題である。
- 4) これは当然のことであるが、歴史用語とインフォーマントの使う言葉とが必ずしも一致しているわけではない。たとえば、「疎開」「引揚」「帰国」という言葉は、インフォーマント各人・各場合によって、指す内容が異なっている。これらをどう処理するかは、要検討課題である。
- 5) 本粗原稿におけるインフォーマントの発言を理解するには、時代背景や樺太社会、サハリン社会に関する一定の知識を要する。粗原稿の段階で、いくつか注を入れたが、これだけでは充分ではないと考えられる。これらをどのように読者に提示するかは、要検討課題である。
- 6) インフォーマントから、直接「これは書かないでほしい」と言われた箇所は削除してある。ほか、個人的な話や、第三者の個人名などは、どうするかは要検討課題である。

(以上)

No.1 尹興捷 1924年12月12日 釜山生

No.2 崔智海 1930年9月29日

(聞き手:今西一・金鎔基)

釜山です、釜山。金海で生まれたの。小学校卒業しました。私が卒業するときは普通学校って、尋常小学校って言いました。尋常小学校6年生まで。

—樺太へはいつ渡ったのですか？

44年、敗戦の一年前。父さんと兄さんがいて。農業。稲、稲ばかり。

—日本語は学校で覚えたのですか？

そうです、そのときは日本語が達者でなくて、**чуть**（少し）。日本語は話は聞かないと、すぐ忘れる。

*以後、韓日訳。

—小作でしたか？

借りて。64メートル四方。半分、50%。地主は朝鮮人。家族は4人。お父さんお母さん、お兄さん、自分。お兄さんは、一緒に住んでたんだけど、同じ農業をしていたけど、お兄さんは別に土地を借りていた。

—学校に日本人はいましたか？

朝鮮人ばかり。

—子供の頃に朝鮮人と言うことで不愉快な思いをされましたか？

ない。そこには日本人がいなかったから。

—生活は苦しかったですか？

農作物は国家に納めなきゃいけないけど、それだけで生活していた。麦も作っていた。一年に二回、米と麦。自分で米を作っても食べられない。

—農作業には何歳から従事していましたか？

12歳くらい。

—大きくなったらどうしようと思っていましたか？

別に仕事をしようとしても就職先もないし、お父さんの跡継ぎをするつもりだった。

—子供のころはどんな遊びをしていましたか？

田舎でしたから、集まっているんな話をしたり、食べたり、いたずらしたり。

—青年会のようなものはありましたか？

なかった。禁止されていた。集まることが。田舎には青年会みたいのがなかったが、都市では多少組織されていた。

—学校は全部日本語で授業をしていたのですか？

学校を卒業するまでは韓国語で勉強した。朝鮮人の先生が教えた。校長先生は日本人。

—学校教育は日本的

朝鮮語で勉強したけど、内容は日本のこと。教科書は日本語だったが、学校で習う時は日本語で。著線の歴史に関したことはなかった。

—樺太へはなぜ来たのですか？

トウライというところに親戚がいて、16歳のときそこに半年くらいいて。噂では、徴用があると聞いた。徴用された時は19歳。トウライにいたときに、通知が来て、徴用のための身体検査に呼ばれた。44年の年に徴用の指令が出たので行った。上敷香へ。飛行場の建設。

—どんな労働に従事しましたか？

軍用滑走路の建設に関わった。もっこをかついで。

—日本人も働いていましたか？

日本人もいたけど、一緒には仕事をしていなかった。

—中国人やロシア人の捕虜はいましたか？

見たことはありません。

—朝鮮人と日本人との接触はありましたか？

接触ありました。話も世話もしました。仕事の行き帰り同じ道を通るので、出会うし、出会うと話もした。労働者は飯場で寝泊まりし、管理者は日本人で、賃金は家に送金すると言って、手許にはなかった。ご飯はでた。

崔智海（日本語）：戦争前は移入米を食べていました。ロシアのパンは残留ロシア人だけ。

尹：大豆マメがほぼ主食に近い。

崔：戦争が終わった時は16歳ですから。空襲は、国境線を越えたときに少しありました。空襲されて家事になったのは豊原だけ。なぜ空襲したのか今でも、納得できません。8月の22日か24日に空襲されたんです。北の方から避難民が集まっていて、バラバラに逃げて、爆撃されて、防空壕にあてられて、死んだ人もいるし、けが人もたくさん出ました。

—飛行場は爆撃されませんでしたか？

崔：飛行機はたった一機しかないんだもん。飛行場はたくさんありましたよ。

—朝鮮人は独身の人がばかりでしたか？

尹：飯場は飯場だし。お風呂は、あるんだけど、ない部類ですね。

—徴用で行かれた方と、その前からいる方に接触はあったのでしょうか？

崔：恵須取ですね、恵須取にはマツガイ町ってあって、そこには朝鮮人ばかり住んでいたんです。町はずれでした。僕もそこで育ちました。徴用で来た人は、稀ですけど夫婦で来た人もいます。後から呼んだ人もいます。非常にまれですけど。朝鮮人で請負した人たちいたでしょ。朝鮮人ばかりじゃなくて、日本人もいたし、中には朝鮮人もおりました。

—戦前に朝鮮人の組織はありましたか？

崔：僕の記憶ではなかったです。僕も幼かったし。恵須取で僕は育ちましたけど、朝鮮語を教える場所、許可はまったくありませんでした。家では使っておりました。小学校通うようになりましてから。

—朝鮮人はどんな仕事に従事していましたか？

崔：土方は主に徴用で来た人。逃げたとか、そういうのはタコ部屋へ。土方はだれでもしましたよ。道路建設とか。

—林業に従事する人もいましたよね？

崔：やりましたね。でもその人たちは特別な技術が必要でしたから、全部が全部やったわけじゃなくて、一部の人。

—朝鮮人で漁業に従事する人は多かったのですか？

崔：漁業は主に日本人がやっていました。中には朝鮮人も混ざっていました。だいたい炭坑だとか、林業とか。

—終戦のときはどこにいたのですか？

尹：元泊、にいました。戦後、朝鮮人ばかり飯場に集まって暮らしていました。

—朝鮮人は引揚できませんでしたか？

崔：いまでも言っているでしょ、朝鮮人は日本統治下に入ってから、韓国の姓をなくして、朝鮮人の認識をなくして、みんな日本人だと、戦争終わったらあんたたち日本人でないと、の国籍がないんだと、みんな捨てられて。

—終戦に対して朝鮮人の人たちはどのような反応をしましたか？

崔：サハリンで終戦を迎えましたから、朝鮮人の間の噂では、戦争が終わったから、自分たちは日本人より先に韓国へ帰れるって噂がひろがったんですが、48年から3年のあいだ、日本の人たちは殆ど全部日本へ帰ったんですが、今までサハリンに残りました。

—日本へ引き揚げた朝鮮人もいたのでしょうか？

崔：はじめ確か帰れたんです¹。ホルムスク、真岡から船が出ていました。ほんの少数ですけど、朝鮮の方で、日本を經由して韓国へ帰った方が、何人かいると思います。あとは、行かれませんでした。夫婦の人、奥さんが日本人とか、そういう方は一緒に帰れた方もいましたし、そういう方もいました。

—ソ連が朝鮮人を韓国へ帰してくれるという噂はあったのでしょうか？

崔：根拠はですね、記憶ありませんね。

—戦後直後の国籍はどうなっていましたか？

尹：無国籍。

崔：ロシアが45年の12月あたりから、パスポートの交付が始まったんです。最初は無国籍、そのあと、何年か過ぎてから、ロシアの国籍を欲しい人は申請しなさいと。長くて6カ月、短くて3カ月、国籍をもらえたんです。

—戦後はどんな仕事をなさったのですか？

¹ 緊急疎開のことを言っているものと思われる。「緊急疎開」とは、樺太から北海道へと、婦女子を中心に疎開させるために軍と樺太庁の連携によって行われた移動形態である。期間は、1945年8月13日から、ソ連軍が樺太の首都・豊原に進駐する同月23日までで、約88,000人が移動した。（樺太終戦史刊行会編、『樺太終戦史』1973、320-346頁）なお、当事者が「疎開」と言ってもこの「緊急疎開」ではなく、46～49年の「引揚」のことを指している場合もあるし、またその逆の場合もある。

尹：漁業。コルサコフ、大泊。沿岸漁業。

崔：ロシア時代は、集団組合で。

—国籍はどうしましたか？

尹：ずっと無国籍。

崔：1948年以降だと思います、ソ連が北朝鮮の領事館、ナホトカ。その当時に、活発にです、北朝鮮の共和国の国籍をもらいなさい、と。若い人たちに北朝鮮に帰りなさいと、したら、好きな大学に入れると、一年して夏休みにはサハリンに帰れると。若い人はたくさん行きましたと、4000人くらい、一年過ぎて、二年過ぎて、誰も買ってきませんでした。僕の甥も行ったんです。留学したかったんだけど、許可がもらえなくて、なぜお母さんのもとへ帰らせてくれないんだと申請をしたら、共和国の憲兵ににらまれて、あれは何年だったか、国境を越えて、不法入国して、来るつもりだったんだけど、射殺されたらしいんだけど、行方不明になったんです。

—日本への帰国運動もありましたよね？

尹：ああ、そうです、もっと後です。

—北朝鮮へ帰国した人もいますね？

崔：若い人たちは4,000人以上ですね、集団的に行きました。強制的に送還された人もいます。それはどういう人かという、36人か37人だったと思いますけど、理由は何かと言うと、内緒にですね、韓国の放送を聞いていたんです。50年過ぎてからだと思いますけど、日本の領事かなにか来るときに、デモをしたんです²。韓国へ返せって。そのために、確か、はっきりした数字は覚えてませんが、30数人、強制的にですね、24時間以内にハバロフスクに経由して、北朝鮮へ送還されたんですね。それはもうわからない。南朝鮮に返せっていうと、罪もないのに。自分たちは北朝鮮へ帰ってって宣伝しても何でもないので。

—共産主義教育というのはありましたか？

崔：特別な教育ってありませんでした。講習だとか、北朝鮮みたいに人集めてるのは。学校ですね。学校では全部ロシア語。朝鮮語の学校も一時ありました。64年まで。内容はですね、朝鮮語ですが、内容は全部ロシアの翻訳。一時はですね、師範学校、高等師範学校ではなく、師範学校もありました。昔は教員大学2年制だったんですけど、師範学校になって4年制になったんです。今は、サハリン国立大学、ビジネス科とか、韓国語も勉強できますし、日本語も英語も。

—少数民族保護政策というのは朝鮮人に対してはありましたか？

² 都万相（と・まんさん）事件のことと思われる。「都万相事件」とは、1977年にはコルサコフ（大泊）で残留朝鮮人の都万相をめぐって起きた事件である。都万相は両親が韓国にいて、日本経由での韓国への帰国を関係機関に何度も申請したが、そのたびに却下された。ついに、都一家は帰国要請を掲げてデモを行った。これに対し、警察が出動・鎮圧し、さらに一家を自宅に帰したあとは、周囲を包囲し軟禁状態に置いた。一家が断食し衰弱したため、当局が押し入って精神病院へと収容した。一家の回復を待ち、政府は警察の護衛の下、都一家を大陸のハバロフスクへ移送し、次に北朝鮮の国境まで連れて行った。そして、都一家は北朝鮮へと引き渡された。（李炳律『サハリンに生きた朝鮮人』北海道新聞社、2008年）

崔：何にもありません。僕たちは権利というものは何にもありませんでしたから。無国籍のパスポートを持って、自分の住んでいる区域を出られないんです。許可がないと出られません。そういう限られた。それは自分自身が体験したことですけど。

—崔さんは、戦後はどうなされたのですか？

崔：労働もしたし、見習もしたし。雑夫ですね。事務の講習を受けて、事務とか。学校は恵須取の工業学校を出ました。

—尹さんはいつ結婚なされたのですか？

尹：50年度。子供は6人です。コルサコフに。みんな労働しているんです。

—ソ連時代には朝鮮人部落はありましたか？

尹：いいや、作っていません。

崔：みんな国営だったでしょ。住宅ができたら、分配されるんです。ほとんどないです。ないです。中央アジアみたいに、集団農業を組織されたとき、そういうときは朝鮮人が集まって、そういう例くらいしかありません。

—漁業の組合というのはありましたか？

崔：国有のコンビナートですよ。ソ連時代ですから、みんな国営。労働者は朝鮮人が集まって、ということはありませんけど、朝鮮人ばかりの農業、漁業というのはありません。ありました、「ブラウダ」ってありますね、ロシアの労働英雄をもらった人いますけど、朝鮮人ばかりのコルホーズの例もあります。ロシア人の技術者もいたけど。

—戦後のサハリン社会で朝鮮人はどんな立場にありましたか？

崔：共産党員になった人もおりますし、国会議員になった人もおりますし、市長、議員になった人もおりますし。差別も一般的にはありませんけど、僕たちは目に見えない差別はあるでしょ。あるところにはあるはずですよ。

—日本時代には差別はありましたか？

崔：日本時代は朝鮮人は、高等学校、大学には行けない。大学に行くには日本人になりきらないといけない。なまりのない言葉で。例外ってのもありましたけどね。

—戦後に帰国願望はありましたか？

尹：故郷は釜山ですから、いつでも韓国へ帰りたいという気持ちはあった。

—ソ連政府は朝鮮人の帰国に対して、どんな態度をとっていましたか？

崔：サハリンの州の共産党書記が、韓国へ帰りたい人は申請書を出しなさいと、そしたらね、約90%か80%くらいの人が韓国へ帰りたいって、そしたらびっくりして、4万人の人がいっぺんに韓国へ来たら、サハリンの経済どうなります。それで、申請書を出したんですけど、結果はありません。

—その後も請願や問い合わせはしたのですか？

崔：だいたい、韓国へ帰国の話が全然持ち出されなかった。いろんないきさつがあって、村山さんが話したこともあるでしょ。帰還の問題に関して。それで、ソ連も帰さないといけないって、認識もあったみたいですね。朝鮮戦争当時は、誰も思わないけど、戦争終わ

ったあとは。むしろ韓国では、解放後ですね、終戦後、建国に忙しかったですね、3年間も戦争して、樺太の朝鮮人たちのことについて考える暇がなかったはず。無関心だったんです。

—先ほどの申請書を出せと言うのはどういうことですか？

崔：噂話ですけど、朝鮮人を帰す話があったんです。ゴルバチョフの時に。でも朝鮮人は誰も帰らないって。生活に満足しているし、行く人はいないって、断言したらしいです。聞いてみたら、90%が帰るって言うから、びっくりしたんです。韓国に対してですね、知識はほとんどありませんでした。国交結ばれたでしょ、それが過ぎてからだと思います。韓国何度も訪問して、びっくりしました。ウルサンの現代工業会者に通訳で行って、びっくりしました。

—帰国についてどのような考えがあったのでしょうか？

崔：あのね、若い人たちは、勉強するために、北も南も祖国だと言う理念を述べた人もおります。歳とった人たちは、北朝鮮と南は近いから、北朝鮮を通過して、南へ行けると思ったひともありました。それが駄目だとわかって、行く人はほとんどなくなりました。行って来た人の話、訪問した人の話、そうすると、いろいろ内容話しているんですけど、それでわかったのは、職場がないと、そして独裁政権だと、言論の自由がないと。行ったらだめだと。日本から北朝鮮へ渡った人も、宣伝にのって行ったでしょ。僕たちは고향마을（故郷の村）に移住して、生活に関しては何の心配もないです。ところが、いろんな地方にね、移住帰国した人は賃貸料を払っているんですけど、そういう人は苦しい生活なんです。これは個人的に解決できる問題ではないんですけど、日本でもう少し家を建ててくれればと思うんですけど。高木健一弁護士が来て、話した内容なんですけど、台湾を交換したでしょ、1対120で交換したでしょ、日本では、1対5・6だったらいつでも交換するって話をしていました。

No.3 朴大吉(大山大吉) 1928年2月8日 京畿道水原郡生

(聞き手:三木理史・中山大将)

僕の知っている限りは話しますよ。1928年2月8日、生まれは韓国です。京畿道水原郡。こっから30分です。父さんは、昭和14年に樺太に募集で言ったんです。あのときは徴用はなかったから、募集です。樺太の知取町の王子会社があったのさ。渡辺組ってところに。あれはね、王子会社の材木とか全部渡辺組でやってたんです。私の父さんはそういうことはできなかつたしね、流送するでしょ、丸太をその流す仕事をしていました。何の仕事をしていたかはわからないけど、トビをもって。ちょうど、中学校1年の時に自分の母がここで亡くなって、お父さんが樺太にいて。母が亡くなった関係で、お父さんに電報を打ったんです。母の死亡届。そしたら、お前、母さんのおばあさんどこに行くか、樺太に来るか。それで樺太に行くって。それで、渡航証明書を送ってくれたんです。

—お母さんが亡くなられたのはいつですか？

17年くらい、12月8日大東亜戦争、17年2月にシンガポール陥落したでしょ、あのときに亡くなったんです。自分は樺太に渡って、鉄道に入ったんです。炭坑は入りたくなかったから、鉄道に。あのときが、14歳のとき、15歳の時。

—どんな仕事をなさったのですか？

知取で。入ったばかりだから、要員としてポイントとか、汽車入って来る信号おろすとか、雑夫みたいなもんです。2・3年したら、あがるけど。

—ご兄弟は何人いらっしゃるのですか？

誰もいないです。ひとりです。

—水原ではどんな暮らしをなさっていたのですか？

水原で生まれたけど、育ったのは、東大門の隣に西陵里という駅があったんです。あそこに住んでたんです。母さんとふたりで。学校で言うのは、校長先生は日本人だったし、先生も日本人だったですよ。学校では、朝鮮語をしゃべると罰金をとるくらいでした。日本人と一緒に、鉄道だから、仕事しました。

—お父さんはどこで生まれたのですか？

1903年生まれでしょ。お母さんは、わかりません。お父さんは朝岩里というところで生まれたんです。農村です。今はKIA自動車が立っているけど。昔はなかったです。お母さんも水原生まれです。1945年8月解放されてね、ロシア人が樺太に来たもんだから、日本人が48年、49年にみんな疎開して、僕らはあそこに残って。知取です。お父さんと一緒にいた。お父さんが再婚したんです。昭和19年度。彼女は、家庭人として。朝鮮人です。

—戦後は何をなさいましたか？

45年に解放されたでしょ、樺太が。その後に朝鮮学校というのが設置されたんです。3年くらい。遊び半分。父さんは、王子会社で仕事したんです。あの当時は、知取の王子会社も、紙を作るもんですから、盛んだったんですよ、スピルトンとか。朝鮮学校は、何にもなか

ったんです。小さい子供は幼年学校だし、僕らは青年部。49年の8月に大泊に引っ越したんです。大泊知ってるでしょ？お父さんと一緒に。何の仕事してたのかな、建築方面で雑夫みたいことをしてたんでしょ。コルサコフ来て、49年から自動車会社で、運送会社で、ロシア人の、そこで修繕工して、50年度から80年度まで、運転、自動車してました。貨物とか乗合バスとか、30年くらい。それから、80年度からは自動車も飽きたし、建築の方を歩いたんです。ずっと大泊。

—ソ連国籍は取得なさいましたか？

あの当時ね？あの当時は、ソビエトの国籍を持ったんです。なぜかっていうと、僕には子供が4人いて、上のと二男が大学に行きたいけど、あのときは無国籍と北朝鮮籍と、ロシア籍と三つを持ってたんだけど、北朝鮮のパスポート持っている人と、無国籍は、子供たちは教育に行けないんです。町でて、ハバロフスクとか、行けないんです。それで、85年度に仕方なくロシア国籍をもらったんです。

—結婚はいつなさいましたか？

スターリンが53年度に亡くなって、1954年に結婚したんです。

—北朝鮮からの帰国の呼びかけはありましたか？

ああ、あのときはひどかったですよ。人民民主主義共和国に帰れって、たくさんの若いものが行ったんです。あそこ行ったのはお終いだ。だまされたんだ。自分の父さんが北朝鮮に行く必要はないんだって。いつかは自分の故郷の韓国に行きたいって。父さんがなくなったのは、56年度。結婚してから。

自分は運転しながらですね、大泊から30kmくらい離れたところに長浜っていうところがあるんです。林業、自動車でもって丸太を運ぶのを4年くらいやったんです。長浜を通ったら、船が、あそこにロシア人の何があったかという、海岸警備が、それで日本の漁船が何十隻もつかまっています、して、僕たちは日本人は、どうして町に来るかと言うと、水をくみに来るんです。鉢巻をしてから、ああ、あれは日本人だって。その人たちと、付き合うようになって、あの人たちが、シガレットとか、タバコを、欲しがります。それを買ってきてやったし、日本人たちに何を頼むかと言うと、手紙、手紙を何とかして、北海道へ行ったら、韓国へ送ってくれと。日本の本もたくさんくれたし、雑誌とかね。それでもって助かったですよ。60年度か、70年度か、自分のおばあさんから手紙が来たんですよ。自分たちは生きていたのか、と。あの時、便りがあってからは、20年くらいは無精してさ。

つかまって来るわけですよ。2・3カ月、豊原に本部があるでしょ、船長はつかまっているけど、他の人は船に残るわけですよ。2・3カ月ね。毎日、僕らが見るわけですよ。で、彼らは水汲みに来るわけですよ。町にね、町って言っても、長浜で、長い浜ですよ。あの人たちが水汲みに来たら、僕らは停まって、自動車を修繕するみたいにね、真似するわけですよ。それで、手紙を預けて、ラジエーターに水を入れるふりして、わざと。したら、番兵が銃をもってついてくるんだ、僕らは知らんぷりしているもんだから。番兵はロシア人。ですから大変ですよ、僕らは隠してから、軍隊が遠く言ったら、タバコとかシガレットをあげたら

喜ぶんですよ。誰も見つかってません。見つかったら、それで逮捕です。僕らの、機関は30人くらいいて、朝鮮人が8人いたんです。彼らは水汲みに来るときにね、バケツに入れてくるわけですよ、で、自分たちが通ったら、日本の本とか雑誌とか。

—当時、韓国へ手紙は出せたのですか？

ああ、絶対に出せなかったです。来るのもある人のあれでもって、どう言う風に来たかはわからないけど、来ました。ロシア人はひどかったですよ、社会主義だから、資本主義とあれするのは、ラジオは聞くなっていうけど、夜になったら、NHKとか聞いてました。厳しいんですよ。

—ソ連国籍はいつ取得したのですか？

81年頃までは建築でもって。そのあとは、年金生活。あれはもう仕方なくソ連国籍をとったんです。ひとは、イルクーツクへ、もうひとはハバロフスクへ。工業大学をおわったし。

—それまで取得しなかったのは、いつかは韓国へ帰れるかもしれないと期待していたからですか？

ええ、もちろんそうです。みんなそうです。無国籍をもってもどこも行かれないんです。大泊から豊原も行かれないんです。見つかったら、罰金。そうじゃなかったら、2・3日は警察につかまって、薪割りとかさせられる。

—永住帰国はいつですか？

2000年2月です。故郷の村、890人、500世帯がいて。子供はみんなサハリンです。一年くらい、相当考えたんです。全部投げて、僕たちはここへ来て何をするのか。果して韓国は我々をどう扱ってくれるのか。それが心配で。仕方なくもう、気に食わなかったら、サハリンへ帰ろうと、そういう覚悟で来たけど、なんでもなかったですよ。

—永住帰国後もサハリンへは行かれましたか？

今年の6月14日から8月2日まで。子供が大泊に住んでいますよ。3回行ったんです。日本の赤十字社が、3年に一度、無料で持っていかせてくれる、2回を使ってしまって、3回目が残っている。来年あたり、それがあたるかどうか。

—お子さんは、今はどうなさっていますか？

息子は二人とも、韓国人の女と結婚したけど、娘は、ロシア人と結婚してます。二人の子供を持っています。

—奥さんはどこのご出身なのでしょう？

彼女も水原の同じ村ですよ。彼女は自分より8歳下、36年生まれで、自分は28年生まれだから。昭和19年に樺太に行ったんですよ。一年たってから、戦争終わったんです。4月だか。自分の父さんを頼りに自分の母さんに行ったんです。僕らと同じで、14年に募集で行って。朝鮮に仕事なかったんですよ、ひどかったですよ。父さんは、仕事がないんです。一日、金持ちのところで働いたら、一日10銭しかもらえなかったです。樺太行ったら、4円5円もらえるんです、それで、みんな樺太へ。僕らは小さくてわからなかったけど、相当

苦しかったようです。

—朝岩里から、樺太へ渡った人は多かったですか？

そうです。あのとき朝岩里から40人だか。知取もいたし、落合もいたし。

—戦後にロシア学校へは通いましたか？

4年くらい、仕方なく行きましたよ。学校行かなかつたら、現場で使ってくれないんです。だから、仕事帰って、2・3時間夜学行かなかつたら、追い払われてしまう。コルサコフで、3年くらい。

—家庭ではハングルを使っていたのですか？

家では韓国語を使ったし、友達とは日本語しゃべったし、鉄道は行ってからは、日本人と一ヶ所にいたんだから、日本語を使わないと、話し相手いないから。家に帰ってくるのは2・3カ月に一回くらい。運転手の時は、ロシア人と働いているから、ロシア語。

—どの言葉がいちばん使いやすいですか？

朝鮮語と、日本語ですね。家では朝鮮語です。僕が28年だから、37・8だったらもう朝鮮語は知らないですね、でも、8年間朝鮮学校がって、廃止されたんです。それが60年度かな、廃止されるんです。日本語のわかる朝鮮人はたくさんいます。会ったら朝鮮語は使わないんです。80%は日本語を使ってた。

—職場には他にも朝鮮人はいましたか？

朝鮮人の運転手と言うのは、ほとんどいなくて、80%はロシア人。

—給料に格差はありましたか？

向こうから来た人はね、第2次世界大戦に参加したし、大陸から来た朝鮮人も、僕たちの倍貰うんです。運転手の給料はたいしたことないです。120ルーブルくらい。たいしたことないです。同じく仕事をしながら彼らは倍もらうんですから。僕らは残りたくて残ったわけがないし、ロシア人はロシアの国籍を持っているし、第2次世界大戦には参加したし。自分たちは何もやっていないから。ロシア国籍をあのときにもらっていたら、90%は、何もありません。

—ロシア人には従軍経験者が多かったのですか？

たくさんいました。昔北朝鮮からロシアにいった人たち、あのひとたちは完全にロシア人になっています。ウズベキスタンにスターリンが連れて行った人たち、あの人たちの祖先。全部、先生とか。そうじゃなかったら、ロシア共産党の幹部とかね。新聞社の社長とか。当時はね、仕事はね、みんな汚い仕事は全部朝鮮人。今は違いますよ、ああ、今は違います、ロシア人が全部、何回か行ってみたけど、専門学校や大学を終わってますからね、僕の家でも長男や次男、全部エンジニアになっているんです。お祖父さんは、便所掃除みたいなことをしていたけど、いまは違います。

—いまでは技術職、専門職に朝鮮人が比較的多いのでしょうか？

そうになっていますね。2・3世たちはたいして勉強しなくても、高等学校を卒業しますから。

—お子さんはハングルを使えるのですか？

いいえ、僕の長男はちょっと朝鮮学校を6年くらい卒業しているんです。他の息子は完全に、イルクーツクの工科大学を卒業して、自分の妻も朝鮮人だけど、朝鮮語を使わないから、ロシア人と同じです。だけど、僕たちが話すのは全部聞くけど、話ができない。娘は自分の婿や息子がロシア人だから、仕方ない。

—民族を越えての結婚というのは、少ないですか？

いや、いっぱいいます。今は多いですよ。僕たちの世代にはたまにあったけど、今ならたくさんいます。同じ大学に行って付き合っ、結婚して、親たちは反対するけど、仕方ないでしょ。娘は、9年生でもって中学生くらい終わっています。反対します。でも仕方ないでしょ。仕方ない。孫は完全にロシア人。したけど、彼らは全部ロシア人です。お前の母さんは朝鮮人だから、朝鮮語習えっていっても、彼らは習わない。気持ちがないんです。そうです、朝鮮語をしゃべってほしいです。もちろん。

—永住帰国については、お子さんたちから反対はありましたか？

反対しましたよ。もしも、父さんたちが韓国へ行って、何かで以て会えなくなったらどうするんだって。でも、金さえあれば戻れるって。この9年間に相当来たですよ。政府からもらうのを節約して。ひとつ心配なのは、サハリンに残っていた日本人たちは、父母が帰国したら、孫人家族連れて行ったでしょ。韓国ではそれが無いんです。自分たちがもう何回も国会に何回もあれしたけど、経済が足りないから待ちなさいと、でもいつまで待ちます。私が死んでしまえばそれで終わりでしょって。不満ですね。せめて、孫でもいいから連れてきたらね。

—いまは韓国籍ですか？

完全に韓国人になってます。

—鉄道で働いていたころは、周りの日本人とはどう付き合っていましたか？

あああのときは、自分たちも若かったし、3年くらいいたけど、仲良くしましたよ。職場の先輩に朝鮮人もいました。あの時は大山って呼ばれてました。

—ソ連時代はどう呼ばれていたのですか？

僕たちはいつも、パクって。ロシア人は勝手に、ターシャとかミーシャとかいうんだ。僕はサーシャ。

—お子さんたちにはどんな名前をつけているのですか？

自分たち漢字で以てつけるんです、でもロシアの名前になるんです。

—永住帰国に際して、心配はありましたか？

何にも心配はなかったし、全部自分の民族だし、ひとつ心配だったのは、こっちでどんな扱いをしてくれるのか、それが心配だったですよ。もちろん、この社宅は、建てたけど、僕らがもってる生活費、みなさんが御存じのように、韓国政府でしょ、一番心配だったのはそこなんです。日本が払ってくれるならいいけど、韓国は生活も苦しいのに、僕らが行ったら払ってくるのか、それが心配でした。

—永住帰国をあきらめた人もいますか？

韓国へ来てから戻った人はいません。サハリンを訪問してから、亡くなった人はいます。孫たちや息子たちに行くと言って言われて戻ってこなくなった人はいます。知っている人でも2・3人。歳とっているもんですから、夫婦が来て一人死んだら、どうする。女は一人で暮らせるけど、男は、ほんとうに困りますよ。炊事とか、食べ物。年寄りたちは、養老院じゃなかったらサハリンへ行きたいって人がたくさんいますよ。実際におります。

—水原には行かれましたか？

ああ、行きますよ。一年に5・6回は。今はだれもいないけど、親戚がおります。自分の妻には知り合いが2・30人くらいいますよ。

—長浜では自分の手紙を託したりしましたか？

妻のおばさんから。僕は誰もいない。母は亡くなったし。たくさんの人たちが、日本人とつきあってね、長浜。ちょっとでも国境違反したら捕まるから、少なくとも2・3カ月は停まっているから。一番困るのはタバコ、あれが不足するもんだから。僕たち自動車で行ったら、停まってタバコを。毎日運んでますからね、林業、丸太を運んでますから。毎日停まっていますよ、日本の船が。ふるさとは聞いてないけど、手紙とか、日本の本とか持って行きなさいって。バケツの下に隠して、それを、水汲む真似をして、僕らのそばで停まるんです。タバコを頼むなら、番兵も仕方ないでしょ。何が欲しいんですかって。あの人は何にもないから、本とか、手紙とかあずかってやるよって。

—サハリンに朝鮮人の組織ができたのはいつからですか？

85年から、ペレストロイカから。その前はなんもなかった。サハリンに新聞社が設置されたのが、1960年だか、「レーニンの道」とかいう新聞があって、새고려(新・高麗)新聞になって、新しい고려新聞、いまでも出ています³。で、全部発行するのが、共産党員だしね。私たちが下手な真似したら、3・4人集まって話していたら、すぐつかまります。何の話したんだ、どうして集まるんだって。それはきびしかったですよ。我々の知恵ってのは、日本とか韓国のラジオは聞こえないんだけど、2・3時になったら、聞こえるのは全部日本の放送、毎日聞いてました。70年度から各都市でね、朝鮮人たちの組織を作りなさいって、各都市でもって朝鮮人たちが集まって、サハリンはどういう状態だとか、南韓国は怎么样しているとか、全部、宣伝です。大泊にずっと住んでいたけど、一年に一回くらい集まります。

85年から、こういう手紙が届いたとか、本が届いたとか。豊原に本部がありまして、各都

³ 戦後サハリン社会では、当初からハングル新聞が、刊行されていた。1949年6月1日には、極東のハバロフスクにて『朝鮮労働者新聞』が創刊されており。その二年後の1951年には、サハリンでも『레닌의길로(レーニンの道)』が創刊される。このハングル新聞は、共産党の機関紙としての性格を持っていた。1988年に行われたソウル・オリンピックの特集記事は、サハリンの韓人に大きなインパクトを与えた。なぜならば、それまでの戦後サハリン社会には、韓国に関する情報というものがほとんど入って来ていなかったからである。同紙は、二年後の1990年に党から分離し、韓国政府や、韓国の団体の補助を受け経営を続け、翌1991年、紙名を『새고려신문(新高麗新聞)』に変更し現在にいたる。(新高麗新聞社のペ・ビクトリア(배윤희)氏からの聞き取り(2009.9.24)による)

市へ伝えが来るんです。「老人会」。僕たちがここにきて、これを作ったんです。サハリンにもあるんです。離散家族会というのもあるし。離散家族会というのは、主な仕事と言うのは、韓国に対する問題、帰国問題、一時サハリンを訪れるでしょう、呼びだし問題とか、全部あそこでやってるんです。今は、元はね、何かあったらナホトカまで行かないといけなかったけど、今はサハリンにあります。今は便利ですよ。で、すべての問題は帰国問題とか、一時期帰国ね。離散家族会に申請すれば帰ってきます。80年度から、パクノハク（朴魯学）⁴という人がいたんです。あの人にたくさんの手紙が来たし。一時は帰国の許可まで下りて来たけど、あんまり全部やるもんだから、止めてしまった。90何年だったか。日本の妻を持って帰って、でも、他の人はいないでしょ。日本の妻だったら帰れた。

—パクノハク氏とは面識があるのですか？

はい、大泊で運転しているときに、70年代に大泊に来ました。あの人はもちろん徴用で来たんですよ。あの人を知ってました。あんどきは、友達として。一ヶ月に一回くらい床屋に行くもんだから。活動していることは聞きました。

—都万相事件についてはご存知ですか？

家族全部、連れて行かれてね。その人の娘の婿が、残ったんです。今はここに住んでいますよ。北朝鮮に行ったんだか、ロシア人がなんかしたんだか、わかりません。今まで、何の頼りもない。

—当時事件のことは耳に入りましたか？

聞きました、それはもう、大泊ではひっくり返るくらいの事件が起きたんです。旗をふりながら、日本へ返してくれと。ロシアの方では、お前は朝鮮人なのにどうして日本へ帰るんだって、北朝鮮に帰るんだらうと。見てはいません。話です。豊原にもそういう事件があったし、大泊にもあった。また、そういう話をしても危なかった。韓国に戻るのは難しいと実感したんです。

—韓国への帰国願望はありましたか？

それはもう、自分が運転手する前、父さんが亡くなる前から、いつかはこの土地へ帰ろうと、待ってなさい、待ってなさいと。

—水原ではお墓参りはなされたのですか？

お父さんの父さんの墓がどこかにあるらしんです。おばあさんが小さい時になくなって、その墓の場所はわかります。前は通るけど、中にはいることはできない、茂みになって、使わないもんだから、何十年も。朝鮮人は、絶対に入るなど、悪いんだと。90年度来てから、自動車の上にお酒をあれして、そんなことをしました。伯父さんのはわからない。お墓があるからじゃなくて、ここが自分の生まれた故郷だから。僕たちは何もなかったけど、家族を残して来た人たちもたくさんいますよ。20歳か25歳、最高で25歳。青年がみ

⁴ 朴魯学とは、日本人である妻とともに日本へ「帰国」し、サハリン残留韓人の帰国運動のために、1958年に「樺太抑留者帰還者同盟」を結成した人物である。朴魯学は、1959年から始まった在日朝鮮人の北朝鮮帰還事業に反対運動を起こしていた。（新井佐和子『サハリンの韓国人はなぜ帰れなかったのか』草思社、1998年、108-127頁）

んな募集に行ったもんだから、自分の妻とか兄弟とか全部残してきたでしょ、だから韓国を忘れられない人たちがたくさんいますよ。南大門があるでしょ、東大門があるでしょ、10歳の時自分のおばあさんがなくなって、西陵里に住んでいたんですよ。西陵里は今は、何にもないです。4キロくらい離れていて、今はだれも住んでません、変わったもんだから、どっちかどっちだか。お父さんのお墓はサハリンに帰ったら、必ず行きますよ。自分の子供たちが毎年、やってくれます。

—お孫さんは韓国へいらしたことがあるのですか？

一時はここで働いたんです。ペレストロイカが85年で、仕事がなかったんですよ、それで仕方なく、息子が大学を卒業しても仕事なくて。今は豊原の石油会社で働いています。孫たちは25歳、26歳、娘のは、23歳、24歳。

No.4 金永日 1929年10月 白浦生

(聞き手:今西一・許粹烈・金鎔基)

29年の10月。落合管内の白浦です。樺太生まれの。

—お父さんはいつ樺太へ来たんですか？

27年度に父さんが来ました。全羅南道、お母さんも同じ。

—お父さんはどんな仕事をしていたんですか？

木材です。山の木を切って歩く。ずっとしてました。

—亡くなったのはいつごろですか？

61年度だね。お母さんは、忘れちゃった、89年だったかな。母さんずっと長く生きてたから。

—子供のころはどうしていたんですか？

白浦で高等2年終わりました。樺太時代は学校でね、楽しく暮らしました。日本人とおんなし。朝鮮の女の人は二人しかいなかった。高等2年の時。

—朝鮮人に対する差別のようなものはありましたか？

あるです。一回ね。高等2年の時。体力検定会ってあるんです、あのとき一等だったのにね、朝鮮の学生だって、他のひとにあげたんです。どうしてわかったかって言うと、姉さんの友達が役場で働いていて、それでこそっと。そんなとき一回ね。

—どんなところに住んでいましたか？

家はね、炭坑の社宅にいましたから、兄さんが炭鉱で働いていたから、炭坑の社宅で。電気の方です。7人兄弟です。4番目で、姉さん二人、兄さんと。下に弟二人、だから7人です。高等科卒業してからね、看護婦の見習婦したかったんだけど、お父さんが、女の人は出してくれなかったですよ。朝鮮の人は特にそうだったから。

—学校の教育は日本のことばかり教えていましたか？

ええ、そうです。みんな日本語で。先生も日本人。終戦になってから朝鮮の学校になりました。それまでは日本の学校をあるきました。

—将来は職業婦人になりたいと思っていたんですか？

ええ、卒業したらそこ行きたいなって。でも父さんが許してくれなかったんです。小学校出てからは、白浦は、機関庫、機関車をとりかえる機関庫がありましたから、そこで機関庫のあの、事務見習をしました。終戦まで。まわりは、みんな日本人。それでもいましたよ。

—学校には朝鮮人はいましたか？

ええ、同級生いました。一緒に行きました。あの人はいまは体が弱くなって、養老院に。男の人もいますよ。機関手見習とか、郵便局の通信見習とか。友達とは家ででの呼び方。金本カワコって言って、うちではカワコ、カワコって。友達はみんなカワちゃんって、日本にいる同級生から電話来るしね。

—職場はどうでしたか？

女の人ひとりだったから。みんないい人ばかりだったから、差別はありませんでした。

—日本人のお友達はいますか？

ええ、たくさん。今も秋田に一人、北海道に一人、札幌にいますし。チバタケオって人も北海道の札幌に一人います。体育の方は今でもね、体操とか今でもしてます。メダルもみつつももらいましたから、来月の15日にまた行きます。ドッジボールとか、バドミントンとか。

—当時、朝鮮人と日本人との結婚というものはありましたか？

そういうときは難しかったね、親が許さないから。その頃はね、ないように思います。

—日本の本は読んでいますか？

日本の小説読んでます。でも、目が疲れますからね。探偵小説とか、そういうのが好きだった。友達と会えばね、日本の歌とか、麻雀しながらね。

—樺太の自然は厳しいですね？

それでも、慣れてますから、樺太生まれですから。ここ来るまでは、70歳で永住帰国しましたけど、来るまではスキーなんか乗ったりしてましたから。冬においで、冬においでって、スキーに乗りましょうって。

—終戦時はどこにいましたか？

白浦です。そしてね、5年生と6年生の時にね、伯父さんが京都にいましたから、京都へ一年半くらい。本州へ行ってきました。京都とか、大阪とか。

—ソ連兵は見ましたか？

敗戦のとき、来ましたよ。私はいつでも隠れていましたから、外に出してくれないから。白浦は（空襲とか）何にもなかったですね。避難したこともないし。

—敗戦直前の生活はどうでしたか？

厳しかったですよ、配給も少なかったし、ふきのご飯とか、大根のご飯とか。（餓死とかは）白浦では聞いたことはないです。

—戦後は何をなさったんですか？

いいえ、ただ家にいましたよ。しばらくして、父さんが大工の仕事をしたから、そこに炭坑の近くに事務所があったから、父さんと仕事をあそびました。大工場の隣の事務所ですから。

—戦後の国籍はどうになりましたか？

そのときは、無国籍でしょね。引き揚げもできません。戦後はね、難しかったですよ。物がなかったし、職場もね、したからね、どうしても。大泊へ引っ越しして、47年度に結婚しました。募集に来た人。炭坑に、募集でしょ。北樺保。募集に来た人ですから、43年度の徴用で。忠清北道から。2年のあの期間で来ましたが、帰してれないからって、そこから逃げ出して、大泊から密航でもしようとして、やって来てつかまった。千島の方へまたつれて行かれたです。それから、45年敗戦だから、6月頃戻って来たです。大泊ではいろん

な仕事をしましたよ。私はしなかったけど、主人はね。雑役とか。そういう仕事。

—お子さんは何人いらっしゃいますか？

5人です。女の子4人、男の子1人。戦後そしてからね、怪我してから、体悪くして、54歳で亡くなったんです。私は食堂の方で仕事をしていましたよ。働きに歩いていました。苦労しましたよ。長女が一番、苦労しましたよ。学校行かなきゃいけないし、子守もしななきゃいけないし。いまみんなサハリンでよく暮らしています。大学は一人は出られませんでした。

—戦後はどこで働いたんですか？

個人の食堂ってのはなかったですね、共産党ですからね。

まじめに仕事をしましたから、職場でもよく見てくれました。

—ロシアの人はあまり働かないのでは？

まあ、人によって違いますけど。まじめな人もいますし。

—ソ連時代に無国籍であることで差別されたことはありますか？

いいえ、そういう人は多いからね、ひとりふたりだったら差別されるだろうけど。みんなそうだからね。ソ連の国籍持っている人はあんまりいなかったから。

—北朝鮮国籍をとるようというはたらきかけはありましたか？

言われましたよ。がんばってたんだけどね、仕方なくもらいました。70年度過ぎてからだね、がんばって、がんばって最後にもらったから。責められて仕方なく。北朝鮮から来ている人いるでしょ、そういう人が国籍取りなさいって。

—北朝鮮へ行った人はいますか？

いますよ。

—職場は働きやすかったですか？

そうでもないけど、賃金は普通ですよ。

—住宅はどうでしたか？

個人の家ですからね、買ったんです。個人の家をね。畑もあるしね、野菜もなんか自分の野菜を。余りがあったら、市場で売ってね、小遣いにしたけど。無料ですね、病院とか、義務教育とか。それだけでもだいぶ助かりました。

—ソ連国籍は取得したのですか？

80年代だったね。ソ連の国籍もらいました。85年頃だったか。

—無国籍のときは移動の制限はありましたか？

無国籍の場合はね、差別ありますよ。

—北朝鮮国籍と無国籍ではどちらがよいと思われましたか？

無国籍の方がいいと思います。北朝鮮籍だと、少し旅行に行かれますから。ソ連の国籍でないと大陸はいけなから。それはよかったです。樺太生まれでしたから、朝鮮の土を踏んだことがないから、行ってみましょうって。二回くらい行きました。69年度ですね。（親戚は）誰もいません。ただ旅行に行っただけです。そのときはね、観光団にはよくしてく

れましたよ。ペクト（白頭）山は行きませんが、クムガン（金剛）山は行きましたよ。そのときはね、2年仕事したら休暇くれるの、一ヶ月のお給料くれるし。いいことばっか言ってたけど。

—ソ連国籍取得のきっかけはなんですか？

ソ連の国籍もらえばね、待遇が少しいんですよ。それまでは、なかなか国籍をくれなかったんですよ。

—北朝鮮についてどう思いましたか？

いいと思わなかったですよ。ただ、旅行に行っただけで。サハリンでもいいこと言ってなかったし。ただ、朝鮮の土を踏んでみたくて。

—樺太生まれですが、やはりそのように思われますか？

ええ、親の祖国ですから。北と南北は違いますけど。

—戦後に帰国したいと思いましたか？

聞いてみましたよ、でも自由にならないから。私はわからないから、なんも。

—帰国事業では出身が北か南かで関係はあるんですか？

ちがうですよ。北の人は簡単にはくれないって。募集行った人方が第一、第一世が。私は二世です。いまは、45年までが一世になっているでしょ。北から来た人かたはだめだけど、どうにかして、来た人もいますよ。

—お子さんたちの暮らしはいかがですか？

生活に満足してますよ。3年に1回、2年に1回ね、行かしてくれます。子供たちが切符買ってくれますから。孫もおりますよ。私たちはうまく行かないけど、子供たちが娘の結婚式だ、息子の結婚式だって、呼んでくれますよ。

—どうして永住帰国をしたんですか？

理由って、どうせ、年金もありましたけど。ロシアの年金ももらってます。子供の世話になるより、ここに住んだ方がいいって、友達が言ってましたし、子供たちも寒いサハリンよりいいって、楽に暮しなって。来てみたら、いいですよ、やっぱり。子供たちも行ったり来たりしますから。私も見たくなったら行きますしね。

—お子さんはハングルをわかるんですか？

ハングルね、3番目まで、そしてまた聞こえるけど、言うことは少し。長女は11年卒業してますから、朝鮮の学校。

No.5 任宗善 1930年9月29日 濟州島生

(聞き手:今西一・金 鎔基)

どういふことを話せばいいのか、目的ってあるんでしょ。32年に生まれたんだけど、書類上は34年になってます。1934年2月10日。括弧して1932年の8月23日。生まれたのは濟州(さいしゅう)島なんだよ。チェジュドで生まれたんだけど、小さい時に、記憶にないんだけど、大阪につれて行かれた。家族でね、大阪に移ったんですね。なぜかそのころ、濟州島から直接の船があったんですよ。その船に乗って行ったらしいですよ。村から、遠くないところに村があったから、そうして行ったらしいですよ。そうしないと、陸地って言うのかな、こっちの方の人たちは、みんな下関行ったんでしょから、釜山から。濟州島の方は、大阪来てから、こっちへ来ないと。大阪の布施ってあるんですよ。今もあると思いますけど、そこです。

—ご両親はどんな仕事をしていたのですか？

僕の小さい時、父親はね、いつも病気だったんですよ。僕が記憶にあるのは、父はいつも病気で病院行ったり、寝てたりしてたけど、兄さんがいたんだですよ、14歳離れたね、兄さんが働いていたんです、その上、お母さんもどんなことやってたらしいですよ。育ったのは大阪ですよ。44年までだから、12歳までかな。小学校はそこで終わって、国民学校。44年に樺太に来たんです。なぜというとな、ここにね従弟がいたんです、兄さん。そのこと、戦争時代だから、食料が足りなかったんですね、配給で、一人もらっても、大阪は大きいところだからかもしれないけど、半月もたないんですよ。そして、お母さんもそのころになったら、買い出しに行くんですよ、大根とかサツマイモとか、ジャガイモとかです。ご飯に混ぜて炊いて、食べさせてくれました。父親は病気だったから大したことできなかったし。僕の記憶にある以上は、働いていなかった。お母さんは、雑婦みたいなことをやっていたけど、あとで、兄さんが仕事していたから、お母さんは、兄さん儲けた金で地方へ行って、食べさせてくれた。

—ご兄弟は何人いらっしゃるのですか？

兄さんと僕と妹の三人でした。

—樺太へは一家でいらしたのですか？

そうです。なぜなら従兄がいたので、手紙でやり取りをやっていて、兄さんが食糧難のこと書いたらしいでね、そしたら、樺太来なさいって、土地があるからと、借りれる土地があるから、いもでも植えて食べれば腹は減らないって、書いてあって。それで、父さんが乗り気なんだね。そこ行こうって。親がそういうもんだから、兄さんも仕方なく。船で、連絡船で。北海道、青函連絡船乗って、汽車で稚内まで行って、船で大泊まで。

—樺太ではどこで暮らしたのですか？

豊原、ユジノサハリンスク。豊原の街のはずれですね、追分って行ったけど。サハリンスカヤってあるでしょ、そのサハリンスカヤの橋の方。橋渡って、トロイツコエ行くでし

よ、その角のそばのどこ。大阪にいてから、行くと、やっぱしね、やあ、人いないな、さびしいなって。

—寒かったですか？

そりゃあ、まちがない。笑い話だけどね、大阪4月でもあったかいでしょ、下駄でもはいて歩いてるでしょ、戦争時代だから、靴とかはいていないんですね、どうかすれば、あたってもらえるか。汽車のって豊原駅に下りた時に、下駄履きで下りたんですよ。して、また従兄の兄さんがもう一人いたんですよ、駅のそばに暮らしていたんですよ。見てから、びっくりしてさ、家行ってからね、ゴム長持ってきてくれたんですよ。それはいてから行ったんです。そういうことあるんです。

—どんなお仕事をなさったのですか？

そうですね、小作もやったし、うちの従兄がね、牛乳屋って言うのかな、乳牛をたくさんもっている人がいたんですよ、そこで乳をしぼっては、牛乳を配達して、そういうこともやっていたし、畑でいろんなもの植えてから。僕たちもそうして手伝うことになったんですよ。中学一年、一年行ったんだけど、戦争が始まって。乳牛を持っている人のところで働いていたんですよ。牛の世話をしていたんですよ。牛乳をしぼっては会社だか、店だかわかんないけど、持って行って、運んでやって、そういうことやって、それから畑。兄さんも来てからは、母さんもそうだけど、そうしたことをして、一年たった。

—終戦は8月15日と言われてはいますが、樺太では戦闘が続いていましたね。

そのとき終わらなかったですね。8月15日過ぎても、真岡、いまのホルムスクとか、そういうところから、避難民ですね、戦争のため追われて来て、逃げて来て、ちょうど豊原に逃げて来て、炊き出しって言うのか、そういうのやってみたいですよ、日本人の人たちが。

—「真岡の9人」の話もありますね。

そういう話も聞いたけど、私は小さかったから、興味はないですね。真岡かどっかでそんなことあったって、聞いたけど、ほんとだかうそだかわかんないし。僕は12、13歳だもの。戦争って、そういうことはなかったですよ。豊原では。戦争って言うと、私の中では鉄砲撃ったりすることなんだけど。空襲、一回、戦争終わる前ですね、ロシアの飛行機が三機だったかな、落としたんですよ、郵便局だかなんだかに、書類が入っていたらしいですね。駅の南側の方、爆弾だか焼夷弾だか落としたって。

—ソ連兵が来たのはいつですか？

ソ連は行ってきたのは、22・3日ころでないかなら、記憶にないけど、それくらいでないかな。もっと遅かったかもわかんないけど。

—朝鮮人は引揚では帰れなかったんですね？

うん、日本の人は日本で帰してくれって言って、帰ったけど、朝鮮人は、朝鮮人の人はね、日本人と暮らしている人は、帰るってなったんだけど、帰れなかったんですよ。どうしてわかるかって言うと、僕の従妹が日本の奥さんだったんですね、日本へ帰るって言って行

ったんだけど、47年だったと思うけど、ホルムスクで、見つかって返されたって。そんなことあったんです。

—戦後の国籍はどうになりましたか？

戦後は無国籍ですよ。ロシア国籍はね、91年だか92年にとったんですよ。それまでとれなかった。はじめのうちは、とれるようだったし、子供だったし、また韓国へ帰りたかって気持ちがあったし。

—やはり、チェジュドへ帰りたかと思いませんか？

チェジュドじゃなくても、韓国へ帰りたかって。

—祖先の土地じゃなくてもですか？

いえそれはね、考えましたよ、僕の考えでは、韓国へ帰ればチェジュドへ行けると、どうしてかという、住所わかってたんですよ、韓国だけいけばチェジュドへ行けるって。

—戦後はどんな仕事をしましたか？

仕事いろいろしました。事務をとったこともあるし、労働したこともあるし。してあの、ブラブラしててね、勉強しなきゃだめだなって、そのころ、クレーンってあるでしょ、勉強しなきゃだめだって、夜学に入ったんです。その頃、ユジノサハリンスクに何があったかって言うと、朝鮮人学校があったんですよ。そこで夜学やったんです。最初はもう、歳が27・8歳になってんだけど、何にもわかってないってことで、4年生に入れられたんですよ。日本の勉強少ししたけど、朝鮮語もわかんない、朝鮮語わかってても字がわからない、ロシア語もわからない、そういう人たちが集まって、4年生って言うのを作ってはいったんです。先生たちは、ロシア語もよくわかんないし、舌もよく回らないってことで、一年生の習う、ロシア語の本もってきて、習わせたんですよ、でも、僕たち大人だから、なんていうか、一年間で、4年の課程を終わらせたんですよ。それで、ロシア語少し習って、もうやめた人もいるけど、上に行った人もいて、僕は中学一年まで歩いた関係で、他のことは、言葉はわかんないけど、歴史だとか、物理だとか、数学だとか、みんな同じですよ、言葉が違うだけで、その関係で、僕は7年生に入って、10年生終わって、そして大学へ行ったんですよ。大学と行っても通信科。クレーンの運転やってたって関係で、機械の関係の方へ行ったんです。僕が10年終わったときが、1964年で、通信科はね、6年なんですよ、そして、終わったのが1970年。

—結婚はすでになさったいたのですか？

もう、子供もいたんですけど。

—奥さんも朝鮮人ですか？

うん、そうです。

—布施には朝鮮人部落はあったのですか？

うんそうでしょうね、だけどね、離れたところにいたこともあるんです。ひとどころにいたんだでなく、あちこちにいたんだから。

—豊原ではどうでしたか？

それはわからないな、あったんだか、聞いたような気もするし、朝鮮人部落ってたいしてなかったんでしょうかね、私たちは日本人の中で暮らしたんだから。

—布施では朝鮮人ということで不愉快な思いをしたことはありますか？

小さい時はなんでもなかったけど、ちょっと大きくなるとあったことはあったんでしょうね。それは、朝鮮からね、ひとり転校してきたんですよ。僕たちより年上だよな、そんなときあとは、全然なかった。大きい人だから、馬鹿にできないからって。

—ソ連時代はどうでしたか？

うーん、普通の人たちとは仲良かったですよ。だから、僕たちが苦勞したっていうか、僕たちは無国籍だから、そして、ロシアでは、そういう担当の警察官がいるんですね。その人たちが馬鹿にしますから。行くと見るんですよ、頭の黒い人見ると、パーっと来るんだ、バス止めて、上がって来て、頭の黒い人だけ、パスポート調査するんですよ、ロシア人の人は黒い人いないからね。それとやっぱしね、一番、なんていうか、馬鹿にしているってのは、僕がおっきくなってからなんだけど、ぼくたちのいるところからね、ハムトーって村があるんですよ、部落が、そこに甥が暮らしているんですよ、甥がいつも来るんです。甥はロシアのパスポートを持っていたから、自動車を持っていたんですよ。遊びに来ましたよ。街の中を歩いて行くと、時間がかかるのはわかっているんですよ、したけど、僕たちの方からまっすぐ、なんだ、トロイツコエ、そこへ行く道を行けば30分から1時間くらい節約できる。行くんだけど、その途中で、アニワ湾のところを歩いていけないんですよ、いつも警察官が立ってから。そういうことなんです。そしてから、腹たつけど、仕方ないんですよ。仕事は、なんとというか、韓国人は仕事をよくするんですよ、だからね、会社の方では韓国人をよく見てくれるんです。だけど、このこととパスポートのために苦勞しましたよ、結婚式とか、わかっている人死んだとか、葬式とか、行けないんですよ。なぜなら、結婚式なんか、一週間前に願書を出さないとだめなんだ。こういう理由で行くから、許可してくれって。だけど、その人たちの気持ち一つで、いいってときもあるけど、だめなときもあるんだ。僕たち賄賂のことなんか考えなかったね。賄賂ってお金でしょ、そんなお金ないですよ。その日暮らして、給料もらって、子供たちと食べているってあれだから。

働くのはね、どこでもいかったんですよ。ただし、始めのうちは、70年まではよかったです。69年度かに僕は会社に行って事務をとるようになったんですよ。やっぱり大学を歩いているってことで。そのころ大学終わっている人、大していなかったから。大学は国籍関係なかった。試験に受ければ誰でも行けた。

—北朝鮮国籍は取得しましたか？

北朝鮮は行けたんですよ、国籍なくても行けたんですよ。北朝鮮は。そういうことあったんですよ。僕たちもいつかな。50年度くらいかな、北朝鮮から来て宣伝もしたし、映画なんかも持ってきて見せてくれたし、だから、朝鮮の小説なんか持ってきて、売ってたし。朝鮮、同じ朝鮮だから行ってもいいんでないかって、国籍をもらったんですよ、もらって

みたところが行くなかった。もらったところで行くなかった。それであとで、捨てちゃって、そして今度、無国籍に戻って。いつかな、55・56年にもらったのかな、記憶ないけど、無国籍になったのは、僕大学入ったから、そのころかな。

—どうして北朝鮮国籍を廃棄したのですか？

理由は簡単なんですよ、僕の分かっている人がたくさん、北朝鮮へ行ったんですよ、それで聞いたところ、苦勞してるって。苦勞するところわざわざ行く必要はないって。ロシアでは食べ物とか、仕事とか、不自由ないから。仕事して金儲けて、なんでも買って食べることに出来るって。それに、話聞くと、北朝鮮の人たちは、僕たちがサハリンで受けているようなパスポートの制限があって、どこでも行けないって。ロシアはもう、ロシアの国籍のある人はどこでも行けたから。僕らは無国籍だから、どこへも行けなかったけど、北朝鮮は話を聞くと、北朝鮮の人たちも動けないって。そういうこといろいろ考えて、だめだろうって。ロシアのどこ行って、パスポートを無国籍にしてくださいって。北朝鮮へ行った人、いっぱいいるんですよ、手紙なんかダメなんですよ、行った人たちは子供たちからいろんなこと聞いてくるんですよ、聞いて来てはサハリン来て話すんですよ、あそこはどうだ、食べ物はどうだって。サハリンからね、子供たちが北朝鮮へ行った人がいるし、友達が行った人もいるし、みんな会うんですよ、話しているうちにそういうこと秘密なんだけど、秘密なんだけど、そういうこと少しずつ漏れるんですよ。来ては、僕たちに話してくれると。

—若い人が中心に北朝鮮へ帰国したのですね。

若い人たちが行ったんですよ。そんなとき僕はわかんないけど、若い人だけ行ったんですよ、若い人たちを、宣伝してさ。大学とかね。

—家族全員で帰国するにはすすめて来なかったわけですね。

言わなかったね。だから、宣伝するってどうするかっていうと、10年終わらなくていいと、9年でいいと、北朝鮮へ行けば、みんな大学に入れてやるって。みんな勉強したくて、行ったらいいですね。やっぱりロシアもそうだけど、宣伝がいいんですよ。そして、その宣伝に乗っていったら、子供たちが行った人たちの親たちが、北朝鮮へ行った人たくさんいるんですよ。

—北朝鮮へ帰国しようと思ったことはありますか？

はじめはそうだったんですよ。なぜなら、僕の考えでは、北朝鮮も朝鮮ですね。まだ若かったから。北行ったら、どうにかなるだろうって、もらったんですよ、北朝鮮籍を。したけど、話を聞いたら、もう、僕はもう家族も、子供たちが生まれて、行っても苦勞するような気がしたから、ここで子供を育てたらいいなって、子供たち、大学を終わるようになったか、入る時に、無国籍にしたと思います。ここで勉強すれば、ここでもどうにかなるって。

—ソ連国籍はなぜ取得したのですか？

それはね、国籍ないと辛かった。そのころたまたま日本の企業がたくさん入って来たんで

すよ。通訳に何回か、行ったんですよ、そして僕わかんないんだけど、千島へ行くことになったんですよ、話したところが、願書を作ってくれて会社で、この人は無国籍だけど、千島へ行かないとだめだって、許可してくれて、その願書を持って警察へ行ったんですよ、そしたら、なしてこんな苦勞するのかって、ロシア国籍出さなさいって、そう言うんですよ、ああ出せるんですか、と。なぜなら、それまで10年以上、ですね、いろんなもう願書を出したんですよ、政府にも出したし、そのころブレジネフですね、ブレジネフにも書いたし。いろんなとこ書いたんですよ。それでも、駄目なんですよ。したっけそのとき、ロシア国籍出さなさいって、そのとき言われたんですよ。そしたら、出した方がいいなって、なぜなら、通訳やると、あちこち行かないと行かないといけないから。それから、あちこち。

一ソ連時代はどうして国籍が取得しづらかったのでしょうか？

サハリンでは僕たちの歳では、あまり取れなかったんですよ。なぜなら、よくわかんないけど、話を聞くと、日本語わかるって、日本の勉強したってことで、若い人たちはとれたんだけど、親はとれないんだよ。だけど、うちの娘はイルクーツクの大学で勉強して、そこでとったんですよ。僕たちにはくれなかった。

何故なら僕たち年上の人たちは、みんな無国籍なんですね。戦争でも始まったら、言葉がわかるから。そういうことでないすかと思いますよ。話聞くと、僕たち手紙出すでしょ、日本へ。そしたらみんなKGBへは行って、みんな開けて読んで。なぜなら、もう亡くなっていないんだけどね、僕の友達がロシア国籍で、なんちゅうか、共産黨員なんですよ、それで一回呼ばれたらしいですよ、KGBに、お前注意しないとイケないぞって、お前兄さんが日本に手紙を出しているって、できるだけ手紙を出さないようにしろって。サハリンに自由に行けるようになったのは、ペレストロイカからで、それで、日本の人が通訳を欲しがったね、日本の人は日本語しかわからないから。そういうことで、僕たちも働くようになったんですね。

最初からくれないわけではないですよ、最初はくれたらしいですよ、だからもらった人いますよ。おかしの年頃のひとたちは無国籍のひとたちが多かったですね。もらった人もいますけど。何がぼくたち、なんていうか、ソ連の国ですよ、だめだと思ったのは、僕が大学を歩いているとき、そのときサハリンに大学なかったから、大学を歩いているって言うので、僕にある会社で、きみ事務をとってくれないかと、それで事務をとるようになったんだけど、71年度に大学を終わって、仕事するときに、急に、きみ他の課へ移らないかって言われてね、僕はなにしているかという、研究所というか、新しい機械を作ったりするところで、仕事してたの。大学終わったばかりだっていうことで。機械のことわかるって。急に社長が呼んで、きみ別の課へ移らないか、事務の方って。僕はそういう嫌いだから、いやだって言ったんです。そして、結局いやだって言うから、だされたんです。それで他の会社へ行って、会社行って今度、卒業証書見せて、どういう仕事をしたかという履歴書も見せて、きみならいいって、言うんです、そこで、人事課ですね。パスポート見

せれて、パスポート見せたら無国籍でしょ、いいから明日来なさいって、社長と話してから、引き上げるって。次の日行ったら、昨日、社長が他の人と話して、決めてしまったって。そして、何か所か歩いたわけ、そしたらみんなそういう条件なんです。後で聞いたら、無国籍でいい仕事をしていた人はみんな出されたらしいですよ。また昔のように機械の方に行ったんですよ。やっぱり会社では見てくれるんですよ、この人は大学終わったし、わかってるところもあるからって、見てくれるんです。労働やっても、激しい労働の方は行かせないで、楽な方へ、機械を見るとかそういう方へやってくれるんです。仕事は楽だった、同じ金をもらっても、他の人よりは。

—ソ連国籍はいつ取得したのですか？

92年だね。そんなときはすぐに出してくれたんですよ。それよりも、サハリンの知事がいたんですよ、ソオロフっていう。ゴルバチョフがやって、ソ連が崩壊して、そんなとき。それまでは大学を出てもくれなかった。そして、大学終わって、ソ連ではどういうことやったかという、大学終わると、どこどこ行けて、決めてくれるんですよ。どの町のどの会社に行けて。体だけ行けばいいんですよ。職場もあるし、宿舎もあるし。ロシアの無国籍ってのは大学ではないから、してくれるんです。して来たのが、サハリンだと、駄目なんです。話聞くと、そんなとき第1書記が、リョーノフだったんですよ、その人が、朝鮮を大して嫌いだったらしくて、その人が命令したらしいですよ。無国籍だとか、外国籍の人は指導する職業についたらだめだって。だけど、社長たちは、そういうこと言えないんですよ、僕たちに。人種差別とかそういうことだから、ああだ、こうだって言うんだけど。おかしいなって。で、ロシア人たちも仕事しないんですよ。全部、国有財産でしょ、工場から何から、仕事っても、8時間つとめればいいって、それだけなんです、だから仕事しないんですよ。僕らたち、上の方で少し、ぼくたち見ているものだから、わかるんだけど、工場一つの工場で、計画が来るんですよ、自動車100台作れて、簡単に言うと。そしたら、仕事うまく行って、102台作ったと、100%以上ですね。そしたら、社長はどうするかって言ったら、私は100台作りましたと、あと2台はとっておく。なぜかっていうと、何か起きたりすると、少なくなるから、そのためにとっておくんですよ。そういうことするんですよ。

—お子さんはどうしていらっしゃるのですか？

3人。娘一人と息子一人いるんだけど。娘と息子はユジノサハリンスクで暮らしているし、下の息子はモスクワにいる。まだ行ったことないけど。

—大陸へは行ったことはありますか？

勉強するときにちょっと行ったけど、それからは行ったことないですよ。だって、行く必要ないから。

—奥さんはどこのご出身ですか？

濟州島の出身で、その親が濟州島の男でないとだめだって、私が濟州島だって言ったら、結婚させてくれたんだけど。

—お子さんの結婚相手は韓国人ですか？

みんな韓国人なんだけど、済州島ではないんだ。2世の。子供たちは誰と結婚しても、何にも言えないでしょ。昔だら、親がなんだって言って済むんだけど。僕らの頃は、親がこうすれって言えば、はいはいて聞いたけど。今の子供たちは、言ってもきかない。

—ロシア人と結婚する人もいましたか？

いっぱいいましたよ。いま、たくさんいますよ。

—永住帰国に対してお子さんたちの反対はありましたか？

子供たちはね、自分たちが帰国するって言った時、行かない方がいいって言うんです。父さん母さん食わずこと出来るし、行くなっていうんです。

—永住帰国はいつですか？

2000年度に。2月23日に来たんです。二人で。そうですねいまも二人。たまに孫は来るんです。暮らしが楽でないから、なかなか来れないし。僕たちもそうでしょ、生活費をもらってるから、チケット買う金はないんですね、それでも、経済経済して、少し貯めてから、サハリンへ行くけど。こっち来てからね、2回は無料で行って来たし。日本の方で金を出してくれたし。

—サハリンでの生活は大変でしたか？

そうですね、本当はぼくたちそのためにね、ここへ来る決心したんです。僕たちこれからだんだん歳とって行くでしょ。そんなときまだ少し働いたら、自分でも儲けるってことできるけど、もう少ししたら、動くこと出来ない、金儲けれない、年金だけではまかなうことできない。こっちくれば生活費も出るし、住む家もあるし、ということで、そして、歳とってくれば、子供たちにも負担かかるでしょ、それで二人で決めて、子供たちは行くなっていうけど、僕たちは来たんですよ。そんなときはひどかったですね。だから、僕たち来る頃もね、こういう文化住宅って言うのか、暮らしている人たちはね、年金もらっている人たちはね暖房代とか出せば残らないって。いま自分は動いて働いているけど、もう少しして働けなくなったら、どうなるかって、そうでしょ。そしたら子供たちに負担がかかるってことで、やっぱり、韓国へ行った方がいいって。そして僕たち来たんですよ。今でも年金もらっている人は全然辛いですよ。本当に話聞けば、黒いパンかって、牛乳を飲むくらいの金しか残らないんだって。

—ここでの生活はどうですか？

ここでは、食べていけるくらいの生活費は出るんですから。やっぱり、生活費ですよ、国家でも考えているから。医療はたいがいただなんですよ、でも大きい手術はかかるって。金出せていってもないんだもん。

—ここ以外にも永住帰国者が暮らしているところはあるのですか？

ほかのどこにいるんですよ、他の街に。

No.6 李世鎮 1931年4月28日 恵須取生

(聞き手:三木理史・金鎔基・中山大将)

名前ね。イ・セイジン、日本語で書くと李世鎮です。1931年ですね。誕生日は4月の28日ですよ。ところがね、うちのおやじが山でもって、造材で、来れなくて。5月20日に役場に行って、5月20日になっちゃった。5月20日には海軍記念日でしょ？今でもね、5月20日生まれです。78歳です。

いろんなね失敗がありましてね。元気そうに見えてもいろんな病気がありますよ。いろんなね、治療がね無料なんです。ところがね、国家からお医者さんは給料をもらっていますから、患者さんが来てあんまり親切じゃないんですね。それで勉強も足りなくて、学校を卒業しただけで、医者だって、仕事しているんですから。勉強足りなくせに、傲慢であんまり親切ではない。それが定評ですよ。社会主義国では。それで、学校の先生とお医者さんの給料は安いんですよ。今でもね、あんまり親切でもない。病気って、いろんな原因がありますしね。診察するっていったら、いろいろ難しいもんですよ。相当、せっぱつまった病気でないで病人と認めてくれない。病人って認められれば仕事しなくても70%の給料は出るんですよ。有給休暇をもらえるんですね。ところこそそれが、ない場合は死に物狂いで仕事をしないとけない。

だから、いろんな慢性病があってもね、なかなかそのつかめない人が多いんですね。いま、東洋医学を勉強するようになって、27年目になって、独学ですから、ほとんど日本の本で100万円以上、高いですよ。東洋医学の本に出てくる漢字というのは本当に難しく、普通の中等教育や高等教育では理解できない漢字がいっぱい出てきます。いい加減な理解をしちゃうと、僕はお医者じゃないから、自分のことだから我慢できますけど。やっと本の半分以上がね、書いていることが理解できるようになりました。半分以上でも大変なもんですよ。それは一冊の本を、何百回もね、時間をおいて繰り返して読んで、何十冊と読みました。それで少しわかった。それで若い時の失敗がいっぱい出てきたんですね。体格がよかったからね、運動がよくできたんですよ。走ったら、6年生を追い越して、一番になってね。それから、運動会で800mで一番乗りだったからね。それから、若いもんと走っても、三番目には入ったりね。スポーツの冬のスポーツの、冷たい空気が肺に入るのは、体によくないんですよ。それであの、いま考えますと、よく、よく走って、早く死ぬ人が多いですね。みんな肺でやられているんですね。で、スポーツやっても決して、健全じゃないね。方一方で怪我をしている。早く死ぬ。この間も世界的に有名な、よく走っている、亡くなって。七十何歳かな。結局、みんな肺でやられてる。

—生まれはどちらですか？

樺太の恵須取です。これはアイヌ語から来たんですね。

—お父さんは朝鮮半島生まれですか？

もちろんその通り。お母さんも。北朝鮮の平安南道。それで金持だったらいいね。代々。何をやってたかという、船で以て、平安南道の農作物を船に積んで、朝鮮半島をひとまわりぐるっと回って、黄海に出たから、元山で、農作物を売りさばいて、海産物、水産物を積んでまた戻ってきて。まあ、うまくやっていて、お金がなんぼあるのか、わからないほどの金持ちだったんですよ。ところが、あの、暴風雨がありますね、台風。それでもって、船が難破して、人も亡くなって荷物もなくなって、おじいさんはがっかりして、人も死んだし、酒を飲んで、中風にかかっちゃって。して、いまでも治せない病気で、お金を相当使って、そこにまた女

性にも弱かったからね、女性と裁判にかかったりして。

それで身代ボロボロになって、お父さんが小学校 2 年生くらいまで通って、それ以上勉強できなくて、お父さんが、お父さんのお兄さんになる伯父がね、人力車の後押しをやったんですよ。人力車の。そういうことをするようになって。

それで、その伯父さんが日本軍が、シベリア出兵のその頃に、アメリカにも地図を見たら歩いて行けそう、ということで、ノコノコ出て来て、ハバロフスクまで行ったら陸軍がちょうど来ていたんです。それで、アメリカに行くのが駄目になって、日本軍と一緒に行動して北樺太に行くようになって、北樺太にね、軍隊が地図を作る専門家が出て、測量の器械をしょって歩いたりしてね、荷役の仕事をしたんですよ。北樺太で。それで、そこから南へ下りて、恵須取へ行ったんです。

そのころ、恵須取は開発を始めまして、木材が、林業がたくさんありまして、木材利用して、パルプ工場がすごく建てられたんですよ。で、景気が上がってきて、伯父さんがそこで、弟の自分のお父さんとか呼んだんですよ。うちの親父は京城で自動車学校を卒業してから、貨物自動車の運転できる免許をもらったんですよ。その頃は運転手って多くなかったですからね、樺太に来てから、トラックの運転をやりながら、伯父さんの家事を助けたり、夏はトラックで木材を運ぶし、冬は馬で造材ですね。それでお金をもうけたんです。普通の人よりよけ儲けるようになって、それで大家さんになって、家をあちこち買って。日本人を入れて。冬は自動車が通れなかったですから、客馬車というのがありました。いい馬を持っていて、競馬大会で、樺太で二番に入りました。いい馬を持ってね。恵須取から珍内、久春内へ飛ばすんですよ。お客さん四人を乗せてね。帰って来ると大金が入って来るんですよ。それが冬で、夏はトラックで。日清戦争⁵になってから、部品があんまり入らなくなってから、国産の自動車の会社、部品を売る店を開いて、二年くらいそれをやって、私が小学校に入って、三年生になった時に、親父が造材で山に行ってるし、母親は妊娠して朝鮮半島に行っているし、あのとき米もなくなって、砂糖もなくなって、それが昭和 15 年頃です。今度はお金が必要になったので、妹が下に二人いたんですよ。米も買わなきゃいけないし、お父さんは山だし、お母さんは朝鮮半島だし、誰もいない。自分で米を食わないといけないし、朝早くから、納豆売りをしました。あの頃はひとつを 5 銭で仕入れて 10 銭で売りました。売れたら 5 銭持っているんですよ。大金でした。10 売れば 50 銭ですね。20 で 1 円。小学 3 年生ですから、毎朝朝 5 時に起きてもうけたんですよ。米買ったり砂糖買ったり。親父が夏に帰ってきてから、うちのお袋もないから、女郎屋に通うようになって、お前の息子は納豆売りしてんだぞ、お前はなんぼお金があるんだと、5 円か 10 円くらいあったのかな、それを国家に寄付したんですよ。国家というとそのときは軍部ですね。慰問袋を作ったり、陸軍大臣、東条英機の前ね。感謝状が、新聞にも出ましたよ、このくらい。

— 寄付したのは李さん自身ですか？

僕が寄付した。お父さんは恥ずかしくなって。それが、8 月くらいかと思います。恵須取の、時事新聞。恵須取の。あそこね、私の先輩で、あとで『北緯 50 度』とかいう本を書いた人がいるんですよ。戦後捕虜になって。恵須取小学校で、一校、塔路一校、で、最後に豊原尋常小学校、その頃、国民学校っていました、二個卒業しました。一校のときも、組長にさせられました、信用がありましたから。塔路言っても、組長やって、6 年来ても組長やって。それから、今度は塔路一校に悪い先生がいてね、非常に朝鮮

⁵ 第一次世界大戦のことか。

人に対してものごく差別的なそういう、先生も 4・5 人いたんですね。それでその、あそこには朝鮮人も、5 年生で勉強している、年が一歳二歳多いのが多くて、勉強もよくして、体格もいいんですね、馬鹿にされればやっつけてやるしね、先生は気に入らなかったんですね。無条件に馬鹿にするんですね、日本人の子供たちは。

で、炭鉱で、塔路という街は日本でも有名な炭鉱街だったんです。一日に 3,000 トン、他の会社も住友商事も一日に 4,000 トンか 5,000 トンを出して、学生さんがね、3,700 人か、2,900 人くらいまであったんですよ。小学校、国民学校。日本一だったんですよ。日本一が釜山にあって、釜山が 4,000 何人。それで第二位が塔路だったんです。塔路一校、有名だったんですよ。戦争時代、国民学校ですね。高等 1 年 2 年もあったんですよ。

景気がいいってわけで、僕も勉強していたし、うちの妹達もよく勉強していたけど、塔路は景気がいいっていうんで、うちのお父さんが、顔が広くて、字を筆で書くのがすごく達筆だったんですよ。足で、もってつまんで書いたり、上手だったんですね。それで、口が達者で。テコンドーってありますよね、二人テコンドーやる人と、7 人くらい日本人がかかってきても、どうにもならなかった。運転手やってるから、知っている人がたくさんあった。サクタン、西柵丹という炭鉱街がありました。そこにお父さんの知り合いの人が、飯場を持って 400 人くらい労働者を、韓国人の労働者がいて、労働者はみんなお金をもっていたんですよ。朝鮮人は知識がないんで、銀行とか貯金とか、郵便局に貯金するとか、しないでね、飯場でみんなお金を持っているんですね。飯場でもらったお金。飲食費とかをさっぴいてね、大金を持っているんですよ。それで金を借りて、塔路に女郎屋を開いたんですよ。

そのあとに、もう一人の韓国人がお父さんの後を継いで、入ってきました。そこは末広町というところで、日本人の女郎屋が 4・5 軒ありまして、韓国人の女郎屋も 2 軒あって。戦争時代ですから、大東亜戦争の始まる前に、景気が良かったんですよ。日本は油はなかったけど、石炭はあったから、軍艦が動いていたらしい。で、お金をもって、2、3 年で借りたお金を返したんですよ。ところが、44 年度にですね、閉山して、塔路の炭鉱が、なぜかという、戦争で日本の敗戦の色が濃くなって、石炭を日本へ運ぶのが危険になったんですね。それで、炭鉱を閉めて、閉山して、当時そこには三菱という会社がありまして、鐘紡、それに王子もありまして、三菱の会社が閉山して、三菱系の半分くらいは九州に行って、残りの半分は同じ会社の三菱の、内淵の、あれも三菱系なんですよ、内幌、これも三菱、そういうわけで、営業できなくなったので、店を閉めたんですよ。私は中学校の一年生で、夏休みに帰ってきたら、店閉めて、お父さんもいないし、弟はジフテリの病気にかかっていたんですよ。それも、お医者さんが悪くて、ジフテリとみていなくて、のどが痛いから、扁桃腺とかって、いって。そして、いろいろしていたけど、そのうち、息が苦しくなってきた、死にそうになった時に、別の街へ移ったんですよ。そしたらもう手遅れで、死んだのを何回も注射で蘇生して、手術は、どうやら成功したようだけど、1944 年度の、昭和 19 年度の事です。8 月です。それで、うちは塔路でしたから、塔路中学校に入って、どうやって入学したのか、という、塔路の校長先生がね、中学校入るためにはね、いい、推薦状をくれないっていうんです、朝鮮人には誰にも。木村って先生がそれをわかって、あなたの息子さんは一番だから、絶対に樺太の中学校でなくて、北海道でもなくて、東京近辺の優秀な学校に転校させて、そこからとんとん拍子に成功しなきゃだめだと、そのための能力もお金もあるんだからと。ケチケチするなど。それを聞いて親父がびっくりして、それで塔路を飛び出して。豊原に飛び出し

て、そこで泊まって、日本の旅館ですからお盆に持ってくるんですよ。それで、二人分と知らないで、食べてしまったんです。戦争時で切符の時代ですから、誰だと、うちの伯父さんが米がいるなら、うちへ来いとなって、本州へ行くのはやめになったんです。

それで、転校して、いい成績で入りました。一番乗りでしたよ。「秀」が、ふたつあったんです。修身と歴史です。「優」も多かったんですね。数学もやったし、剣道も柔道もやりました。剣道は、小学校5年生のころからやりました。スキーも、ジャンプも空中展開を300回くらいやったんですよ。戦闘機乗りになる夢があったんですよ。戦争時代だから、軍人になるのが一番よかったでしょ。

中学校に入ってから、下宿へ行くようになりました。寄宿舎はいじめですよ。いつも緊張してなくちゃいけない。下宿には十数人いました。それで、上級生がいるから、緊張しなくちゃいけない。僕の部屋にも上級生がいて、倉持金蔵っていう。幸いにその、何がよかったって、中学生を腹を減らしちゃいけない、と、それで、カボチャをたくさん、買ってきて、カボチャのお粥とかいくらでも食べさせてくれて。戦争時代にね。でも、蒲鉾、竹輪ってのがありますね。下宿が、魚のおろしとか、そういうのをちょっとやっていたんだよね。朝起きたら、玄関に出て、魚場に行って、鯿だとかそういうのを持ってくるんですよ。一週間に一回は、ライスカレーね、山盛りで、腹がボンとしますね。浅野っていうんだけど。ご主人はね。気のいい人で。中学生の腹をすかせちゃだめだって。

下宿に入ったのが、45年の4月。入った時には、戦争時代によく、戦争に引っ張られていくでしょ、徴兵で。娘ふたりがいたのに、千島かどっかに行っちゃって。よく食わしてくれる下宿があるってんで、1か月5円で食わしてくれるって。そこ行って、下宿屋のちょうど真向かいに銭湯がありました。銭湯ね。で、中学生は5時半ころ起きて、公園まで走るんですよ。それから予習、朝ごはんを食べて、学校へ行って、行くと、講堂でもって、必ず集まって、朝礼で、朝礼で何をやったかという、軍人勅諭というのをやったんです。あれは長いんですよ。それをね、書くんですよ。長たらしいんだけど。こうやって読むんです。それを忘れると、教官ってのが5人くらいいて、将校だけでも2人いて、あと下士官。竹刀を持っていて、忘れてくと、頭からやるんですよ。どーんって。それで、毎朝、朝礼ってのがあってそれが終わると、教室に入るんですよ。中学校にはいって何か面白くなかったかという、いつも緊張してなくてはいけない、それから、掃除とかそういうのは全部自分でやるし、一日柔道、一日剣道、昔あの、通信簿に、教練ってのがあったんですよ。それと別に柔道、剣道があって、体操があったんです。僕は、体操が得意で、柔道も得意で、寝技もやるしね。剣道は小学校のときからやっていたから、4年生にもんでやるから、と言われても反対に僕につきで、ぶっ倒れてね。こっちはね、腕力があったから、左手でやると、今でもロシア人は負けますよ。剣道の先生がね、剣道六段で、吉川英治っていう、それかから、サイトウ吉ロウっていう柔道七段の先生がいて、柔道七段っていったら、北海道でもいなかったらしんですよ、仙台から北には。御前試合にも参加したことがあるって。

中学2年のときに戦争が終わって、戦争が終わってからね、ちょうど、戦争が終わるころね、豊原に神社通ってのがあって、いまコミニステスキー通りっていうですね、その神社通りをね、疎開したんです、大きかったですよ。そのために、下宿がつぶれて、お風呂屋もつぶれて、そして、道路を拡張した。そこへもってきて、草刈りをしなきゃならんと。中学に入ったはいいいけど、勉強さっぱりしないで、勤労働員ばかりで、寄宿舎へは行きたくない、転校届を出して、家へ帰ろうと。で、家へ帰ったら、ちょうど7月頃でした。いまはも

う負けたからと。

昭和 20 年の 1 月に父が来て、弟が死んだのかと確認して、現鎮を、僕は日本名を高松隆一といって、弟が隆二、で、韓国語では現鎮、それが死んだと。親父が日本が負けたから、国へ帰るからと。ちょうど荷造りして国へ帰るんだと。日本はもう負けたから、どうせ死ぬんなら、故郷で死ぬと。そういうつもりだと。荷造りをして待っていたんだよね。そしたら、中学生はみんな、選炭場で働いているんですよ。

そこで、一ヶ月くらいぶらぶらしているうちに終戦が来て。とくにか、避難命令が来たんですね。うちの妹が三人いて、妹 3 人と、70 何歳のおばあさんがひとりいて、姉がいたんです。トミエといって。大阪の病院で、2 年くらい産婆の勉強をしていて、倉庫の梯子から落ちて、背骨を折って、二年間ギブスで、同窓生が看護師をしてくれて、それでどうにもならないからと戻って来たんです。カタワですよ。何もできないから。避難するときもしょうていかないといけない。僕が背負ってあるいて。それから、女中さん二人とお母さん。避難命令を受けて、お母さんと妹が先避難したんですよ。塔路から大平へ。今は、ウダノイ。そしてから、茶々、上恵須取。上恵須取で空襲にあうんですよ。相当死んだんです。機銃掃射は、一発あたると馬でも死んでしまいますよ。それで、私は後をおって、珍内というところへ行って、そこへ行ったら、妹たちが学校で避難していました。途中で、道に迷ったおばあさんを拾って、かついで行くわけにはいかないから、リヤカーを借りて。一日ね、24 時間寝ないであるいて、ひどかったですよ。

その頃は幸い夏だったからね。冬だったら、しばれて死にますよ。山の方を歩いて。恵須取の方にトンネルがあったんですよ。トンネルが低いんですね。それをね爆破してしまって。将来、鉄道か何か敷く予定だったみたいです。恵須取ってところはね、昔、恵須取の南に炭鉱がふたつあったんですよ、天内、山天内と下の天内。山天内には発電所があって、小さい発電所が。間には直線の山道があるんですよ。そこで、とれた石炭は、天内までおろして、日本へもっていったんですよ。石炭の質がよくなかったんですよ、でも、量はとれたんですよ。鉄道はね、計画はあったんです。珍内までは計画があったんです。ロシアも発電所をそこに造るべきだったんですよ。ロシアの地質学者の失敗ですね。とんでもない所に 2 か所つくってしまって。

そこから、逆戻りしたんです。塔路へ。なぜかって言うと、ブルカーエフっていう、中將が命令したんですよ。元のところへ帰って。避難する時は日本人もみんな。バスもないから歩いて。

8 月 15 日ごろですね。8 月 6 日ごろから、避難を始めました。戦争が終わって、9 月上旬ごろに、みんな家に戻ってきました。帰らなかった人もいるけど。で、塔路の街は盆地だから低いんですよ。低いんで、ちょっと穴を掘ると水が出てくるんです。避難する時には、日本人が警防団で火をつけたんです。火をつけて、塔路の街は放火されたんです。帰って来ると、みんな燃えて何もなくて、その辺に穴を掘って、ドラム缶を突っ込んで、下が水が出てくるので、ドラム缶が浮くんですね。そこに食器とか、いろんなものを入れるんです。上から見えます。戻ってきても何にもないから、みんなそれをほじくって、泥棒していくんです。後から来た人は、うちもやられてしまって、何にもないんですよ。警防団が火をつけたのは、サハリンでも恵須取と塔路だけだったらいいね。放火したんですね。山の方を逃げたのは、陰しいと言っても道がありました。家もあったし。海岸側が地形が陰しんですよ。

塔路に帰る途中で、いきなりロシアの兵隊がね、僕は中学校の制服でしょ、カーキ色で兵隊みたいに見える、心配してから、びっこでもひけど。万年筆が欲しいんですね、彼らは。腕時計ないかとか。塔路へ来

ましたら、私の知っている人がね、ロシア語が堪能だったんですね。ロシアから来た人で。その人とは仲がよかったから。鐘紡の官舎で世話してくれて。戦後ね、後始末のために働くと、ひとり10キロの米をくれたんですよ。一日ね。焼跡の後始末で。6人だったら60キロですよ。で、一週間くらいすると、米数俵もらえるんですよ。戦争のときは、米がなくてピーピーしていたのに、どっからか米が出て来て、いっぱいね。あのころは100年間くらい戦争するつもりで、相当、どっか貯めてあったんです。それが出て来たんです。

なぜかしたら、戦争終わったでしょ、貯めておいた米が、1年分か2年分あったんですよ。それから、ロシア人が自分の食料を持ってきていたんですよ、いっぱい。で、そのためにロシア人からもらったりして、それから、米が必要なんで、満洲からね、脱穀していない様なものを持ってきました。自分たちで瓶でつついてね、脱穀したり。どっか、満洲から北鮮から持ってきてね。たかがしれたもんですね。樺太の人口なんて。

うちはね、飯場ってやつがあったから、100人とか200人とか人夫を持っているんですね。それで、労働者を働かせるときに、200人で登録しないんですよ。400人とかって、インキチを言うんですよ。戦争時代に、腹減って、どこのバカたれが、仕事するわけ？そんなに厳しいもんじゃないで、だぶった米があるんですよ、飯場には。電話一本で米の一俵や二表もって来てくれるんですよ。馬鹿な一般の市民はね、ピーピーしてたけど。飯場は親戚がみんなしているから。戦争終わってからは、自分の労働者に殴られたりしたけどね。朝鮮人の飯場はどこか炭鉱にもあるんですよ、荒仕事とかね。

戦争終わって、塔路へ集まったんです。伯父さんがね、みんなで集まろうと。これからどうなるかわからないと。伯父さんも、豊原の家が空襲を受けて、全焼したんですよ。戦争時代に綿とかなかったからね、生糸とかそういうのを加工して、そこから綿に似たようなものを作ってね。そういうのが、戦争の終わる二年くらい前からはやり出したんです、日本では。アメリカが、綿をくれないから。その伯父の工場が全焼したんですよ。日本時代から、ロシア人がいたんですよ、それからポーランド人。敗戦が濃くなってくると、そのポーランド人を、豊原から、喜美内(タンボフカ)というところへ、移したんです。そこへのお寺もたてて家も立ててね、そこへ住めと。収容所ではないんです。沿海州の朝鮮人は、貨車に閉じ込めてね、水もくれないで、病気になるって死んだけど、もっと紳士的だったんですね。いままで住んでいたうちはどうしたかという、日露戦争の前に建った家で、うちの伯父さんが買ったんです。いまはなくなったけど。そのうちに住むようになりました。チェーホフも住んだところ。北豊原にあったんです。ポーランド人はね、伯爵か何かが、独立運動のときにつかまって、サハリンへ連れて行かれたわけです。戦争が終わってからはね、ポーランド政府がその人らの資料がほしいってきました。で、サハリンではね、字に明るい人っていうのは、ロシア人より、そのポーランド人だったんですよ。ポーランド人のうちというのは、大きかったんですよ。牛も馬も飼っていたし。それは壊してしまったんですよ。なんでっかという、ロシア人がねそこに食堂を建てるようになったんですよ。で、その家が邪魔になって。

一戦後は李さん自身はどうかしたんですか？

戦争が終わると、学校は行かないで、生活が苦しかったので。ロシアの軍隊のね、薪切りやったり、冬ですからね、薪がないとストーブも焚けない。2ヶ月くらい通ったんですよ。そしたら、中学生はみんな勉強している。それで中学校の先生のところへ行ったら、来いと。あの頃は、教科書とかなくて、話すだけでね。大泊に中学校がありました、豊原にもありました。でも、バラバラになって、ただ、そこに通っていたという話だけで、転校できたんですよ。入りましたら、真岡中学校だ、恵須取中学だ、というのが一緒に勉強するように

なりました。

そして、46年度の春になって、何の命令が来たかという、鯨場へ行けど。戦後ですね。勤労働員ではなかったことです。ロシアの国ではそれが習慣だったんですね。春秋には。学生さんが勉強しないで、畑仕事したり。僕らはそれを知らないで、戦争に負けたから、日本人を使うんだと。でも、そうでないと。ロシアは冬が長くて夏が短いから、そういう慣習があったんですね。魚場とかね。で、私たちも行きましたよ。春ニシン。どこへ行ったかという、西海岸。西海岸が一番良くて。真岡の北や南。そこで、鯨場で、マスが取れるんだよ、その準備をするんです。そしたら、二か月が経ちます。それ終わったと思って、帰ってきたら、またどこへ行けと言われてかという、大泊の南の方に、札塔というのがあります。そこでは、非常に魚が取れて、昔はクジラも捕れたそうですね。それで、缶詰工場もあったし。150人がね、中学生3年生や4年生が、みなこっちに来て、ポンポン蒸気に突っ込まれて、朝着いたんです。僕は要領よくね、船のちようど真ん中に行き、酔わないように。それで、ぴんぴんしてた。そこで、大泊女学校の人が見かねてね、五目飯を、くれて、でもみんな食えない。もったいないので、僕がもらって、後始末しているうちに、僕は炊事係になって、そのまま一ヶ月炊事係になって。炊事係になると朝早く、4時ころ、晩は11時。睡眠不足で、ひと月くらい苦労しました。そこにはね、缶詰工場があって、200人くらいの北朝鮮からの派遣労働者がいました。そして、彼らが朝の4時ころ起きて、200人分くらいの御飯を作るんですよ。そのあとは、豊原中学校が150人、そのあとに大泊女学校が150人、だからきついですよ。ご飯を炊かなきゃいけない、お吸い物をつくらないといけない。4年生が2人、3年生が2人、4年生がいばってなにもしない。3年生が全部する。ご飯は腹いっぱい食べれるけど、眠れないですね。朝早いし、夜は遅いし。米をうるかして置いておくと、盗まれるので、宿舎でね、樽で飯場まで持って行って。そこで、ご飯を炊くんです。それみんな僕がやるんです。夏鯨というのは、脂っこいんですよ。夏鯨をとったら、ぐたぐた煮て、鯨粕をつくる、そんな仕事もしていました。僕はね、関係なかったけど。朝晩昼、飯の心配はなかった。それから、おかずをね、鯨とか、サバであるとか、もらって来ないといけないから、ところが、みんな朝鮮語少ししゃべれましたからね、うちのおっかさんの故郷が、北朝鮮の黄海道だったんです。そこに来ている北朝鮮の労働者がみんな黄海道の出身なんです。で、聞きなれた朝鮮語だったから、その責任者が説明してくれて、それを聞き取れて、教えてくれる人がいないから、何にもできないんですよ。その人たちに頭を下げるとね、サバでも鯨でもいくらでもくれましたね。大きな袋二つくらいね。それをもって、おつゆもついたり。それはみんな僕がやる。工面する。朝鮮語がわかるから。何もわからない日本語の学生が来ても何もやらんと。ストライキを起こしたんですよ、何もしないと。こんどは生意気だと。ロシア人にはね、コルホーズってのがあったんです。足の悪い親父が来てね、命令して、警察も来て。でも、そのあとはすこしもらえるようになりました。中学生の半分は、缶詰工場働いて、半分は鯨粕。あとの200人の北朝鮮の労働者は魚をとっていたんです。帰りには、神社がありまして、クジラの鯨が干して山積みになっていまして、珍しいって、僕らみんな持って帰ったんです。神社の鳥居はね、クジラのあばら骨で。クジラを解体する傾斜のある床があって、クジラをウィンチで引き上げたら、そこで切って、加工するんですね。僕たちの場合はね、北朝鮮の人とは何もなかった。全然、関係しなかったから。彼らが魚を取って、僕らがしぼっていたから。で、米も配給で。でも、よく連携しないと、彼らのとった魚をもらわないといけないから。それをおかずにしないとけない。言葉ですね。向こうの人は日本語はわからない、戦争が終わったらしゃべる必要がなかったから。簡単な言葉ですけど。サイズでモヤシを作っ

たりね、おかずなんか自分で作りました。

8月頃に仕事がおわって、9月頃に勉強を始めたんです。日本人はね、半分くらいは、いました。いろんな本を持って帰れないので、市場で売ったりしていました。その頃、あまり戦争時代に見ることができなかった本が、道端で見れるようになりました。万葉百科事典とか。製図用の製図器とか。そういうのをただのようない値段で買ったんですよ。お金のたくさんある人は、布団をつくって、その中に入れたという人もあったようです。私たちは、日本の円も使ったんですよ。満洲で使っていた紙幣ね、うちのおばあちゃんが、持っていました。戦後ね、満洲にあったいろんな発電機とか、タービンとか、北朝鮮の機械とかみんなばらしてね、ロシアがね、本国へ持って来たんですよ。その一環として、サハリンにも発電所が、電気の量が増えたんですよ。それから持ってきた発電機ね、5年間くらいかかってもって来たやつを設置して、運転までして。あの頃ね、日本にはドイツ製の機械もあったし、イギリス製のもありました。日本はね、世界のいいものを金で買ったんだね。そういうものを満洲でどこかの街に発電所をつくったでしょ、日本時代に円で買って、設置した英国製のものを、日本は明和産業とかはるでしょ？それをひっぺがして。それを今度、本国へ送るんですよ。ロシア人のことだから、それが荷造りして送ってから、設置するまで、4・5年はかかりました。ひとつそういう機械がサハリンへ来たんですよ。で、運転させてみようよと、満洲から来た機械を。幸いにね、ひとつは動いて。それから、サボタージュとかすると、監獄につっこまれるしね。

戦争終わってからね、僕は成績がよかったから、ナカジマキヨシという先生がね、樺太神社の神主をやっていたんですよ、受け持ちをやっている。先生がね、勉強させてやるからと、うちまで来たんですね。で、うちの母さんが、字も書けないのにね、私たちは罪もないから、日本人より先に帰るんだと、そのころは考えていて、門前払いしたんですよ。お前行きたいなら、行けど、黙って考えてみると、妹が三人いたでしょ、何も知らないお母さんのもつで、ロシアの国ではかわいそうだと。むかし図書室があって、そこで立って読めと、そこで読んだのが『謎の国ソ連』。あんまりいいことは書いていなかった、ソ連の悪口ばかり。読んだんですよ、そのころ小学校5年生だったから。それで心配で行くのをやめたんですよ。まあ、あの頃行ったら、今は生活が違ったでしょうけど。

その先生は日本へ来て、札幌の高校の先生をやって、社会科を教えただて。で、後で、岐阜県へ戻りまして、小学校の校長先生をやって、日本の天皇陛下からね、教育者として、表彰されて、和歌だったかな、そういう本を書いて出しました。最高の勲章をもらったって。手紙が来たんですよ。その先生が、日本に來いという時に僕はついて行かなかったんだ。かわいそうに、妹が心配だし。

親父は、持った金で、北朝鮮で土地を買ったり、いろんなことをしたんですよ。それで結局、みんな没収されたんですよ。戦前に北朝鮮へ行ってね。終戦直前に。親父は勉強がなかったからね、あの頃はすでにソ連と秘密協定があって、北朝鮮はみんな共産主義になって、財産は没収させられて、土地は地主からとりあげて、こん棒でひっぱたかれて、地主の息子は勉強もさせられなかったんですよ、今でもそうですよ。仕方がないから、金持ちだったひとはみんな北朝鮮から逃げるようになったんですよ。南へね。親戚までこんどはやられたらいい。親父は戻ることもできなくて、戦後も平安南道にいたんですよ。それから会っていないんですよ。向こうで、来るだろうと思っても、僕らは動けないし、終戦で。

日本人はみんな帰ったんですよ、だから、働く人がいなくて、スターリンの命令で朝鮮人はどこにも出すなと、給料は全然少ないんですよ。ロシア人が大陸から来ると、余計に払うんですよ。倍ね。倍やるから、

向こうに行って住めど。日本人はいないから、住むところはあるんですね。日本人の家は大きいと、部屋は4つも5つもあるから、ロシア人はみんな住んで。占領者という形ではなかったね。何かこう、民族の区別をなくす政策もありましたけど。どうやらこうやら、その後、日本人はいないと、働く人がいない。良い金を払って、向こうから引っ張って来る。労働者が足りないから、北朝鮮から派遣労働者を頼んで、何万人もね。派遣の人は北朝鮮から来ているから、給料はいいんですよ。私たちは、何もなくて、有給休暇も少なく、1年に2回くらい。向こうから来た人は、一ヶ月半休めるのに。忙しいなんてことはない、ロシア人はみんな遊んでいるんですよ。韓国人が死に物狂いで働いているのに。給料は少ないのに。60年度位になってから、韓国人がね、北朝鮮へ行くようになったんですよ。戦後、ばかくさいって。それで、あわくって、じゃあ、原住民の給料もあげようって。北朝鮮から来た人の方が待遇がよかった、契約があったから、我々はなかった。契約をする権利もなかった。給料もいいし、有給休暇もあるしね。それで、ポンポンと給料があがるんですよ。3年いると60%あがるんですね。5年くらいいると、100%あがる。倍になるんです。休暇も多いんです。北朝鮮ではね、老人に向かって、ともだち、「同志よ」なんて失礼なんですよ。金持ちの息子たちはみんな北朝鮮から逃げて、南朝鮮に来て、必死になって働いて、財産家になってね。現代の社長なんかね。頭いいんだ。うちのお父さんはそこから逃げたんですね。47年に、南朝鮮に逃げたんです。

うちの娘たちが65年に朝鮮学校を卒業して、学校の先生をやったんだけど、つぶしてしまったんですよ。朝鮮学校の勉強だけさせると、卒業しても就職がなかったんですよ。大学もなかった。入れなかった。ロシア語が足りなかった。入学試験というのがありますからね、最低限。たいていは落第するんですよ。

それで将来性がないってことで、大使館とか、領事館の人が来て、韓国人にね、大学は無料だし、働くところはあつし、と、戦後いろんなサハリンへ残ったひとが技術でも覚えて愛国者になろうって、いっぱい、行きました。サハリンの人口の三分の一くらい行きましたよ。ロシア人に馬鹿にされるのがいやだって。僕からしたらとんでもない、でもまともなことを言う人はすぐにやられるんですよ。とんでもない野郎だって。行っちゃだめだって、みんなわかっていたんですよ。だけどね、そんなにひどいとも思っていなかったんですね。妹たちもそんなに苦勞していなかったんです。苦勞がない奴がね、何も無いんだぞ、と言ったら、何も無いと言っても、人間が住んでいるんだから、何も無いはずがない、住めるはずだと。妹ふたりは勉強しに行っちゃった。そのあとに、うちのお母さんも国に行って死にたいと。それで、今度、国に帰るのに、手ぶらではだらしなからね、財産で言うのはないんですけど、半年後に給料とかもらってね、それをもって、荷造りして、食ってかなきゃならんくて。

私は内職ってのがあったんです。鉄工所へ入ってね、設計図を描いたんです。何が得意かっていうと、物理と数学が得意だった。暗算早かったです。『製図工速成』という大阪の製図屋が書いた本で、六か月でもって、製図工を、中学校を卒業した人があるいは工業学校高等科を卒業した人が、一日半年間勉強したら、製図工になれるっていう。その本を2冊買ってあったんです、良い本は盗まれますからね、それを勉強して。それで、設計科に入ったら、日本人もいました、ロシア人もいました。僕はその本をよみながら、半年くらいで終わらなかつたんだね、ようやく一年かかりましたよ。その厚い本。図面の書き方とか、烏口ののどぎ方とかね、図面の写し方とか、スケッチの仕方とか、細かく書いてあって、一人前になれるんですよ。それでロシア人の責任者もすぐに見てね、どんどん仕事くれたんですよ。これもやれ、あれもやれって、結局大陸から来る設計屋より難しいものが僕のところにきて、僕はいったん引き受けた仕事はミスのない

仕事を、早いと信用を受けて、2年半して、一人前の設計屋になって、その代わり、仕事は人よりも三倍も四倍もやりました。何か、どっかで故障があったり、発電所で故障があったりしたら、自分で勉強しなきゃいけない。先生がいないから。日本で一流の先生が書いた本ですね。圧縮された、無駄なことを書いていない。それが100冊くらいあるんです。その中に、『設計便覧』という厚い本がありました。私の働いた工場は、採炭設備ね、選炭設備、そのほかに、炭鉦で使う扇風機と、巻きってという巻き上げ機と、樺太には発電所があって、炭坑には全部自分の発電所があるんですよ。それで、炭坑から出て来たこまい石炭はみんなそこで炊いて。発電所の設備は全部、ロスケのものも全部、私が調達しないといけない。だから、仕事は山ほどある。そして、昔は日本内地から部品が来るんですね、それが戦争が終わってから、それがぱったり来なくなってしまって、戦後は、これも作ってくれ、これも作ってくれて、私たちのところに来るんですね、でも、専門家ではないんです。だから、あらゆる面で勉強をし直さないといけない。ゼロからね。で、勉強になります。その代わり、出張が多い。北樺太も行く。北樺太に行くからね、シベリア出兵のときの、日本のいろんな会社が、北樺太の炭坑を開発したんですよ、石油もね。設備がそのまま残ってるんですよ、世界一流のね、汽車のね、発電機と蒸気タービンを乗せて。僕の生まれる20年前にね、作って、設計して、それが40年間、昼夜働いていたんですね。ロシア人が40年かかっても作れなかったんですね。それこそ世界一流の会社を作っていたんです。それから、ドイツの優秀な会社で作った発電機、北樺太地にもありました、日本の会社が注文して、炭坑に置いてあって、おいて行ったんです。僕はね、本屋へ行って、最新式のを勉強してね。ロシアの技術者も来ましたけどね、技術者も全然わからないんですよ。専門の知識ではだめなのよ。やっぱ、もっと程度の高い。タービンを作る知識と動かす知識は違いますかね。僕らは、関係のない人間が首を突っ込んで作ろうとなると、一苦労なんです。それから、ちょっと間違ると、首をやられますからね。危ない仕事なんですよ。だから、寝ないで仕事をしないといけないんですよ。私はできませんよ、とは言えないんです。『製図工速成』は、戦後に道端で2冊買ってね、ボロボロになるまで読んで、もう1冊は北朝鮮に行く友達にくれてやりました。それを讀むと、一人前になれますよ。戦後のね、10年くらいね、無国籍状態でした。仕事の関係で出張が多かったんですよ。だけど、出張へ行くとね、工務部長ってのがいて、発電所の設備とか、全部関係あるんですね。それをサポートするんです。国境警備隊の若い連中がね、僕をあやしいって、引っ張って行くんですよ。無国籍ですから、そうすると、部長の方が国境警備隊より上なんです。何もありませんから、国境警備隊なんて、名前だけで。炭坑行くと、結局、炭坑長みたいな接待を受けるんですよ。仕事は辛くて、寝ないで仕事をするんですけど。時間がないと。本部の人がね、僕が寝ないで仕事をしているのを見て、びっくりしてね、彼は寝ないで仕事しているんだよって、本部へ呼んでから、この人はサハリン生まれだ、樺太での仕事を辞めさせて、大陸へ送れと、旅費みんな払ってやるしと、命令を受けたんですね。僕の一番難しい仕事はね、半年かかって、200枚くらい図面を書いたんです。成功したんですよ。ロシアの国籍をもらって、大陸へ行きました。どこまで行ったかという、ウクライナまで行って、一番有名な療養所、あのチャーチルとルーズベルトとスターリンが会談した、クリミア海岸があったでしょ、そこで療養所に一ヶ月治療を受けて、それ終わってから、ウクライナあたりまで行って、一ヶ月くらいつとめて、それから、仕事したようなふりして、それから、サハリンから電話が来て、それで、レニングラード、モスクワと見物して、そして、汽車に乗って、帰って来たんです。一年働いて、4階建ての暖房付きの家をもらいました。特別に僕にね、よく仕事したって、国籍をくれて。共

産党の偉い人が三人くらいで、願書を書いてくれて、この人はよく働いたんで、ソ連国籍をくださるようと、書いてくれるんですよ、そのおかげでね、ソ連国籍をもらったんですよ、それをもらったとたんに大陸に行きました。ところが一カ月治療して、ウクライナで、あったかいところで、働いて、あそこは気候がよくて、サクランボになるんです。そこに住んでから、電報を受けて、呼び寄せられて、レニングラード、モスクワを見物して、サハリンへ戻って来たんです。やった仕事だから、眼をつぶってもできる仕事で、結局、ほかの人より三倍四倍仕事をしましたよ。

僕は、一度も大学を卒業していなかったけど、一流の設計部とか、火カタービンとか設計したりね、そういう人もサハリンに来ていたけど、そういう人に負けなくらいね、こっちだって勉強して、設計部長をやっているときは、夜中の一時くらいまでね、働いて帰って来るんですよ。なぜかって言うと、共産党員になりますとね、なかなか仕事をしないんです。共産党員は仕事をするふりをして、党に関係するものは死に物狂いでするけど、ところが、僕らの仕事はあんまりやらない。僕は責任者でしょ、仕事をさせないといけない、みんな共産党に入っているから、仕事してもらわないと、僕の首が飛ぶからね。なんだんかんだ、僕らのところは大きくてね、共産党はあれやれ、これやれって、命令するんですよ。僕は設計部長だし、仕事をさせなきゃいけない、それである時に言ったんです、「ろくなやつがない、共産党員には」って。そしたらお前ちょっと来いって言われて、でも僕は入らなかった。三回も言われたけど。仕事にならないですよ。共産党というのは、僕の眼の上のたんこぶになっちゃった。この野郎、この野郎、ろくでなしかと。共産党員はすごく多かったですよ、口ばかり達者で。仕事あんまりまじめでないし。

—妹さんたちはどうして北朝鮮へ渡ったのですか？

妹たちは行きたくて行ったんです。行ったらだめだと、地主の家族は搾取したとか言われるぞと。うちの母さんが言ったのが、お前たちは子供だから知らない。ところが、知らないどころの騒ぎでない。北朝鮮では、地主の息子とかはみんなやられて、勉強させてもらえなかったんですよ。私の妹たちはサハリンから行くときに、親たちがそういうことをしていたって、履歴書に書かないといけないんですよ。そうすると、その校長先生が、運転手をやっていた、そういう時代もあったでないかと、でも、その代わり、いつやられるかわからないので、死に物狂いで、毎日、勉強もして仕事もして。母親は向こうに行って、死にたい。それでね、サハリンは寒いでしょ、それで頭痛がするって。頭ってのは筋委縮で、血管が縮まって、細くなって、血が通わなくなって、いつもは片頭痛がして、治すには皮下に針を入れて、治すんです。私もその病気になって、病院に行ったら、気候を変えないといけなくて、言われました。でも、気候を変える機会がなくて、韓国へ来てからは、だいぶよくなりました。

結婚して一カ月二カ月したら、手紙が来たんですよ。日本経由で、59年に。結婚は10月で、手紙を12月にもらいました。親戚の人が日本にいて、その人を經由して。日本で行商していて、韓国へも行って、そういうわけで、日本人で長い間、サハリンにいたい人がポツポツ日本へ帰って、私の仲間になる人が、旭川に田園という喫茶店を開いて、そこにお父さんから手紙が来たんですよ。それっきりですよ。どっから来たかという、ソウルから来たんです。工科大学の構内の校長先生の運転手をやったらしい。で、お父さんは、住所だけ今でも残っているんです。その後はね、風当たりがよくないって、別のところへ行ってね、いまでも、だいたい金大中の、全羅南道のどっかそっちの方に行くと、そのあとは連絡はないです。妹たちは61年に北朝鮮へ行って、おっかさんが行ったのが、65年。僕も結婚をしないつもりでいたから、様子を見よ

うとしたのに、結婚したと、関係が悪くなったんですよ。彼女は朝鮮学校で、裁縫を習っていて、良い先生にあたったから、最高の技術をもって、サハリンでも最高の仕立て屋の仕事をしていて、サハリンで偉い人が服を作ると、彼女がつくるんです。息子もひとりいて、でもお母さんが別れると、言って、追い出してしまったんですよ。それで、朝鮮へ行こうと。北朝鮮の連中が来て、あの人は話が上手だとか、くだらないことばかり並べて。東京に美術学校を卒業したんですよ、自分の友達が。ナホトカの領事館の右腕になっているわけ、そのひとと仲良くなれば、いいところに行けるだろうって、盛んにお母さんがいって行くようになった。行けば苦勞するぞと言われていたのに、行ったんですよ。そんな人間が住んでいるところで、住めないわけがないって。苦勞を知らないんですよ。女中さんも二人もいたもんだから、のぼせあがってね。共産主義っていうのは、悪魔だからね。そういう仕事をしていたのは、お前たちは知らないと言えば、それまでだ。向こうへ行ったら、ぐうの音の出ない。妹はひとり死にました。もう一人は生きてるか、死んでいるかわからない。お母さんは 92 歳で亡くなったんです。北朝鮮で。妹もその頃、亡くなって。意見が違い、強情天下第一品でね、手つけられないしね、そして、北朝鮮行きましようって、開口一番にそれ言ひ、死にたいから行かしてくれて、行ったらね、寝る布団もないんです。そんな生活です。北朝鮮は何にもないからね、そっくり盗まれるんです。妹の一人は 10 年生までやって、もう一人は師範学校まで出て、朝鮮学校の先生をやったんです。廃校になって、行くところがなくて、若いうちに勉強やりなおしたいって、大学へ行きたいって。みんな勉強したがって、成績がよかったんですね、悪かった方が良かったんです。いいもんだから、もっと勉強したいって希望があったんですね。勉強もできなかった人はね、サハリンに残って、幸福に暮したんです。北朝鮮に行って、苦勞した人が相当多いね。

朝鮮学校は命令で廃校になりました。なぜかっていうと、教科書が全部朝鮮語なんですよ、内容が全部朝鮮語、そういう人間は、ソ連の社会では、活動することができないんですよ。妹たちはここにいたときに北朝鮮の国籍をもらいました。憤慨したんだよ、妹たちがかわいそうで、ここにのこったのにさ、勝手に姉の婿さん、東京美術学校の、勝手に北朝鮮の国籍をもらったんです。北朝鮮の平安北道出身の方が、朴って方がいて、ナホトカの領事の右腕をやっている、それで近くなって、北朝鮮へ来たら平壤(へいじょう)で居住権を作ってやるって、やっぱりね、平壤の方が配給がいいんです。北朝鮮は、配給制度なんですよ。ロシアでもモスクワとレニングラードと、キエフだけは配給制度がよかったんですよ。外国人がその人の生活を見て、ソ連全体の生活と思うから。姉の婿はね、北朝鮮へは行かなかったんです。なぜかという、この人はユジノサハリンスクの朝鮮人の副会長になったんです。会長は、北朝鮮から派遣して来た人。この人が死んだんですよ、死んだらね、ロシアの KGB が外交のねスパイをしている人をね、裁判なしに殺してしまうんですよ。裁判なしで、高いところからつき落としたりしてね。

—お子さんは何人いらっしゃるのですか？

僕は息子がひとりいて、娘が一人います。息子は 93 年に死にまして、娘はウラジオストクにいます。いま、息子に孫娘が 2 人いて、娘に一人います。ここに来るときね、家ふたつあったんですよ、それを売って、ウラジオストクはねサハリンより家が高いんですよ、寄宿舎(アパート)を買って、修繕して。サハリンには家はないですよ。孫娘が二人いるために、サハリンに 3 回行きました。孫娘は大学で勉強しているんですね。昔はただだったけど、今は学費を払わないといけない。うちの孫娘は頭がよくて、成績がいく、大学に行くからサポートしてやるって、僕は年金生活ですね、家内と合わせて、全部孫娘にやってるんです。今年は

行くとなると、日本の赤十字の応援でウラジオへ 3 カ月行きますよ。娘がいるから。サハリンにはもう家がないから、あっても親戚の家しかないから。

ここに来たのは、2005 年の 8 月 26 日にここに妻と来ました。その前に観光団でも 2 回来ました。3 回来る権利があったけど。妻も元気ですよ。僕より 4 歳下で。彼女は韓国生まれで、6 歳のときに慶尚北道から来たんです。製鉄所のある、ホコウから来たんです。親戚がみんな韓国で偉くなったんです。パクチョンヒ大統領の親友。日本時代に満洲国の下士官みたいな仕事をしていて、韓国で陸軍学校の校長までしたんです。妻の従弟です。慶州の市長もやったし、大邱の内務部長もやったし。釜山の区長もやったことあるし、旅行会社の会長もやって、でも、その息子がアメリカで大失敗をしたんですよ。インチキな買い手にお金をやって、だまされたんです。いたましいですよ。あの頃は、軍国主義の時代だったからね、子分をつこんで。慶州の方は北朝鮮軍が入って来るのが遅れて、そういう功績があったんですね。

No.7 李起正 1931年9月16日 知取生

(聞き手:天野尚樹・中山大将)

わからないところはロシア語だけど、使わなくてもいいよ。日本語の教師までやったから。名前は、李起正。日本の名前はね、完山(サダヤマ)、って書くんです。昭和6年生まれ31年です。9月16日。樺太の知取で生まれました。お父さんが、募集されて韓国から、28年から29年に。僕は樺太生まれだから。29年だか28年。

—お父さんは韓国のどこの出身ですか？

カンウォンド、江原道で。

—日本に渡るときは釜山から出発したのですか？

そうですね、釜山からですね、釜山から九州、下関ですね、それから今度、青森、函館、北海道から稚内から、船で。そう言っていました。

—お父さんはどんな仕事をしていたのですか？

仕事って、林業の山林ですね。山で働いていたんですね。江原道にいたときは、農家です。親といたときは。4人兄弟で、彼は2番目ですね、二男で。

—お父さんは、徴用ではなく募集で樺太に渡ったのですか？

そう、募集で行ったんです。はじめには、自分ひとりで、そのあと、3年くらいあとに、樺太に母さんが、兄さん一人を連れて、お父さんの所に、そのあと僕が生まれたんです。林業ですね、ずっと敗戦まで。

—お父さんも知取の町に住んでいたのですか？

そうでないですよ、山に住んでました。田舎ですよ。僕は町にいて、学校をあるいたから。父さんだけ山で、家族は町です。

—学校はどこの学校に通われていたのですか？

工業学校ですね、知取の。2年まで、卒業できなかったんですね。45年に敗戦で、ちょうど工業2年で、そして、ロシア人が8月に入ってきて、朝鮮学校をあるいたんですよ。朝鮮人は相当住んでいましたよ。2年間、朝鮮語を習いました。47年に卒業して、あのときは小学校でなくて、中学校と同じようになっていましたね。8年だから。その後にロシア学校。夜学をあるいたんです。知取にあったんです。夜学は10年生まで。ロシア学校は、3年あるいて。卒業したのは、50年で、そのあと高等専門学校。建築科。

—その高等専門学校は、サハリンにあったのですか？

ハバロフスクにあったんです。大陸にあったんです。そして終わって、知取に戻ってきて、建築の仕事を2年くらいして、61年度に大泊へ、コルサコフへ、そこへ移って行って。知取で結婚して。57年に結婚して。朝鮮人と。

—奥さんはどんな仕事をなさっていたのですか？

仕事は洋裁を。そう服とか。工場でなくて、小さい商店みたいなところ。3・4人が働いている。あのときはロシア人が入って来た後だから、そういう個人営業が多かったんです。

そこへ。

—奥さんも樺太生まれですか？

37年生まれですね。そう、樺太生まれ。

—戦後移住してくるロシア人とは交流はありましたか？

別にロシア人とはそんな。日本人はみんな疎開されて、朝鮮人だけです。ロシア人の民族だって、いろんな民族がいるし、そういう人たちとは。

—緊急疎開のときには、サハリンを出ようとしなかったんですか？

できたんですよ、だけど親たちがやっぱしね、働いていてね、どこへ行くというのは。故郷へは帰りたいという気持ちはあったんだけど、難しかったんだろうね、やっぱし。駄目でないかと。

—ということは、緊急疎開については当時知らされていたんですね？

そうそう、話はあったんですよ。行きたい人間は行きました。戦争が終わったらできませんでした。日本の人は疎開したけど、おれたちは残されて。ソ連時代はやっぱし、親たちの気持ちは故郷へ帰りたい気持ちがあったでしょ。でもそういうあれが、なかったですよ。気持ちって言うか、親たちがそういう話を、家族同士で出ると、やっぱしね、自分は朝鮮人だ、だから自分の国へ行ってみたいと。

—やはりご自身も韓国へもどりたいと思っていましたか？

そうですね。お父さんの故郷だし。やっぱし。

—ソ連が来てから、朝鮮人は帰国できるのではないかという期待はあったのでしょうか？

別にその時は、ロシア人が入ってきて、僕たちはやっぱし日本人と一緒に疎開、日本へ返してくれるんでないかって、でもそれは全然なくて。ロシア人はその気がないし、日本でも受け取れなかったんですよ。

—ソ連時代は無国籍状態のままだったのですか？

ソ連の国籍をとりました。52年か、53年ですね。早くもらったんですよ。勉強するようになったし、大陸に行くようになって、国籍がなかったら、許可されないんですよ。樺太以上はどこも行かれないんですよ。

—進学のためにハバロフスクに行く前に国籍をとったのですか？

そう。54年にハバロフスクへ。

—ハバロフスクでは、朝鮮人と言うことで、いやな思いをしたことはありましたか？

別にそういう点はなかったですね。いじめられたとかそういうことはなかったです。ロシア人の友達を作って、そこで一緒に暮らしたんだから。

—当時国籍をとるときは、家族一緒に取得しなければならないとかがいましたが。

そういう話もあったんですけど、お父さんは51年度に亡くなっていたので、お母さんと一緒に、僕は三男で、長男は早くに結婚して、家族を持ってから、一緒に住んだんです。

—お子さんは何人いらっしゃるのですか？

今は二人しかいないです。男の子と女の子。男の子はユジノサハリンスク、娘はサクト

ペテルブルグ、今はモスクワ。ペテルブルグで学校を終わったんです。電気の専門家。そして、また外国のベルギーの大学を終わって、会計課長をやっているんです。今はモスクワです。彼女は頭がいい。

—お父さんはソ連時代にどんなお仕事をなさっていたのですか？

できなかつたんですよ。やっぱり戦争が終わって、町へ下がってきて、体も壊して、そういう意味で家へいたんですよ。お兄さんが稼いでいました。二男は東京で勉強して、なんていうかな、あれ、工業の電気の技手、やってたんです。そして、そこを卒業して、マカロフ、知取へ戻っていて、工場で働いたんです。工場の、電気屋の課長をやってたの。長男は、林業の仕事をしていて、建築の仕事をしていました。

—お兄さんたちは日本時代と同じお仕事を続けていたのですか？

そうですね、そのまま仕事をしていました。二男は、奥さんが日本の方で、あんときは何年かな、61・62年度に札幌に疎開したんですよ。で、札幌に奥さんになる方の親がいたんですよ。そこへ移って行って、電気屋を、小さい店をやってたんです。樺太で、知取で、戦争前に知り合っていたんです。

—お兄さんの札幌のお家には行ったことはあるのですか？

僕も2・3回あるいたんですけど、なんていったかな、もう忘れてしまった。僕も船乗りをしていて、小樽へも行ったことも多いです。船乗りって通訳ね。日本の専門家と一緒に。ロシアの船に日本の専門家がいて、僕がそこで通訳したんです。それが5・6年だね。その時代は稚内や小樽に何回も入港したんです。そして、兄さんの家を探して。兄さんはもう亡くなってしまって。96年に。長男はここに一緒に。87歳だもん。22年生まれ。2000年です、一緒に来ました。2月です。一番早かったです。

—61年にコルサコフに戻って来てからはどんなお仕事をなさっていたのですか？

そこではやっぱり建築の仕事。設計でないですよ、責任者として。労働者を使って。100人くらい。ソ連の会社。だから、ここに来るまで大泊です。ずーっと。61年から。退職が89年くらい。

—89年と言うと、在サハリン韓国人の帰国をめぐる話が出てくるころですね？

そうですね。55歳で年金をもらって、60まで仕事をしてたんだよ。そして、そのあと、クラブの中にね、日本語講習会があったんですよ。その教師をやっていたんです。大泊で。年金もらったあと。そして3年して、そのあとは、船乗り、通訳。

—日本語講習会はどんな人が受講していたのですか？

だから、昼は学生、15・6人くらい、あの頃はみんな日本語を習いたい気持ちがあったから、そして夜間は、やっぱり、仕事をしている人たち。40人くらい、2グループ、20人20人。ロシア人、韓国人もいた。あんときは日本と。

—ロシア名は持っていらっしたんですか？

私はそういう、責任者になると、部長と課長になると、ロシアの名前がないとだめだと、アレクセイ・ミハイロビッチ。アリョーシャ。それはね、マカロフにいるときは、ロシア

人につけられたのは、コーリャだったんですよ、そして、大泊で移った時に、兄さんも二男の兄さんもコーリャだったんですよ。都合が悪いということで、お前の名前を変えれと。それで兄さんがそこに住んでいて、自分はみんなコーリャってわかっているから、名前を変えてほしいと。そして今度、現場です、掃除婦が、ロシアの女がいたんですよ。名前を付けたんだけど、こういう名前はどうかって、僕に言うんですよ。今はニコライだけど、変えてくれって言ったら。彼女が、だ、アリョーシャがいいって。国籍は関係ないんですよ。

—責任者として、書類にサインするときはロシア名を使うんですか？

ロシアのサインです。なんせ、銀行の書類なんて、課長部長の僕たちのサインがないと通らないんですよ。そういう意味で、ロシアのサインを使うようになったんです。

—通訳のお仕事はどれくらいなさっていたんですか？

船乗りですか？4年か5年です。それも、やっぱり時期があってね、一年間に3カ月、多くて4カ月くらいですね。期間によって、一年に、ほとんど夏になると、5月6月になると、蟹とりやったり、蟹をとってたんです。蟹をとったやつを。ロシアの船で。94年、95年くらいから97・98年に仕事をやめて。

—一年をとってから、はじめて船で仕事することに不安はありませんでしたか？

僕もね、心配だったんですよ、だけど大丈夫なんですよ。はじめ乗ってから、大丈夫だから。専門家が聞くんですよ、李さんどうですか。どうですかって別に。そんな普通にはじめて乗るとね、船乗りって難しいんですよ、船に乗って酔う。船は小さい船で、だけど大丈夫だったですよ。それで、続けて、3・4年くらい。一年に2・3カ月、多くて、4・5カ月。蟹をとる船。だから、専門家もロシアから来たんです。ロシア船籍の船。サハリンにあった会社の船と、ウラジオストク、その会社、そうやってやってたんですよ。契約によって。日本の会社とロシアの会社によって。

—船で働いているのは、ロシア人なのですか？

みんなロシア人。専門は一人で日本人で、僕が通訳。日本人は蟹の専門家。日本の会社から来ていました。機械の使い方より、作った蟹の作り方、加工の仕方の専門家、その方面の専門家。機械の専門家でないんです。缶詰でなくて、生のをね、煮てね、脚だけとって、そして箱に詰めて。日本から一緒に来ていました。出張ですね。ロシアの会社に来るんですよ。そして僕と一緒に。

—その専門家の日本人はいつも同じ方だったのですか？

いつでも変わってました。船が変われば、会社が変わればね。札幌からユジノには飛行機で来ていました。船は中型のね。根室、函館、稚内、ずっと入ってます。できたものを渡すためにね。

—ロシアから年金は支給されているのですか？

僕は給料が良かったんで、150ルーブル、最高ですね。

—どうして永住帰国を決意なさったのですか？

どういう目的で、韓国に来たか？私はここにも親戚が多いんですよ。父さんの。父さんの弟の息子とか。それから、98年度に観光団で来たことがあるんです。そして、親戚と会ったんです。そして、わかるようになって。親たちに聞かされたことはるんだけど、兄弟がこういうとこにいます。そして、98年度に会ったんです。そして、わかって、孫たちもいて。みんな連絡があるんです、電話で。結婚式とか、親戚の家族とあったり、してますよ。カンウォンドにもいるし、孫はソウルにいるんですよ。ソウルにいるのは孫が一番45歳でね、父さんの兄さんの孫だから。彼とは連絡がありますね。

—韓国には来たいと思っていましたか？

そうだね、やっぱり親の故郷だし、来たいって気持ちがありましたね。98年にはじめて韓国に。観光団で来て、ソウルに来てから、そして、ソウルのその孫に会ったときに、僕も父さんの兄弟の息子たち、いとこたちと会うようになって、そのあとは、いとこは一人だけ、アンヤンっていうんだよね。

—永住帰国後にサハリンへは行かれましたか？

ああ、もう4・5回なるんでないか。息子と孫がいます。

—永住帰国に対する奥さんの意思はどうでしたか？

彼女（妻）も、自分も一回来たことあるんですよ、僕が来た後、99年かな、一年過ぎだ、家族とやっぱり、親戚がいますと、彼女にも、イトコとか。やっぱり来たい気持ちがあったんです。それで、帰国しようって。

—お兄さんとは相談したのですか？

そう、お兄さんとも僕はやっぱり。そして弟もいたんだけど、2005年度だね、そこで亡くなったんですよ。サハリンで、亡くなったんです。

—一時帰国をなさってみて、どんな感想を持ちましたか？

私たちも歳があったから、自分のそのときの気持ちは来てよかった、そういう気持ちでしたね。町も発達しているし、気候もいいし。寒いとこでないから。観光団で来たときは6月。花も咲いて、公園に本当に。後悔はしません。ここに来たことは。

—サハリンのお友達とわかれてさびしいということはありませんか？

全然、ともだちと言っても。歳なんだもん。

—北朝鮮へ帰国しようと思ったことはなかったのですか？

そういう気持ちはなかったですよ。みんな北鮮がよくないってわかってたんですよ。韓国人はみんな状況を。そのために行くんなら、韓国で、北鮮にはいかないって。噂でね。直接行った人の話も聞いたし。観光団で行って来た人の話もね。戻って行って、帰って来た人もいますよ、そういう家族も。

—ハングルはどこで身に付けたんですか？

だから、日本時代は家でも日本語を使うようになっていて、終戦後に朝鮮学校をあるくようになってから、言葉を覚えるようになって、字も書くようになったし、朝鮮学校ではじめて。

—職場には他にも朝鮮人はいましたか？

殆どロシア人ですよ、ロシア人ばかり。韓国人もいたんですよ。労働者。建築のが多かったから。

—いま一番使いやすい言葉はどれですか？

はっきり言うと、ロシア語ですね。しゃべっている時間が長かったから。ロシア語で全部書類とかもらったり書いたりしたから。こうやって友達と遊んでますね、ほとんど日本語しゃべるんですよ。ロシア語はやっぱり。計算の時は日本語ですよ。掛け算なんて、みんな日本語。ロシア語はやっぱり。学校時代は、学校で日記（日誌）を書いたけど、日本語。兄弟と話するときも、日本語。奥さんは日本語学校2年まであるいたからね、日本語が早くできる。日本語とロシア語、それが早いんです。早いんです。韓国語を使うより。

—ここでもハングルを習ったりしたのですか？

そう。

—お子さんたちとの交流はありますか？

息子たちは電話もするし、こっちへ遊びに来ますよ。今年も7月に。娘も孫を連れてきますよ。子供たちとはロシア語。彼たちはロシア語しか、わからないから。大学を終わっているし。

—日本語の放送を視聴したりはしていますか？

NHK、僕たち見ってますよ、ニュースとかは必ず聞きたい気持ちがありますし、野球も見るし、日本時代は野球の選手もしていたし。だから、野球放送は、日本のチームを応援したり、外国の世界大会とか見ても、日本のチームですよ。難しんだな、韓国対日本だと。やっぱり、日本の教育を受けているからね、それが基本になっているから、そうなんでないかと。自分はそう考えています。朝鮮人、韓国人、だけど、やっぱり日本の教育を受けているから、教育、風俗、やっぱりね、小さいころから習っているから、それを守っているんでないか、僕たちは友達だってそうですよ。

—ニュースとかで日本の天皇を見ると懐かしいと思ったりしますか？

別にそうですね。戦争前は学校に写真があるから、いつも礼して入って。やっぱりその時代は。今はね彼は全然権利もないんだし。こうやって見ても、ああ、と。日本の教育を受けたんだから、見たい気持ちはあるんですよ。テレビを見ていたら。懐かしい、ロシアのニュースも聞くけど、日本のニュースも聞きます。新聞はないけど、テレビで。ロシアのテレビも韓国で映っています。衛星で入って来るんです。だから、僕らはここで、ロシアの、日本の、日本のでも、ひとつかな。昔はふたつ入ったんだ、いまはひとつ。ロシアの、やっぱり、日本でもニュースはだいたい。やっぱり楽なのはロシア語。何十年もロシア人と仕事しているようになるとね。

—奥さんも同じ仕事を続けていたのですか？

そう、ずっと同じ仕事。

—日本語をよく覚えていらっしゃいますね。

教師までやったんだから、平仮名から片仮名から、漢字まで、全部教えたんだから。

—小学校はどこだったのですか？

知取小学校、それから知取工業学校。

—学校時代の日本人のお友達とは今でも連絡をとっていますか？

いまはないですね。戦争後は全然。

—朝鮮学校の先生は誰だったのですか？

大陸の朝鮮人が来ましたね⁶。

—共産党には入党しましたか？

責任者だから、必ず党員でないと。だから早くから、僕は57年度から。青年共産党、コムソモールで働いていたんです。そこの課長をやっていたんです。52年度にロシアの国籍をもらって。

—ソ連の他の地域に行ったことはありますか？

結婚後ですね、モスクワ、サンクトペテルブルグ、当時のレニングラード、ソチ、あの、休暇をもらったときに家族で。リーガもいったことがあります。グルジアのティビリシ、あそこは、あの時分は足が少しあれで、温泉みたいなところ。そこで一カ月、一人で。ノボシビルスクも行ったことがあるし。別にやっぱし、自分の育った故郷が一番良かったね、一時期ならいいけど、自分の生まれたことがいいですよ。そこで生まれたんだから。自分の生まれた島だし、故郷。

—こちらに来て、食生活で問題などはありませんか？

別にサハリンと変わってないですよ。韓国人の食事だから、そういう意味では癖がついたんだろうし、日本時代は味噌も食べたし。納豆、豆腐、それは東洋人のあれだから、それはここでも食べましたよ。やっぱしソ連になっても残ってましたね、味噌と豆腐とか、自分で作ったり。韓国人もやっぱし、終戦後もそうですよ、豆腐屋もあったし、納豆も個人的に作って売ってました。僕は学生時代から、弁当には納豆、それに沢庵。

—ダーチャは持っていたらしたのですか？

コルサコフにいたときに、自分でダーチャ作ってました。だから、野菜、ジャガイモ、そういうのを作ってました。花を作って売るような暇はなかったです。

—今の暮らしはどうですか？

別に趣味って、ないですね。今は僕たちはここ遊びに来るのは、麻雀、それしかないですね。時間つぶし、そういう意味で。こっちの暮らしに不満はないですよ。ただ、子供たちと離れていること。まあ、彼たちも行ったり来たりするけど。彼たち儲けがいいから、だからもう、こやって行ったり来たりできるし。それで連絡があれば。

⁶ 彼らは「高麗人」と呼ばれた。「高麗人」とは、元々は沿海州に居住していた朝鮮民族に属するが、1930年代のソ連の民族政策で中央アジアへ強制移住させられた人々である。サハリンの韓人の同化・ソ連化政策を進めるため、ソ連化した朝鮮民族として、戦後サハリン社会へと送り込まれたのが、この「高麗人」である。「韓人(サハリン残留朝鮮人)」たちは、彼らに対して「큰따백이(大陸のもの)」という呼称も用いることがあった。

—サハリンへ行かれる時は、自分のお金で行くのですか？

それが、無料で行くのが2回、もう行ってきました。国でお金を出してくれるのを。それは、話に聞くと、日本からの支援だって。毎年行けるわけじゃないですよ。今年ももう、行ってんです。だから、年齢によって、歳とかによって。今年ももう行ってんですよ。

—サハリンの家族が来る時はどうなんですか？

自分の金で。

—キムチはお食べになりますか？

たまに作るんだけどね、買って食べますよ。それが楽ですよ。サハリンでは自分で作ってましたよ。ダ—チャがあったんだから、ここ来てからは、買って食べてます。めんどくさいもの、なんも。かかあにも言っているけど。それくらいの満足ですよ。年金ももらっているし、住めるんです。娘たちもよく住んでるし、連絡もあるし、行ったり来たりもできるし。だから、来て満足してますよ。歳も歳だし。

—知取ではどこにお住まいでしたか？

町の中だよ、町、中央だよ。学校の近く。小学校はね、自分の組で35人くらいでないかな、一組みが、それが年生によって違うんでないかない、3組4組くらいあったんでないか。僕たちのクラスには朝鮮人は3・4人くらいです。

—朝鮮人と言うことで、何か言われたりしたことはありますか？

別にそういうことはなかったですよ。やっぱり、喧嘩して、チョーセンナッパって、一番悪いのはチョーセンナッパ、言われるのは。それは別になんかなかったですよ。サダヤマですよ。サダヤマ・オキマサですよ。

—いつからサダヤマという日本名で呼ばれるようになったのですか？

僕の記憶では、やっぱり、小学校時代から、ずっと。工業学校の時も。朝鮮人の友達でも、サダヤマって。その頃はみんな日本の名前と呼ばれていました。ロシア人が来たらアレクセイ・ミハイロビッチって、そういう風と呼ばれてました。

—小学校のときは、朝鮮人同士が仲良かったりということはありませんか？

別にそういうことはなかったですよ。僕たちは言葉もしゃべれるし、喧嘩したって。ただ、悪い言葉は、チョーセンナッパ。野菜の、キムチのナッパ。匂いがするってことで、臭くてくさくて食べれないって。

—日本人のことをチョッパリ⁷って呼んだことはありますか？

チョッパリ？ありました。親たちがそう言って、言いますよ。そうすると、あのチョッパリたちがって、なりますよ。悪口だってわかってますね。だから、やっぱり日本人の前では言わないんだから。自分たちの家族・友達、韓国人たちとは、言っていました。終戦後ですよ。終戦前はそんなこと言ってませんでした。終戦後にやっぱり。学生時代は、そんなそういう差別する気持ちもなかったんでないか。その頃は差別されてなかったし。

⁷ 저발=猪の足=日本人への蔑称。日本人が、鼻緒のついた履物や足袋をはくので、それを偶蹄類の足になぞらえて生まれた表現。

—知取には朝鮮人が集まって暮らしている地区はありましたか？

ありました。二か所だね。知取のマツガイ町、そこには朝鮮人が多かったです。漢字なったらわからないけど。あんときは町だからね、улица（通り）が。それから川北。ここが、韓国人の多い、90%か95%くらい住んでました。僕たちは中央に住んでました、栄町。漢字では忘れたけど。いろんなどこにいましたけど、多数は、はじっこのこういうところに。川北は海の方ですよ、鉄橋の下ですから。鉄橋の下にあったんです。栄町は町の真ん中に、私はそこで住んでいたんです。マツガエは山の方。

—サハリンへ戻ったときにはどんなことを感じましたか？

僕も去年行ってきて見たんだけど、一ヶ月くらいいたら、こっちに帰りたくなった。息子いるって、そうでしょ？彼たちも仕事をしているんだし。孫たちを幼稚園へ連れて行ったり、終わったらうちへ連れて行ったり。そういうことしかない。友達もいないし、さびしくて駄目だ。いられない。それで、3カ月の期間で行ったんですけど、2ヶ月しないで戻って来た。

—ここには知り合いはたくさんいるのですか？

いますよ、同じ町から来ている人もいますよ。だから、僕たちの歳くらいの方はみんな日本語達者ですよ。やっぱり、日本時代に。教育を受けたのも日本学校をあるいて。それから韓国へ来て、よかったんでないかって。

—日本に対して悪い感情はありますか？

別にない。

—ソ連時代に対して、悪い感情はありますか？

特にないですね。早く国籍とったから。まあ、そういう点もあったですよ。まったくないとは言えないですよ。でも、僕たち教育を受けて、そういう仕事をしていると非常に少ないですよ。自分たちの前では、言ったら、僕たちは、部下はロシア人でも、僕たちがお前たちはって言えるんですから。僕たちの前では、そういうことは。

—ハバロフスクではどうでしたか？

別に変わらないね。ハバロフスクだってそんなに韓国人は住んでないですよ。うちの孫も МГУ（モスクワ国立大学）で勉強してましたよ。頭いいんだよ。今年で二年生かな。経済。彼女（娘）はロシアの男をもらったんですよ。あいの子になってき。今年来てたんだよ。

—サハリンにも教育大学がありましたよね？

あれは、50年くらいかな。早かったんだよ。50年過ぎてかな。педагогика（教育大学）で、でも今は университет（総合大学）。工業とかは外に行かないと。ハバロフスクとか、ノボシビルスクとか。

—ハバロフスクには、サハリンから他にも一緒に進学したひとはいるのですか？

あんときは、ぼく一人でしたよ。

—「故郷」というとどこになりますか？

やっぱり、остров（島＝サハリン）。わからないね。ここへ来たばかりの時は、サハリンへ

行きたい気持ちが強かったですね。でも、去年あたり行ったときは、気持はなかったですよ。長くいたいという気持ちは、変わってますよ。道路はそのまま、駄目だ。僕たちがいたときと同じだ。良くなったって言うのは、中央の道路とか、あとは全然そのまんまだ。あれはどういう意味なんだか。韓国とは比べられないね、日本も韓国も歩いて見たけど。比べられないわ。比べられるようにならないと。去年も行って来たけど、物価が高いな。こっちも比べてみたけど。普通の給料をもらっては住めないよ。年金では全然暮らせれないですよ。それでも僕たちは、家内とふたりでもらってたから、それに息子と娘も手伝ってくれたし。年金ももらってるし、満足に住んでますよ。買いたいもの買えるし、買っても、来るときにみんな準備してきたから、食料くらしか、使うとこないですよ。

—お父さんの郷里へは行ったことはあるのですか？

カンウォンド、去年おとし、最後に行ったの。町ですよ。お父さんの昔住んでいたところ。その家も古い家になって、残ってましたよ。そのとき、従弟たちと行って、ここに昔住んでいたって。韓国の農村は見たことはなかったですね。行って初めて。そうですね、アジア的な感じがしましたね。

—韓国へ帰国したいと思ったのはいつですか？

それは遅くなってからですね。若いころは別に。ただ、親戚とは会ってみたいとかは。最後、こう、そうですね、2回観光団で来て、はじめて、親の故郷に来て、そのときに気が変わったんだな。帰国する。観光団の時は一度、来てみたいという気持ちで来たんだけど、やっぱり、親戚に会うとね。若いころは別にそういう気持ちはなかったですね。歳をとってくるとやっぱりそういう気持ちが。親の故郷に来てみたい、韓国に来たいという気持ちがね。

—やはり、いろいろな理由で帰国をあきらめた方もいらっしゃいますか？

そうですね、家族のことで。

—ソ連時代は「朝鮮人」という意識はありましたか？

やっぱり、あんどきは、朝鮮人って、自分の民族、朝鮮人は朝鮮人だって。「韓国人」って言い方はここに来てから。サハリンいるときは、「朝鮮人」。ここへ帰って来てから、韓国人て言うようになった。やっぱり違う。僕たちは普通に、朝鮮人は朝鮮人て言いますよ。やっぱり癖になってるんだね。慣れてるのは、「朝鮮人」。

—「韓国人」という呼び方は慣れませんか？

別に、そういうことはないんですよ。自然にそういう風になるんでしょうね、緊張した時には、「韓国人」て。早く出るのは、「朝鮮人」。

—子供の頃の楽しかった思い出というとなりにありますか？

小学校時代に、運動会ですね。あれが記憶に残っていて、あれが楽しかったなあって。野球もやってたし、セカンド、サード。そこをやった。僕も走るのが少し早かったから、リレーの選手もやったことがあった。小学校が、知取では4か所あったんです。学校対抗の、それで選手で出たんですよ。野球も、学校対抗で。

—ソ連は多民族国家ですね。サハリンには、所謂「ロシア人」以外の民族も来ていたと思いますが、彼らへの親近感のようなものはありましたか？

民族が多かったんですよ。別に、「ロシア人」で。で、またカザフスタンとか、ウズベキスタンとか、東洋人に似てるんだよ。だから、彼たちと近い、そんな感じがね。彼たちもね、そう感じて、つきあいやすいような体でした。ロシア人との差別が少しあってね。東洋人、アジア人っていうんだな。カザック、ウズベックとか。別にそういう区別はなかったんです、でも、僕たちの考えでは、ロシア人たちより付き合いやすいんでないか、って、僕たちの考えだけど。アジア人はアジア人でないかって。彼らはソ連国籍です。91年までは。

—ソ連崩壊についてはどのようにお感じになりましたか？

党员だったしね、分けられたらだめじゃないかって。やっぱし、一緒になかったら駄目でないかって。分けられたときに。一緒になった方がいいんでないかって。僕は、エリチンを支持した。ソ連は続いた方がいいなって、その時は。後で考えてみると、自分たちの国を探して、独立する気のある国は、独立しないとだめでないのかって。それは、後ですね。急にそんなみんな分かれるってなったときは反対しました。党员だったからなのか。まあ、そういうですね。共和国を残した方がいいんじゃないって。でも、独立したいって民族は独立した方がいいでないかって。

—共産党员として特別な仕事をなさったことはありますか？

なんて言うかな、建築会社の責任者をやったことありますよ。91年のあとにも残れてって党员たちで会議をしたこともあるんだ。そのあと、船乗りするようになってから、ああ、92年に解散されたでしょ、それで僕たちは出て来たんです。

—その後のできたロシア共産党には入らなかったのですか？

別に入ろうとは思わなかった。党员証は持ってただけど、韓国来るときに捨てちゃった。もう必要ないって。これは別に言わなくていいことなんだけど。正直に言いたいんで。あなた達の前で。共産党入っていたって言って、喜ぶ人間いないんだよ。党员で、ロシアで責任者の仕事やったって、別にそれは言わなくなったけど、あんたたちが歴史に対して知りたいっていうから。仕事が仕事だったし、使っている人も多かったし。会社の時は40人50人、部長なった時は、100人くらい。ロシア人の前でも大きな声を出せましたよ。党员だったし、課長部長になるにも、党员にならないといけないし。

—A・クージン氏をご存知ですか？

ああ。知り合いではないです。彼は州の。僕はコルサコフ。大きな大会とかある時は見ることもあったけど。本は読んだことある。別に、なんでもないよ。事実としては間違っていないけど。感心するって言うのは、そういうのはないです。

—このあたりの環境はいかがですか？

公園ですね、朝は運動しに歩いています、天気の良い時は。することがないんです。自分の健康を考えて運動するようになるんです。

—韓国で好きな風景などはありますか？

好きなのね、温泉行ったことあるんです。それが記憶にあって、カンウォンドにあって、なんて言うんだろう。個人的に行ったんです。一週間ですね。良かったですね。日本に行った時も温泉行った時もありますよ。定山溪、そっちですね。3日泊まったのかな。地下室に、温泉があって。そこ3日くらいいたですよ。兄さんのとこ遊びに行ったときに。

—サハリンにいるときは、韓国に対してどのようなイメージを持っていらっしゃいましたか？

日本時代に、6年生の時に、地理で習っていたから。朝鮮半島があるって。で、やっぱり地理の時間に朝鮮半島ってのがあって、ソウルが京城ってのを記憶してます、釜山、それから、クムガンサン、習ってわかってました。朝鮮半島は、親の生まれた土地なんだって。

—お父さんは故郷・カンウォンドの話はよくしてくれましたか？

そうですね、日本時代はしてました。どんなところにいて、兄弟は何人でって、家族に。学校時代ですね。

—ご両親のお墓はサハリンにあるのですか？

サハリンに、帰った時は必ず。お父さんたちのお墓は大泊でなくて、マカロフ、知取。私たちは、父親は51年に、お母さんは61年、10年後に亡くなった。お墓を持ってくる気持ちはないですね。そのままに。

—朝鮮式の作法などはまだ残っていますか？

全然ない。あるというのは確かに聞いてました。よけて飲む、挨拶の時は手を添える。ロシア人はそういうの、全然ないし。それはやっぱ、若いころから、うちでもそういう、お父さんの友達も来たりしたときに、そういう態度をしているのを見てね、そして、また親たちも教えてました。こういうときはこうで、朝鮮のあいさつはこうだって、年上の人の前ではタバコをのんじゃいけないし、酒を飲むときも、気をつけて飲むと。家庭の中で。学校では日本人に合わせて。だからね、僕たちの時代は変わったんだな。そういう風俗がなくなるようでしたね。また僕たちも樺太にいたんだから、歳とった人間に手を出したり、父さんたちの近い友達とか、そういう人には酒を気をつけたりとか、ありますよ。そして、また、僕たちの時代でも、父さんくらいの歳の間ば、そういうことする必要ないって、そういう時期になったからって。でも、気をつける気持ちはありますよ。守りたいって言うか。

—お酒は飲む機会はよくあったのですか？

建築課で働いているときは飲みました。でも、好きではないですよ。やっぱし、仕事のためですね、ロシア人はこれがなかったから駄目ですから。その前は全然、酒って、若い時は。今は全然。それがもう20年以上。酒は切ってしまった。酒もったときに、飲むべって持ってくるんですけど、相棒がないとなんだから、って。だから少し、口だけつけてね。そんなに酒は。20年以上になるな、前は少し飲みすぎたんだ。ロシア人は、начальник（責任者）だから、やんなきゃだめだって。お酒を飲めなかったら、そういう仕事ができないって。だから仕方なく。彼らと飲むときりが無い。お前、おれを考えてくれるなら、飲ま

ないとだめだって。そういうのが。だから、仕方なく。倒れてしまう。家へ帰ったら、奥さんに怒られちゃう。酒は体にも悪いけど、飲まなかったら仕事になんないし。しかたない。失礼したこともあるし。酒はほんとうに、よく考えたら、よくそのときに切ったなって。やっぱり、仕事、やめたあとは楽だったよ、切るのが。現場の仕事のために、付き合い酒が強かったですよ。自分では、家に酒があっても飲まないんですよ。奥さんに、家で少しずつ飲んだ方がいいからって、言われたけど、家にあっても飲まない。友達でも来たら、付き合い酒ですけど。お茶は、ロシアの。息子たちが持ってきたり、送ってくれるから。やっぱり、чай（茶）が。ここでは кофе（コーヒー）。coffee 飲みます。ロシアにいたときも、coffee、1日3回くらいは。癖ですね。ここ来ても。持って歩いている。君はいつでも持ってるねって。別に他のものもたくさん送ってもらいます。なんか持たせまですって連絡がるんだけど、イクラ、マスのね、それを持ってきてもらって。ここには、ないんですよ。だから、たまにはね。塩漬けの、ご飯と一緒に、日本時代にそういう癖があったから。一ソ連時代は、お米を食べることはできましたか？

米、食べてました。朝だけはね、パンにバター付けて、カルバサ、あれと。それで朝ごはん、昼は食堂、現場で。晩に家来てから御飯。休んでいるときはやっぱり御飯ですね。サハリンでも売ってました。中央アジアから持って来てた。いまでも、息子たちも米食べてますよ。パンも食べてるけど、米も。やっぱ、東洋人は米だから。1日1回は駄目でないかって。お米は大丈夫でした。

一ソ連時代にも朝鮮式の食器などを使っていたのですか？

家はお茶碗がありました。金属製の、昔からの。箸もそう。サハリンで手に入りましたよ。日本時代からあったやつとか。ユジノにも日本の店もあったでしょ、今でもあるでしょ、日本の食料とか売ってる。今でもあるはずだ。ソ連時代は、そうですね、北鮮からですね。今は、韓国から。サムスン。ロシアの、ペテルブルグ、LGの店とかサムスンの店とか立派なのあるしね。韓国から商品が入って来たのは90年代から。それまでは全然。ロシア製品が減るのは、複雑な気持ちですね。

一オリンピック観戦の時等は、日本と韓国、あるいはロシアのどの国を応援しますか？

やっぱりね、日本のチームがやる時はね、日本を。自分でも不思議な点がありますな。日本のチームが勝ったらいいんでないかって。やっぱり、小さい時からそういう教育を受けたんだか、そういう気持ちがありますよ。残ってますよ、大会とかみたら。バレーボールとか、日本チーム強いですよ。ここ来てからは、韓国も。サハリンいるときは、日本チームを余計に応援したい気がしました。教育がそうさせるんだか。自然に出てくる。やっぱり、日本のチームったら、勝てばいいなって。不思議だね。自分でもそう思う。何の意味で、自分は応援するのか。ソ連はだからね、自分たちが住む国だったけれど、そんなにも、やっぱり、アジア人だっちゃん意味なんだか、自分でも不思議に思ってますよ。小さい時の教育を受けたためか、いい点が多い気がするわ。いまでもそう思ってます。だからあんたたちも、将来歴史に対して研究すると思うから、心にあることを言ったんで

す。僕は。党员ったら、普通喜ばないんだよ。こういう風にあなたたちが研究しているから、思っていることを言いました。正直に自分に思ったことを言っているんだから、自分の生活したこと、自分にあったことを正確に言ったんだから、心配しなくていいですよ。

No.8 李炳玉 1933年4月22日 西柵丹生

(聞き手:今西一・天野尚樹)

李炳玉、生まれは昭和8年、4月22日になってます。兄さんが、李炳律。サハリンの知取で、知取の次のね、柵丹ってとこで生まれました。お父さんは早くに亡くなりました。お父さんは、そのとき朝鮮の平安道でね、大正時代に日本へ渡ったみたいです。この兄さんと二番目の兄さんのふたりは日本生まれなんです。三番目の兄さんと私と弟はね、樺太生まれ。三番目の兄さんはね、西柵丹と知取の間にね、サガマ⁸というのがありました。そこで生まれたんです。弟の私はね、西柵丹。

—お母さんはどこのお生まれですか？

朝鮮の平安道生まれ。大正時代に日本に来ているから。

—日本へはいつ来られたのでしょうか？

それはわからないんですけどね、私たちが年頃になったら、そのときお父さんが亡くなってしまったから、お母さんが言う話が、絶対に北鮮帰るんでないって、その話。その言葉が頭に残っています。なんも仕事なかったんです。自分わかるのは、お父さんが病気になってから、亡くなって、5歳か6歳の時なくなって、母さんは子供を5人つれて、サクタンに個人の家を持っていたんですね、そこで畑をしながら、母さんが女の体だから、苦勞したんだらうけど、役場ってとこに、役場だらね、馬も牛も借りれてね、馬に乗って奥の畑ってとこに行ったんです。行ったり来たりしたんです。牛もいたし。農業もね、そのとき、秋になったら、いももみんなよくできたみたいだよ。供出ってもんもあったんだよ。で、納めたりしてね、それで食べて行ったんだね。それでいっつもね、母さんが子供5人つれて暮らしていたからね、その付近の日本の方がね同情をさせていただいて、おかみさん、おかみさん、て言葉をわかってます。朝鮮人が私方、一軒しかなかって、そして、隣組長さんが、おかみさん、おかみさん、て覚えています。

—学校はどうでしたか？

国民学校のね、5年生から6年生にあがるときね、戦争時代だったでしょ、その付近の方が、その家庭で軍人出て行ったら、草取りとかをさせるんです、わしらに学生方に、勉強もね、みんなもね、一生懸命しなかったし、冬だけ、勉強したのは。勤勞奉仕。よくあるいたよ。道歩きながら、三つ葉の花あるでしょ、種を集めれて。いろんなことした。

—その学校には日本人はたくさんいましたか？

同じ学校。日本の人の方が多かった。朝鮮人が何人いたかな。

—朝鮮人が集まって暮らしている地区はありましたか？

なかった。そんなのなかった。私たちは日本の人とつきあっていたから。

—朝鮮人ということで、不愉快な思いをしたことはありましたか？

それは知らないね。知らないで暮らしていた。朝鮮人だけど、うちの兄さん方も日本語達

⁸ 茶釜 (ちやがま) か。

者だし、頭も良かったから、そんなにね、迷惑をかけたみたいでない。よく暮らしていたんですよ。

—終戦の後はどうしたのですか？

そうね、そのときは、45年度に戦争終わって、ひっくり返ってしまって、そのときは私が13歳だね。学校なくなってしまってね、今度は朝鮮学校を開いたんですよ。何年か、一年か二年歩いたんです。弟は、知取の朝鮮学校に入ったんです。なんだかんか、15・6歳になってしまって。そうするともう、年頃になったから、仕事し始めたんです。ロシア人が出て来たから、ロシア語もわかんないし。

—日本人とロシア人との間で摩擦はありましたか？

それはみなかったね。そういうことはなかったよ。

—日本人の引揚を見てどのように感じましたか？

引き揚げたね、そのときねひとりがね、交換手の仕事をしていた人がいたんですよ。日本に帰らなきゃならないからね、そのとき「玉ちゃん、玉ちゃん」って呼んでたんですよ、玉ちゃん私の跡取りしてくんないって言うから、何って言ったら、交換手、すぐそばにあったんですよ。してあげるよって。そのときはロシア語も少し、行くとか帰るとか、わかってたから。名前ももう忘れたけど。ちょっとの間ね。ロシア語はね、そのとき交換手の仕事はね、受け取りました、伝えます、それでできたから。あとはなれだから。

—交換手のお仕事は長くなされたのですか？

一年だね、炭坑なんですそこも。交換がそこから移ったんだか、引っ越したんだか、それはわかんない。今度は、そのときは17歳になるんですけど、徴用かかるって、徴用かかるったら家の母さんが、鯉場行くから駄目だって、したからどこで仕事したかって言うとね、**магазин**、店屋に入ったんですよ。パン売ったりね、小さなね、兄さんも同じところで働いていて、3年くらいして、二十歳になったから嫁に行きました。

—どんな方と結婚なされたのですか？

結婚した夫はね、タチバナってひとなんだけどね、音楽家なんですよ、アコーディオンの。

—日本人ですか？

ううん、韓国人。その人はね、朝鮮のカンウォンド生まれ。で、3歳の時にね、親と恵須取に来たの。

—音楽家として生活できたのですか？

ええ、嫁に来たっけ、ユジノサハリンスクで仕事していたんですよ、日本の人方と。16歳からアコーディオンをつかんでいたんですけど、苦勞していたんでしょうね。そのときから、アコーディオンのトンボってのを使いながら、親たちが、昔の親だから、そんなアコーディオンで食っていけるのかって、怒ってたみたい。夫なる人がね、家出をしたんですよ。してまた逃げて来て、そこで日本の人方と会ってね、楽団始めたんだって。恵須取に慰問にもあるいたしね、いろいろしたんだけどね、親たちがうるさくてね、家出して、その楽団の人と。

—緊急疎開のときはどうしていましたか？

13歳のときね、敗戦になってからね、男の人は残って、16歳以上は残って、女の人は引き揚げようってなので、柵丹から落合まで来たんですよ。落合の大きい学校まで来たんですよ、そこまで来てストップされたんですよ。行かないからって。その前がね、学校があったんだけどね、焼夷弾おとして家事になったりね。そこに10日くらいいて、また家に戻って来て。

—朝鮮人だから緊急疎開の船に乗れなかったのですか？

朝鮮人だからではないんでない。日本人の方、一緒に来た日本人もいたから。うん、教えてくれた。日本人も一緒にいたんです。池田って先生がいて、みんなで一緒に戻って。

—ソ連時代はどのようなお仕事をなさいましたか？

そのあと、縫物を始めたんだけどね、洋裁の方で裁断士を始めたんですよ。それで裁断士でね、ドレスの方の。そこしかないから。個人営業は全然ない。ユジノサハリンスクで。

—旦那さんはそのあとはどんなお仕事をなさったのですか？

楽団もね、解散してしまっただけね、そのあとすぐね、師範学校の音楽の先生になりました。25年かな。ユジノに。師範学校がね、うちの夫が入る、その年にね、敷香から引っ越ししてきたんです。その年にうちの夫が入ったんです。

—戦後に国籍はどうになりましたか？

国籍はね、そんなときはね、臨時の国籍を持っていたんですけどね、ロシアの国籍をもらえて法律が出てくるんですけどね、うちの大きい兄さんがね、本書いた人がね、国籍出さなきゃだめだって、暮らさなきゃだめだから、ソ連国籍をもらわなきゃだめだって、すぐ出しました。何年かな。とにかくね国籍を出せて、その年に出したんです。ずっとソ連で。

—朝鮮人と言うことで、不当な扱いを受けたことはありましたか？

差別はされない、差別はされませんでした。私はされませんでした。中には悪い人もいるからね。ごたごたしたら、お前は朝鮮人でないかって、言われたこともあったかもしれないけど。まあ、なかったですよ。

—お子さんは何人いらっしゃいますか？

二人。男性と女性。生まれたときからソ連国籍、仕方ないから、行くことも来ることもできないから。出て行かないから。

—サハリンの外へ行ったことはありましたか？

本国へは行けるけどね、日本はいけない。自分たちのね、社会主義国とかは行けました。モスクワ、一年に一回ずつ行ったり、共産主義の時代はね、一年間仕事するでしょ、オッブスくれるんです。休暇をくれるんですよ。その休暇がね、一ヶ月か、忘れてしまったけど。お金もくれるし。他の国に行く考えもなかった、行っても目をつけられるしね。やだから、行く考えもしなかったし。家の息子が大学で勉強しているとき、うちの息子はねノボシビルスク、ノボシビルスクで勉強していたんです。娘はね、樺太の師範学校でね、英語、ドイツ語とか外国語を教える学校があったの、お前はロシア以外は行ったことないか

らって、ロシアの合衆国どこでも行ってきなさいって、言ったらね、どこだっけかな、チェコスロヴァキアに行ったんですよ、わしらは行かなかったけど。

—ソ連時代は生活は安定していましたか？

うちの夫がね、師範学校で仕事を始めてからね、よくなった。その前はね。67・8年度からだね、生活が良くなったのは、師範学校の教師だったから500ルーブルくらいで。私も裁断士の方だったから、500ルーブルくらい。貯金したら飛んでしまったけど。インフレで。

—60年代はどうでしたか？

良かったね。スターリンがいなくなったから。フルシチョフも、ブレジネフになってから良かったね。マレンコフも、まあ、ちょっとあれしたけど、ブレジネフが一番、長くしたしね。

—北朝鮮からの帰国の呼びかけというのはありましたか？

あったね、嫁に来てから、同じ朝鮮人だからなんだけど、お母さんが行くなって、だから一回も行きませんでした。今思うと一回くらい行ってもよかったかなって。

—周りで、無国籍と言うことで不利益を被った人はいましたか？

ちょっとそういう話は聞いたよね。誰がだかはわからないけど。ロシア国籍持っている人方はいい生活をしてみたい。共産党員ではなくてもね。うちの兄さんも共産党員になっているんですよ、みんなねいい職場をもらいたくてなっているひとがたくさんいた。頭がいい人は下になって働きたくないからって。部長とかは、朝鮮人にはなれなかったよ。そういう韓国人も、悪いことしたわけじゃなくて、いい職場とりましようって。

—ソ連時代は教育、医療は無料でしたよね？

ただだった。

—帰国願望はありましたか？

ありました。日本へ行かされればもっといいのにな。日本時代の思い出があるから。日本に帰ればいいのにな。韓国に帰るって言うのは、うちの主人も、その前にうちの息子も、あ、ペレストロイカした後、今度は手紙も行ったり来たりし始めてね、そのときまでは、樺太へ日本人の観光団の人がくるでしょ、近付きもしたらだめだったんですよ。近づいたら、何の話をしたんだって。したから、遠くでわざとみたんですよ。ペレストロイカからはね、手紙のやり取りを始めたしね、うちの夫、恵須取と一緒に楽団をやっていた日本の歌手がいるんです、いまでもいます、手紙が来たし。

—日本にお知り合いがいらっしゃるのですか？

うちの夫はね、旭川、ショウノマサヒコさんて人、恵須取の一緒の小学校だし。何回も、二回くらい行ってきました。

—韓国に対してはどのようなイメージを持っていらっしゃいましたか？

オリンピックの後がね、ラジオも聞かれなかったんですよ。布団かぶって、日本のラジオを聞いたんですよ。テレビとラジオを聴くのは全然違うのね。それで、夫が絶対に外で言ったらだめだって、だから秘密で守っていたんですよ。日本のラジオも聴いていたから。88

年のオリンピックの後はね、韓国がこういうとこだってわかったんですよ。ペレストロイカの後はね、引揚、韓国に行きたい人は韓国に行きなさいってなってね、私は韓国へ行くよって言うと、その前にな、うちの息子が韓国へ何度か行っているんですよ、仕事でね。息子で言うのは、韓国はコジキがたくさんいるから、母さんみたいな人がいたら食べていけなくて死ぬって、民主主義だからそんなことないって、こっから引揚たらそんなことないって、いやぁ母さんそんなことないって、コジキいっぱいいるって、びっくりしたって、うちの夫も行かないって言うの、したら私一人で行くから、あんたのこなさいって、荷造り始めたの、そしたら来たの、98年に、仁川に、夫とふたりで。あのとき80軒。

—永住帰国を決心したのはどんな理由からですか？

インフレになってしまったしね。空がね真黒になったんです。これくらい金があったら、子供結婚させて食っていけるって言うのが、紙になってしまった。空が真黒になってしまった。一日でも早く、どこかへ行きたい気分になって。それから、ここへ引き揚げたんです。98年度に来たんです。

—旦那さんはいまどうなさっているのですか？

亡くなったんです。4年前。

—お子さんはいま何をなさっていますか？

息子がね、日本人と一緒に仕事していたんで、函館のヤマザキイサオと言う人と魚の方の仕事をしていたんです。小樽いるんだったかな。その人の店はね、電気品を売っているところ。家はねユジノサハリンスク。知らない人はいないんだけどね。

—インフレ時代はどうでしたか？

やっぱりね、生活は生活で固くなってたから、お金なくしたし、おかしくなった。

—インフレの影響で亡くなった方はいらっしゃいますか？

そんなことは聞いたことないね。そんなことないけど。もう、いやなって来たね。

—ダーチャはもっていらっしゃったのですか？

いや、ダーチャでなくて、個人の家持っていたし、アパートを持っていたし、法律、個人の家持っている人、アパートを持っている人は、個人の家持てるって、知り合いから電話来て、早く個人の家持てって、法律だから、権利あるからって、個人の家買ったんです。6カ月で、それでなくなった。そして、家を建てたんですよ。年金もらってたから、それでそこでバラの花を育てたんですよ。それ、韓国来るまで。そのバラの花のお金がね、金になって。

—永住帰国の話は、どのように知ったのですか？

いいっちゃう人もいなかったけど、ソ連にいたくなかったから、来たんですよ。老人会って言うのがあったんですよ、その会の会長さんがね。その人、私たちが引き揚げる前に亡くなってしまいました。それから引き揚げ始めたんです。

—旦那さんの意見はどうでしたか？

苦労するってね。来るチャンスがあったらから、5年間ももどるれるって。5年間のあいだ、

ここに住んで、住みたくなくなったら帰るチャンスがあったから、息子は行くんでないっていうし、娘は、ママ、暮らしてみなさい、もし暮らして悪かったら、モスクワ引っ越ししましょうって、そういう目的で来たんですよ。娘はイギリス。娘はここで英語の教師をしたんです。サハリンで11年間英語の教師をしたんです。再婚していったんです。

—永住帰国後にサハリンへ行ったりしていますか？

サハリン行ってもいいんだけど、友達みんなここに来ているでしょ、行くと来なくなってるね。ここだとみんなここ来ているから。マージャンはしないけど、カラオケとかしたりね。

—お子さんはこちらへは来ますか？

子供は来る子もないし、娘の孫が日本語の教師なんですよ、私がサハリンにいる頃、ペレストロイカになってから、日本の方がたくさん来たんですよ、ウリアーナっていうんですよ、娘の孫がね、ウリアーナ日本語習いなさいって、自分も習いたいよって、そしたら爺さんが教えるからって、そして教えたなら、日本語の大学に入って、日本語を翌勉強して、日本の慶應大学に一年勉強して、そのあとまた、東京大学で一年勉強して、そしていまサハリンの大学で教師したんだけど、教師がつかってって、翻訳をしています。

—日本の本は読みますか？

日本の難しい漢字は忘れたけど、読むよ、テレビは見るし、相撲やってるし。祖父さんは日本のテレビしか見れないから、韓国のテレビ見ても何かってんだか。

—子供のころはどんな本を読んでいらっしゃいましたか？

日本時代は子供だから、学校の本しか読まなかったね。大人になってからもあんまり読まなかったね。たまに入ってくるでしょ、船乗りさんが持ってきたりね、あんど、庄田美智子さんが結婚するころ読んだりしたんですよ。そのあと、仕事も忙しくなったし、子供たちも大きくなったから、よく育てようと気持ちだけ、忙しくなって。日本の歌も覚えますよ、都晴美の歌とか。ラジオでね。美空ひばりの歌とか、美空ひばりさん亡くなったのもよくわかったし。その日本のニュース聞きたいけど、日本が今どうなっているか知りたくて、アンテナ買って、窓につけて。

—ここでの生活で困っていることなどありますか？

ないですよ、満足しています。

—安山に来たのはいつですか？

2000年、インチョンが98年。インチョンで満2年くらい。

—こちらに来て、サハリンの友達と別れてしまってさびしいですか？

いいや、サハリンにいるときから一緒に仕事をした、洋裁場で一緒に仕事をした人方います。3人か4人くらい。うちでもいまでも少ししています。ここへ2000年度に入って来てからね、退屈でしょ、食べたらすることないでしょ、それでここの係いるんですよ、そこへ私がね洋裁の勉強して、免状があります、それをもって、裁断士の免状なんだけど、縫物してもいいですかって、言ったら、看板をかけてもいいですよって。2~3年の間、看板かけました。そのあと、看板とって。たくさんはいらないから。そうしないと退屈だから。

—外部の韓国人で知り合いますか？

いますよ。おりますよ。韓国の人たち。気持ちいいですよ、やさしくしてくれます。

—韓国の印象はいかがでしたか？

びっくりしましたね。建物がすごいね、看板もいっぱいかかっているし。ロシア人がもう少し一生懸命してくれたらね。ロシアも良い国なんですよ、樺太もいいけど、本国渡ったらね、景色も良いしね、バイカルもいいですし、汽車のっていったんだろうか。サハリンもね日本時代に使ってた温泉があるんですよ、日本の温泉に負けないくらいの、ロシア人はなんでしないんだろうね。サハリン行ったら、うちの息子おりますよ。

—学校はどこで通っていたのですか？

柵丹の学校だったんだけど、先生の名前も全部忘れました。朝鮮学校はいかなかったね、でも、炭坑の中の家なんだよね、そこで何人か、あるいたんです、先生も、そこにいる先生が教えてくれました。

—もし戦後に日本と韓国、どちらでも帰れるってなったら、どうしていましたか？

その時の気持ちは日本に行きたかった。一緒にいてからね、悪い生活をしてなかったから。その時の気持ちが残っているから、行ってからどうなるかはわからないけど。それは本当に45年間ロシア人と暮らしたけど、あんまり縁はなかったです。あつたら、来ないでしょ。

—родина（祖国）はどこだと思っていますか？

日本時代は日本に暮らしていたから、日本がローディナと思ってたけど。こっちきたら韓国。子供にはすまないけど。

ひとつねお願いがあるんですよ、日本時代に一緒に歩いた友達がいるんですよ、訪ね人を出したことはないんですけど、北海道にいるってことはわかっているんですけど、あの、そこにね、シモダミサオって人がいて、一回かけたら、出ても来なかったけど、ノムラスエコって人がいるんですよ、同級生なんですよ、その人の兄さんがね、タボ、うちの二番目の兄さんと同級生なんですよ、そのタボがなくなったんですよ、その下がノムラユキコ、その下が、スエコさん、スエコさんが今いるんだろうか、いないんだろうか、北海道なんです。ノムラスエコさんがね、一緒に学校あるいていました、農業の方で暮らしていました。叔母さんも今頃なくなったでしょうね。ノムラトシコが一番下にいるんです。学校へ行っても、母さんの乳飲んでたよ、って子なんです。スエコさんは頭もよかったんですよ。いま生きているんだか。声でも聴きたい。

No.9 金都榮 1933年10月15日 知取生

(聞き手:今西一・金鎔基)

—お父さんはいつ樺太へ渡られたのですか？

1885年度生まれで、36年度に。(ハングル)父さんはサハリンに、日本に行ってからさ、日本で以てサハリンへ入ったのさ。日本の大阪。一人で行ってから。大阪行って、サハリンに。そうして僕たちを呼んだわけさ。あとで家族をつれて。

—どんなお仕事をなさっていたのですか？

炭坑夫です。

—学校はいつまで通われましたか？

5年生まで行ってからさ、卒業できなかつたよ。

—お父さんは、戦争終わるまで炭坑で働いてらしたのですか？

炭坑で働いていた。

—戦後はどうになりましたか？

ソ連の軍隊が入って来てから、1946年にサハリンに朝鮮学校をお父さんが建てて、お父さんはそこで。

—朝鮮人の組織はありましたか？

それがあつたんです。お父さんは、フジモト・キンタロウです。韓国名は、キン・ソッキ。

—その朝鮮学校はどこにありましたか？

白浦。あのときは4年生まで。一年から4年。

—ハングルを教えだしていたのですか？

そうそう。

—戦時中は日本語教育をうけていたのですね。

そう。

—なぜ戦後になってハングルの教育を始めたのでしょうか？韓国へ帰るといつもりだったのでしょうか？

そうですね、みんなそんな気持ちを持っていました。白浦からでたのが、47年度、ドーリンスク、落合ですね。落合で2年くらい住んでから、ユジノサハリンスク、豊原ね。そしてそこでまた、2年くらいいてから、49年、コルサコフ。そこで、朝鮮学校7年終わってから。

—朝鮮学校に学生は集まったのですか？

そうですね。お父さんは白浦で、学校を作って、大泊は別の方。したから、そのとき樺太では一番先に(白浦で)朝鮮学校っていうのができてから、47年度頃にユジノサハリンスクに朝鮮学校を建てて、同じ年に大泊に。今はないんですよ。61年度に亡くなったんです。

—朝鮮学校はどうして閉校していったのですか？

そのころあっても必要なかったわけさ。社会に入ったらみんなロシア語だから。

—戦後に帰国はできなかったわけですね？

国籍はあったわけさ、日本の国籍。それが、そのときになくなってしまっただけ、(ハングル)。ロシアのコスイギン、ロシア、韓国、日本の外務省が集まって、コスイギンがなんて言ったかという、樺太にいる朝鮮人たちは永住帰国するなら、日本に責任があるって、日本に返すなら今でも帰してやるって。そうやって言うわけさ。日本の外務省で連れて行くっていったら、いまでも、連れて行かせるって、こういうことになったわけさ。韓国外務省は、お前ら連れて行ったら、日本までつれて行けって。(ハングル：韓国政府は、日本まで来たら、そこから引き取ればいいのに、それをしなかった。) そうして、75年コスイギンがモスクワに来てからさ、樺太に(ハングル：)。その名簿に入るには、36で出してからさ、やってからさ、人があまりに多くて、コスイギンは、(ハングル：希望は出したけど、最終通知は来てない。北の圧力かかってだめになった。) だから、韓国でなんも返事をやってくれないから、今でも責任は日本がやってくれるわけさ。(ハングル：) 法律的にはね、僕の子供たちは日本のあれになっているわけさ、日本の国籍を持っているって。なしてったら、45年で、戦争終わったべさ、戦争終わってから、日本の国民としてのこされたわけさ、サンフランシスコ条約を終わってから、そして朝鮮人ていう、日本の国籍をほかしたわけさ。だから、それは法律的に(ハングル：日本の責任)。ロシアは、(ハングル：労働力をただでもらっているから、返す気にはならない)。

—北朝鮮へ帰国された方もいらっしゃいますね？

大して行ったよ。56年度から、60年度ね、その間に、独身だったし、みんな。だから、北朝鮮に行っても、(ハングル：)。独身たちがみんな行ったんだよ。

—北朝鮮から国籍をとるように、呼びかけもありましたか？

宣伝で来たからね。どうしても韓国では呼びだすこと出来ないから、そのときは朝鮮学校もなくなってしまったから、結局はロシア学校行くわけさ、それでもね、北朝鮮の国籍をもったら、(ハングル：ソ連では、北が無国籍かて残るかってことで、お父さんは北の国籍をとったって)。北朝鮮のとった。あとでまた、どうもできないからさ、仕方ないから、ロシアの国籍をとった。どうせ、ロシアに住むんだから。88年だね。ゴルバチョフのとき。少し、民主化の方にね。

—無国籍だといろいろと不便だったんですね。

それは無国籍だから、(ハングル：)。北朝鮮の国籍でも自由に移動できない。サハリンには多かったよ。

—お父さんの出身地はどこだったのですか？

北朝鮮だったのさ、北朝鮮だけ、(ハングル：) 故郷はそっちだけど、南朝鮮へ(ハングル：)。お父さんは北のピョンヤン。(通訳：それでお父さんは帰りたいと。朝鮮学校を次々作るのを見ると、かなりそういう)。民族運動とまではいかなかったよ。自分は朝鮮人だから、朝鮮民族だから。

—お父さんも朝鮮語の先生をなさったのですか？

いいや、(ハングル：寺小屋みたいな)。お父さんは、先生がいったんですよ、ひとり(ハ

ングル)。

—キンさんはどんなお仕事なさいましたか？

ロシアで、まあ、いろいろな仕事をしていたんですね。運転手もやったし。そして、あとの20年、なんていうのかな、窓とかドアとか作る、そういうところ。(ハングル：)

—お子さんは何人いらっしゃるんですか？

5人です。

(何かものを示して)

(ハングル：ロシアの国会から送られた労働英雄みたいな。表彰されたって言う証明書です。)

これはメダル、これはね、勲章ですよ。労働のあれで。こういうやつもなかなかもらった人もいないんですよ。これがね出て来てからね、一年半、政府からおれにやれって出て来たわけさ、国籍取る前に、(ハングル：国民だと思われて出されたが、国籍ないなら渡せないと、)北朝鮮の国籍もっているってわかったら。

—ソ連国籍はいつ取得されたのですか？

88年に、仕方ないから。子供たちの。(ハングル：子供たちの将来を心配して。北の方は見込がないから)行けて言われても、(ハングル：)。そうして、ロシアのパスポート88年の5月にもらったのさ、それはその(ハングル：)。タシケントとか、ウズベキスタンとか、モスクワとか、88年の5月にもらってから。

—老人会はいつ結成されたのですか？

老人会はね、永住帰国問題が1990年あたりにね、(ハングル：)。それして、帰国問題があとですね。帰国問題(ハングル：)。91年度に樺太中央老人会できたわけさ、そこに占拠されたのが、パクヘジョン、それを94年度にコルサコフ市老人会の会長だったのさ。そのときに一番うるさかったんだよ、共産党のやつらは出さない、(ハングル：最初、永住帰国問題が出たときに、共産党員だった人がいっぱいいて、ここの今の会長さんも副会長さんもそうで、ここへ来るのは反対で、ずっともめていた。老人会の中でもめた)。94年度に日本から32億円の(ハングル：帰国するというのが優勢になった)。サハリンの共産党はね、その金をサハリンに建てるって、そういう風にして喧嘩になったわけさ。日本政府はさ、どうしてその金をサハリンに建てるって。絶対出してくれないわけさ。だけど、老人会と共産党はいつも喧嘩して、事務室もなかったし。

—老人会の規模はどれくらいですか？

老人会(ハングル：サハリン16か所にあって、全体の連合会があった。)あんまり共産党たちと喧嘩するからね、(ハングル：)。そこで反対する人たち、(ハングル：)。そして、この大勢来てから、(ハングル：)。

—2000年くらいから永住帰国が始まりましたね。

そうですね。そして、仕方ないから、96年度にモスクワに、(ハングル：)大学生だったんだ、三日間で、ひとりも(ハングル：)。

—共産党の影響力というのありましたか？

今でも残っている。そうして、96年度6月5日に、韓国へ来たのさ、それは韓国政府で、(ハングル：)。韓国に入って来たわけさ。(ハングル：)辛かったんだよ、そのとき。(ハングル：)。それは半ばごろだったから、10月まで待ってもね、(ハングル：)。日本ではね、鳩山由紀夫、五十嵐幸三、みんな日本で会って来たんです。(ハングル：議会で老人会の会長たちが陳情にまわった。21人。そのあとに5人で、そのうち一番高齢の方が倒れて、面倒みてくれた、それをきっかけに報道された。日本からお金出すのに、韓国政府はそのあと3年間動いていない。)。そして、22日目にようやく、(ハングル：)この老人はね、死んでも韓国へ行くって。(ハングル：帰って、死ぬ時はここで死ぬって連れて来たんです。) ようやく、帰りました、サハリンに。サハリンで二カ月して、2月にね、韓国来てから、五十嵐幸三きてたし、高木健一、来ていたし、(ハングル：)。

—いまのサハリン老人会の会長はどんな方ですか？

あれは、サハリンのキム・サンジュ、いまは(ハングル：)。あのひとたちはみんな反対していたんだから。そうして、どうしても韓国で死ぬって、あれでもんで。そこでもってから、そして、故郷の村(ハングル：)。鳩山由紀夫、成功して祈ってた。鳩山、村山。そうして、そのあとに、サハリン(ハングル：)。30年生まれの家族たち。(通訳：サハリン派と帰国派の違いを聞こうとしているんですけど。)この名簿、570人。(ハングル：)(通訳：韓人協会というのがありますね。老人会ではなくて。彼は今でもやっている反対派。)ここにね、この五十嵐幸三、高木健一、(ハングル：)。

No.10 張日三 1933年12月3日 釜山生

(聞き手:倉田由佳・中山大将)

生年月日は、33年の12月30日になっています。本当は違う。ここに来た時にね、本籍があって、そこへ行ったら変わった。今はこうなってますから、昔は12月3日生まれになっていたんだけど、今は30日になった。7歳の時に大阪に行って、一年いて、それからサハリンに。釜山生まれです。サハリンは元泊ってありますね、元泊郡です。私が行く前に漁業で繁盛していたらしんですね。実際は、2,000人くらいの、そういう小さい村でした。元泊群元泊村です。

—お父さんはどうして樺太へ渡られたんですか？

父は商売ではなくて、徴用で行ったんです。父さんが行ってから、私たちも連れて行っただと。兄弟は6人で、5男1女です。私が三男で、二人なくなって、ちょっと前に一番上の兄さんも亡くなって。

—樺太に来る前はどこで暮らしていたんですか？

父さんの徴用って来たんだけど、父さんとは何ヶ月の差で来たでしょ。大正小学校ってここで1年間勉強しましたよ。夏まで。そこは朝鮮人のひが多かったんですよ。

—いまご家族は何人いらっしゃるんですか？

家族って、うちの息子、長男がユジノサハリンスクにいます。6人の兄弟で、1人は大陸にいて、二人はここにいます。

—韓国に親戚はいらっしゃるんですか？

親戚は釜山にいるんですけど、先輩はもういないし、甥のとかはいるけど、急に会っても、挨拶はしますけど、情ってものはないでしょ、会うことはないです。全然交際はないです。電話もほとんどないです。

—戦争が終わったのは、どうやって知ったんですか？

終戦のときは、日本の天皇陛下のをラジオで聞きましたし、戦争が終わったって聞いて。ロシアが来て、9月の初めころに豊原が爆撃されて、そういうことがあった。終戦は学校でラジオで聞きました。父さんはね、これで韓国に帰れるんでないかっていう希望だったんじゃないかと。私たち（朝鮮人）も何人もいないからね、国が負けたのに喜ぶも何も、みんなと同じような表情でね。でも、お父さんは韓国に帰れるってことで、喜んでいたと思います。元泊では私の住んでいた所では、朝鮮人家族は、10軒もなかったです。父さんの労働者で働いていた人は、みんな韓国系だったから、80人くらいいたんですよ。

—戦後は何をなさっていたんですか？

私は46年度に国民学校の6年生を終わりました、46年の3月に豊原中学校に入学して、28日間そこで勉強してから、まあ、解散っていうあれで、内容はなんもなかったけど、ロシアで3カ月の「Голпуск（長期休暇）」があるでしょ、あれが日本の方でわからなくて、解散っていったんだと思います。

9月に中学始まったんだけど、いやでいなくて。最後の日に同級生にやなことされたものだから。父さんにいかないって行ったら、じゃあ行かなくていいって。何もしてないのに、三年生の人に、4月の28日だな、うぁーと入ってきてからね、立ってる人はみんな叩かれて、上級生が、下級生を殴って、昔はよくあって。その一日前に、校長先生がね、今の上級生はなにを見ているかと、一年生が、大豆で遊んでいたのを校長先生が見ていてね、それで上級生がわーっと騒いでね。それでびっくりして、来いっていわれたけど、行かなかったな。

ロシアの軍が来たでしょ、知取は大隊が来たけど、元泊はもっと大きい都市かと思って、もっと上の人 came たんですね。それがものすごく知識のある人で、校長先生にね、中学生に勉強させ、って指示して、47年あたりまで小学校はあったんでしょうね。4月28日で、中学校は終わったんです。「отпуск（長期休暇）」ってのは夏休みって意味なんだよね。今考えると、4月に夏休みはないでしょ。ロシアの軍が政治をしたから、いろんな問題で、難しいってことで、解散っていうのもおかしいけど、私らは理解できなくて。

—豊原にご親戚がいて、そこから中学校に通っていたんですか？

元泊に戦前に校長先生が来たんですね、赴任して。彼が豊原でもって学校の先生をしていて、校長先生として来たんですよ。彼の息子が私と同じ、学級でしょ、二人でもって、試験にパスしてから、校長先生が知っている家に私たちを置いてくれて。もちろん、日本人の。校長先生はウリタトモエっていう先生。いまでも名前だけは知っています。校長先生は、入学証明をもらってね、その部屋でもらったんです。それで、元泊に帰って、9月前にね、通知が来たんだけど、行きたくないって言ったら、父さんが意味がないだろうって。元泊から、大泊に出て、大泊から、真岡、真岡から泊岸っていうところへ色々転校していたんです。父さんはロシア人に見込まれるような、責任の仕事をしていたんです。昔、土木建築の親方っていたでしょ、うちの会社が土木の建築で、その親方のような形をしたから、ロシア人からはいじめられて、何年間。お父さんは鉄道の関係で、労働者を集めて仕事させて、ほとんど鉄道から仕事をもらってから。学校はもう関係なくて、うちが引っ越すたびに私について行きました。

—朝鮮学校へは通ったのですか？

朝鮮学校は一年間行きました。それがね、48年、49年で7年生一年間だけ行きました。黄さんと同じ学級で勉強しました。それは敷香で。それが終わってから、ロシア学校に、はじめは入りたくないんだけど、父さんがうるさくて、仕方なく父さんにつかまれて、父さん言葉できないのに、彼がうちで悪さするから入らせて下さいって。敷香のロシア学校で。ロシア学校の7年に入って。ロシア学校では、ロシア人ばかりで。教室に入ったのは、黄さんと私くらい。

—ロシア学校には、朝鮮人はお二人だけだったのですか？

私が勉強することで、だんだん下には韓国人も混ざってきました。ロシア語はまったく知らないっていうか、習いたくないって心があったんですね。あんときは韓国人てバラバラ

だけどいたでしょ。中には、ロシア人と全然交際ってもんがなかったんですね。学校に入って、友達になって、家に来るし、学校でも遊ぶし。私は彼らより4年大きかったでしょ、4年間勉強しなかったもんだから、良い友達でね。親切で。

ロシア語学校、終わったのが55年。9月1日から、モスクワに行って、科学技術大学ってところ。ペレストロイカ以降ね、12大学ってのに入っていました。一番いいのは、高さんがおった総合大学だけ。環境がね、勉強はよくしました。したから、先生方もみんなかわいがってくれて、お前は大学に入るから、って家にも来てから、父さんにこの子は必ず大学に行かせなさいと。そうして、私のいるときに先生とモスクワと一緒にいったんですよ。汽車の中でいろいろ教えてくれて。モスクワ着いたら先生たちは南の方に遊びに行って。入学したって喜んで帰って。

大学では有機学の勉強を、化学でなくて、全部の大学が化学の大学で、有機とか無機とか、それから、爆発物とか、エネルギーとか、そういうのが総合でもって、化学の大学で、世界でも珍しいと思いますな。普通、大学の中にそういう化学の学部ってのがあってね。日本でもそうでしょ。そこではみんな6,000人くらいが、化学者としてね。ロシアの大学は5年間。

—大学入学のためにソ連国籍を取得なさったのですか？

53年に父さんの説得で、兄弟みんな反対したんだけど、ひとりでもらうことができないから、みんながもらうから、家族会議をやって、父さんが説得して、この子のためにお前らが犠牲にならないとだめだべや、と。そういう話をして、姉が泣いたりわめいたりして。一番初めでしょ、家が。もっとね、初めにみんなもらいたくないって人が多かったでしょ。それでもって、ロシアの国家ではどうぞって、傾向がありました。願書を出してから、半年くらいかかったけど、申請すれば、もらえました。家族で会議した時は、大学に入るってというのが一番の理由。

—ロシア国民として、徴兵されたりはしましたか？

私は歳の関係で、徴兵にはいきませんでした。大学では教練をして、大学を出るときは少尉でした。兄弟で軍に行った人はいません。徴兵ってのはね、うちにはいません。兄さん方は歳は上だし、私は大学生だから、免除。

—大学卒業後はどうなさったのですか？

大学に終わった後、3年間モスクワの化学の工場でもって、働きました。それは義務で、大学を終わったら2年か3年義務で、働くんです。うちは貧乏で、生活を維持できない様な家庭の状況で、母さんも何回も手紙をよこして、私もわかっていたんだけど、仕事をする人がいなかったから、仕方なく、サハリンへもどって。60年に大学を終わって、63年にサハリンに。ユジノサハリンスクに。

—卒業後の職場では朝鮮人は他にもいましたか？

私のね、工場はね新しい工場で、二三千人働いていて、黒い髪の毛のひとはいたけど、韓国人とか、朝鮮系ってのは私一人。みんな珍しくてね、どっから来たんだって。

—モスクワとサハリンではどちらが、自分が朝鮮人であると意識しましたか？

モスクワでは差別なんてなかったし。サハリンいるときの方が、まだ言葉もわからなかったし、やっぱりモスクワあたりは文明が、レベルがもっと上でしょ。サハリンに来ているのは、向こうから来た労働者あたりだから、知識的に大したことないし、なんだかっていったら、偏見が強かったし。そのあれがモスクワに行ったらなかった。

—モスクワ時代はどうでしたか？

モスクワにいたときは、金のない時だったから、メトロに乗るのにも、行こうか行かないか、ってくらいだったから、楽しみってもんはなかったね、ただ、勉強すんのが面白くて、友達付き合いも楽しくて。今でも、その頃の友達とは連絡をとっています。モスクワの時のロシア人のイメージと、サハリンにいたときのイメージとは全然違いますね。文明の差があるんだね。学生時代だし、学生だからね、差別ってものもないし。大学は行ったらね、級長がいて、1ヶ月に1回か2回、どっかに劇場をいきましょうって、金をみんなから集めてから、義務的に行ったんですよ。人生で一番いいことだったことはね、泊岸にいたときにね、浅野木材の会社があったんだね。その家に私は移ったんですよ。だからね、師範学校を終わった、浅野シゲコとその旦那ね。私に残したのがすごい財産だった。本ね、百科事典、51冊皮でできた作ったやつね。それから本がね2,000くらいあったんです。蓄音器、レコードのオペラも、山ほどあったんです。本読んで、レコード聴くのが最高の楽しみだったんです。それがね、その音楽が55年度に大学に入ったでしょ。大学の友達の中にね、私よりだめでね、私は音楽のことで、私が言ったら何のことだって。私はみんな知ってるって言ったらびっくりしていた。宝物のために勉強になったし。それは彼らが引き揚げるから置いて行ったもの。今でも、覚えています。浅野シゲコって書いていて。入ったのが、そのうちで、本にそう書いてあったんです。知ってるって言う人がいるから、それじゃあ、あなたが残した本で私が勉強したからありがとうと、必ず伝えてくれと。泊岸があって、炭坑があって、そこに農村みたいのがあって、そこに入ったんです。

—それでは、楠山という部落ですね？

楠山です。今はもう、昔のあれはないんだけど。いまも人はいるよ。私が入った時はもう、日本人はいなかった。私はもう彼女にすごく感謝しているんです。神社みたいのもちょっとあったと思います、そのそばに。川ももう変わって。個人の家があって、そのそばを自分で耕して、コルホーズってのがあって、そこで働いている人がいました。道が別の道になって、昔いた人がいま行っても全然わからないだろうって。敷香の朝鮮学校に行っているときは、私だけで、家族は泊岸にいたんです。5年くらいいたんでしょう。

—共産党には入党しましたか？

党员ではなかったですよ、何回も入れて言われましたけど、父さんがいじめられたものだから、私は政府ってもんははじめから、反対していて。準備できていないって。失敗したのは、党员になれば、出世がもっと早かったかもわからないけど。

—戦後、お父さんは何をなさっていたんですか？

ソ連になってから、お父さんは仕事はなかったですね。ただ、家で仕事をしたりして。父さんは早く亡くなったんで。1904年くらい生まれで。大学行く前に、亡くなって。53年に国籍をもらって、54年に亡くなって、私が大学に行く前に亡くなりました。

—ご結婚はいつなされたんですか？

結婚は、ユジノサハリンスクに戻ってから。65年に。朝鮮人で。サハリンに帰って来てからは、家具を作っている工場。サハリンに4か所あって、私が働いていたのは、一番本部で。そこでもって。4つの工場を合わせたら700人くらいいたんでないか。今は、閉鎖しています。試験場の主任として、最後まで。ロシアはね、エリートってのはね、党员になったら、党员でなかったら、頭がよくても、誰かが私を呼ぼうとするでしょ、別の場所へ、そういう場合、私が党员でないってなったら、それ以上、話が進まないんですよ。給料はいい方ではないんですよ、悪い方でもないけど。妻

—奥さんは何をなさっていたんですか？

妻はね、ミシンのね、裁縫を、服を作るコンビナートで。恋愛でもないけど、よくわかんないな。私遅かったでしょ、結婚したのが。当時にしたら遅くなったもんだから、結婚しなさいって、言われたからしたようなもんで。私より5歳若くて、38年生まれですね。韓国で生まれて、小さい時に親と来たんです。今は、ここで生まれたようになってます、安山で。実際は違うんだけど。そういうことあるんです。みんな呼んでから、どこ生まれだって、証明書がないから、じゃあ、安山にしましょうって。

—戦後に日本人が引き揚げていくのを見て、どう感じましたか？

私はね学問ができなかったでしょ、私たちがもっと早く行けると思ったんだけどね、韓国へね、みんなそう思っていたんですよ。疎開行った後は、さびしかったです。豊原の日本人の友達とは、その期間を逃してしまったね。一人見つけて、手紙は書いたけど、何人かは手紙を書いたけど、返事がないね。

—戦後は、朝鮮人の人たちの間では、すぐに帰国できるという期待があったんですか？

みんなすぐに韓国に帰れると思っていて、うちの父さんなんかも、一週間待ちましょう、一ヶ月待ちましょうって、すぐに帰れるだろうって。お父さんは本当にロシアがいやで、父さんは本当に行きたかったんですね。噂ってのもなかったけど、期待していたんだね。日本は負けたし、韓国は負けてはいない国だから、もっと先に行くだろうって。数でいっても少ないでしょ。韓国人は。船が何隻かあればすぐに帰れるって考えて。みんなすぐに帰れるって思ったんじゃない。それが一年たち、二年たち。あんときはラジオ何にもなかったでしょ。で、あきらめて。ソ連からの移動させないってのも、なかったんだよね。今になったら、スターリンの政策ってのが、国が大きいでしょ、こんな安い労働者がいますか、仕事もよくやるでしょ、スターリンにしたら宝物だよ。ばって言ってたら、なんでもやったんだから。帰りたいって言えなかったんですよ、そんなこと聞いたら、KGBってのがあるでしょ、誰かそんな噂を言ったら、何かきいたらすぐ、いなくなったんだから。KGBもできたのは46・47年だね。民政が変わってから、KGBってのが出て来たね。

—お父さんはいつごろ帰国をあきらめたのでしょうか？

父さんがもう行かれないよって、言ったのがね、49年あたりから。諦めなさいって言ってきました。日本のラジオからだめだってことがわかって。

—ソ連側からは朝鮮人の帰国について何も話がないんですか？

ソ連政府は、無視したっていうのかな、なんも相手にしない。それにKGBあたりは、大学を終わった人とかを連れて行ったりしたもんだから、みんな恐ろしくて、自分の気持ちなんて、表すことはできなかった。韓国に帰りたいとかって、言える雰囲気ではなかった。

また2・3回そういうことがあったでしょ。大泊で帰りたいって騒いで、それでもって彼らは別のどこへ隔離されて⁹。だからね、みんな勇気のある人って少ないんですね。みんなおそろしく、みんな誰も抵抗することができなくて。

—北朝鮮からの国籍取得や帰国の呼びかけはありましたか？

国籍を取った頃には、北朝鮮から運動がありました。お父さんは北朝鮮国籍には反対。あんときやっぱり、北は行く必要ないと。噂もあったし、父さんは社会主義が好きでないってこともあったしね。北朝鮮の領事からがやって来て、宣伝宣伝で、若い人方、100人くらいかな、金日成の大学に入れてやるって。北朝鮮から戻って来た人もいます。あの当時行った人は誰ももどってないでしょ。

—ソ連時代に日本や韓国の情報は手に入りましたか？

日本のラジオも隠れて聞いてね。相当いい機械でないと、日本のラジオなんて聞けないんです。ラジオったら、一番いいのを金をなんぼ出しても買って。日本がどうなっている、韓国がどうなっているってのは、自分で聞いたのからつくって、ある程度、どんなもんかってことを90年あたりでも知っていました。写真は後から。大学時代は全然ね。ロシアでもあんまりね、韓国のオリンピックで眼を開けてね、それまでは全然わからなくてね、だから、国家は好きなことを言えてね、何を言ってるんだ思ったけど、言えないしね。

—お仕事はずっと同じ職場だったんですか？

退職するまで一ヶ所で。89年に退職です。満55歳で。帰国の話はそのときはまだなかったです。私らが2000年に来たでしょ。97年度あたりに何人か来て、それから、そのときに年とった人かたは、みんな来れるわけでもなくて、ひとり来たならば、みんな来たっていう。それも30人か50人くらいか。

私が知っている、韓国の話が出たのは、1999年度の夏。行きたい人は、願書出して下さいって。ペレストロイカ始まっていたでしょ。だからね、離散家族の会ってのがあったし、そういう人たちが。そのあとに、老人会とか、韓国の在サハリンの会ってのができたんです。

—いつ安山に移住したのですか？

来たのは2000年の2月23日。棟ごとに来るんです。だから、私が来たのは3回目か4回目くらいでしょ。私たちと一緒に来たのは、一機の飛行機でもってひとつの建物。まだ完全

⁹ 都万相事件のことと思われる。

には建物できてなかったけど。飛行機は日本のお金で。あんときは韓国はまだ、なんにも。日本側の援助で、33億円で家を建てて。私はね、小さい時から、韓国ってのは、帰りたくて、帰りたくて、大学時代に帰ろうとトライしたこともあるんだから。でも、家族がいるからね、どんなことやられるかって思うと、決心できなかつたんだけど。釜山に6歳までいたけど、よくわかってますよ。韓国には来たかったです。いまはもう、二重だね。子供たちは残っているの、忘れようと思うんだけど、そんなできるもんでもないし。来るときはいつかは、この問題も解決するだろうと思って、決心したし。長くなって。

来てから、3回くらいサハリンに行ったね。日本のお金で2回行ったんです。いまは誰が出すのかはわからないけど。帰りたときは、言えば、日本から金が出てくるんだろうと。時期がね、日本の国会の予算金でもって、いつも、冬になるのね、遅い秋ね。9月ったらサハリンでは寒いでしょ。したから、行かない人はそのため。もう少し、早くできたらね、夏に行けたらいいと思うけど。戦争終わった時は、お父さんと一緒に、韓国に帰りたと思っていました。

—帰国の前に韓国へ来たことはありましたか？

私たちがね、帰国するまえに、一回来たことがあります。94年だか、95年に。あんときは、みんないこの兄さん方来たしね。私たちが来てからは2・3年のうちに亡くなって。釜山に帰って来た時は、すばらしかった、何とも言われなかった。韓国もこのくらい発達しているってことは、日本のラジオとかで聞いてはいたけど、オリンピックやったときに写真を見ましてね、すばらしいって、自分で見て思いました。

—サハリンの家族や親戚とわかれ暮らすのはさびしいですか？

サハリンの親戚がサハリンから遊びに来ることは今では簡単ですよ。電話あたりは安いカード使えば、1週間に一回くらい電話するけど、それがないと生活は楽でないよ。毎日考えていると、病気になってしまう。声聞くだけでも安心します。夫婦だけってというのは、日本の赤十字と韓国の赤十字と決めて。一番不満なのは、サハリンの代表もいてから決めればいいんだけど、あんまり無視して、韓国と日本だけでやったっていうのは、あんまりね。サハリンの朝鮮人の代表もいれて、決めればなんか変わったかもしれないしね。それが今でも反対に思っています。こういうことはね、ぱっと決めないとね。あの当時に、みんな一緒に行きなさい、って決めたら、無理やりみんな帰って来たけど。いまはもうちょっと難しい。韓国語わからないし。サハリンの家族が韓国へ来るのは全部自分のお金なんです。45年以前に生まれたひとは一時帰国とかあるけど。ビザの保証人は、私たちがね。私は今は韓国国籍。安山市は私たちによくしてくれていますけど、大きなことはね、経費はないでしょ。市では。永住帰国するなら、故郷の村しか選択肢はないんです。これからもないと思います。インチョン（仁川）にもあるけど。サハリンの帰国者のためにつくったところだから、そこ以外は行かれないんです。兄弟がいても、帰っていくっていう人はいないでしょ。兄弟の情ってものも、30年40年も空いていると、はじめはあるけど、時間たつとね、毎日遊びにきているとか、そんなことはないし、1年に何回か、電話くらいで、人情

ってのはそんなもんです。韓国の家族のところで暮らしているって例はないですね。女性がね、韓国の人に結婚した場合は、その人の家に行くってことはあるみたいだけど、親戚が連れていくってことはない。連れて行くって言うと、生活費の問題があるでしょ。ここに住んでいなかったら、生活費の補助をくれないんですから。生活には困ってはいません。贅沢するってことは昔から考えていないし。ここの前にね、テイチャンてのがあって、そこが最初で、ほかにね仁川にも古いのがあってね、少なくとも80人くらいで。ここが一番規模が大きくて、960人ばつと決まったから。今はね、空いているところもあります。問題はね、将来、30年後には建設した会社に移るんでしょ、そういう話を聞きましたから。ここに来るのはね、年齢的に30年したら死んでいる人しか来ないですよ。だから、彼らあんまり気にしていないんです。もし、若い人を入れるとなったらね、まあ私の憶測ですけど。去年も来たでしょ、たくさん。帰りたい人は帰れるんですよ。来たい人はみんな来れると思いますよ。45年前に生まれた人は。それは日本は45年以降の人は知らないってことだけ。

—いちばん使いやすい言語はどれですか？

ロシア語ってのは素晴らしいと持っています。プーシキンとかの文学とか。戦前はうちの場合は、家族でもある程度日本語でした。父さんは上手だし。ハングルにふれたのは、朝鮮学校に入ってからです。案外、今でも日本語で本を読むんです。韓国語を習ったって、韓国人には負けるでしょ。負けたくないって気持ちもあるけど。日本語で、本は読めますよ。日本語を話さなかったのは、友達の間では日本語で話していたから。主に、ベレストロイカ始まってから、また勉強しましたね。ソ連時代の40年間は忘れないために。私は6年生程度しかないのね、でも3年間くらい昼間は浅野シゲコの本で、いっつも読んでいたから、ある程度の知識はありました。いまはそうですね、日本語かもわからない。日本語で考えるようになっていなくてないかと思う。ものを考えるのは母国語って言うでしょ、今だったら、ロシア語でなくて、日本語っていうね。

—ロシア語とハングルを身につけているということで、近隣の韓国人との交流はありますか？

今ね、残念にも韓国とうちらは関係がないんです。韓国の政府もうちらを使おうとか考えていないし。ロシア語って言うのを関心はないんですね。習ったって、いいことないだろうって。今は、チャイナ語ですね。いまブームはロシア語と、中国語だね。

—サハリンのもので、欲しいものはありますか？

食べ物ですな、ロシアのもので欲しいものは。長く食べたものあるでしょ、カルバサとか。そういう特殊なものね、食べてないと、食べたいな、と思うね。私たちに言わしたら、韓国の味より、ロシアの味の方がもっとおいしいってのはありますね。私たちは金がないからどこも行かないでしょ。どう言う風に作るのかってこともわからないから、韓国の味ってものはわからないんです。テレビ見たら御馳走だなって思うけど。

—ソ連時代はお米を食べることはできたんですか？

ソ連の時は、うちは米を食べてました。パンは高いんですよ。パンには贅沢なおかずがなかったら、食べれないでしょ。ご飯は大したおかずもいらぬんですよ。そういう意味で、パンと米って、みんな米を選ぶんですよ。パンがきらいでなく、安上がりってことで。ソ連時代は、米は手に入るには入ったけど、質の悪い米でしょ。韓国人は米を1俵買うでしょ、そういうのに対応するにはたくさん持って来たんですよ。中央アジアや、キューバやベトナムから持って来てましたよ。お米の方が安上がりでした、パンだとバターから何かにつけないといけないし。

—近くにロシアのものを売っているお店がありました、近隣の韓国人も利用しているんですか？

近所のロシアのお店には韓国人はほとんど来ないっていいでしょう。

No.11 高昌男 1935年11月2日 知取生

(聞き手:三木理史・中山大将)

—知取の街の中に暮らしていたのですか？

知取の街っていってもそんなに大きくないんだけど、炭鉱ですね。炭鉱の部落みたいなどこ。

—お父様はどこ出身ですか？

濟州島です。

—サハリンでチェジュ出身というと珍しいですか？

珍しい、というか、たくさんいますね。この知取というところには、韓国の仕事がないと、うちの父さんは徴用ではなかったんですけど。募集で仕事探して。それで、普通そんなときは、樺太で探しますね。恵須取あたりに行くと、何ていうんだらう、そこにまた濟州島から来た人が集まってるところがあるんです。川北っていうところに、知取の川北っていったら、濟州島から来た人が集まっています。私生まれたのは、知取の炭鉱です。

—同じ時期に集団で濟州島から来た人たちなのですか？

バラバラです。うちの父さんなんか、日本に仕事探しに出てから、そこから来たんです。

—チェジュですと、大阪へもたくさんの方が渡っていますよね？お父さんは大阪を経由して、樺太へ渡ったのでしょうか？

わかりません。大阪を通ったんだかは。日本で住んでいたらしいんですね。詳しいことは聞いたことがありません。日本行ったちゅうのは聞いたことがあります。

—お父さんは何年生まれなのですか？

1年生まれ、1901年生まれですよ。生きていけば、100歳を過ぎていますね。私が35年に生まれて、結婚したですね。30年度位に来たんでないですか？私の考えだとそうだと思いますね。お母さんも、濟州島なんだ。私、長男です。ところが、私の父さんは再婚したんですね。濟州島に出るときに家族があったんですね。子供も、三人もいたんです。それで、日本に行って、日本から樺太に出てから、そこでまた結婚したんです。で、したから、ここには兄さんたちがいたんですね。

—お父さんの前の奥さんの子供は何人いらしたのですか？

兄さん二人と、姉さん一人。連絡っていうかね、連絡はあったらしいですね。あったし、私が35年に生まれて、何歳のときかな、3歳か4歳のとき、兄さんが来ていたですね。韓国では、そのときは、男のひとが家族を二つもつのは、大した問題にはなんなつかですね。お金儲けるのに出るって言って、お兄さんひとりで帰ったですね。そのあと、戦争で、全然もう連絡もなかったし。

—戦後にそのお兄さんたちと会ったことはあるのですか？

いま、探しましたよ。うんと、1989年ですね、私がノボシビルスクで学会があったんです。津波のシンポジウム。国際学会、国際シンポジウムがあったんです。そこで、こんど、日本の学者たちが来て、韓国から、3人の専門家が来ていて、ソウル大学から。彼たちと、彼たちが、私を招待したんですね。そのときに、89年に初めて韓国に来ましたね。韓国に来てから、ソウル大学に出張に来たんですけど、来たついでに、まあ、家族を捜す、親戚を探すっていうことでもんで、出てきたのが、うちの兄さんですね。父さんのはじめの。

兄さん出て来たんですね。私はもう全然、ロシアで世話って言うんですか、腹違いの兄弟はもう、全然認めないんですね。これは、もう他人になってしまう。

ところが、韓国ではね、お父さんがひとり、同じお父さんなら、ほんとうにこれはもう、なんて言うんだらう、親戚になるんです。家族になるんです。それで、兄さんがいるということで、探してもらいました。探してみると、兄さんも私を探していたんですね。なんしても、うちの兄さんには、うちの父さんのことが気になっていたんですね。ところが、父さんは 79 年になくなっていましたし、それで、して、その兄さんと姉さんが、下の兄さんはなくなって、二人残っていたんですね。最初、私も認めてですね、本当の弟として認めてくれたんですね。それが今でも、お兄さんとお姉さんなくなりましたけどね、その子供たちと、孫たち、孫でなくて、あの、叔父さんでしょ。お父さんの。韓国語では、**夸早**（叔父）って言うんですよ。お父さんて言う名前がついているんですよ。いま、連絡とっております。私も前に済州島に行ったんですけど、いま少し、他の問題もあって、行くこともできないですけど。二年くらい前までは済州島に行っていましたけど。連絡はとっていますよ。そういう関係があったんですね。

—お父さんは知取の炭鉱に、1930 年くらいにやって来たのですね？

炭鉱で仕事していたんですけど、サハリンは最初炭鉱だったんですよ。サハリンに来た人の話を聞いたら、普通みんな炭鉱で仕事していますよね。うちのお父さんも、やはり知取炭鉱ではたらいて、そこから、何年だかわかりませんが、40 年頃かな、西海岸に、樺太の西河岸に、マカロフは東海岸にあるけど、西海岸へ、恵須取のある方に炭鉱があったんですけど、そちらの方に、なんちゅうのかな、「モロッチ」っていうのかな、いま判りませんが、ああ、諸津。そこで、住んでいるとき、火事になって、いまでもその場面は残っていますね。真っ赤になって。そこで、今度、珍内炭鉱に移ってから、珍内炭鉱で学校に入り、小学校に 42 年度に入り、そして、43 年かな、44 年頃かな、うちのお父さんがうちを買ってからですね、上敷香ってところに、うちを買って、移ったんです。

44 年か 43 年くらい。私が 4 年生くらい。そこで学校に入って。そのときになにか、お父さんが、炭鉱でないんですよ。戦争が終わってからね。上敷香に炭鉱なかったですからね。なんだ、どこで働いていたのかな。うちはあったんですけど。そちらで、8 月 15 日に戦争が終わったって、あれでもって、何日後にはみんな、逃げなきゃならんって、持つもの、荷物だけ、持てるもんもって出てきたんですね¹⁰。まあ、ソ連の軍隊が近いって行って。私が出ながら思ったのが、焼いてしまえと。焼きながらずっと。記憶に残ってます。私は記憶というのは、1 年生入った時に終わりますし、上敷香に入ったときに、また、遊んだことを。学校ではもう、普通に朝鮮人だというのは感じなかった。学校ではそれはなかった。当たり前で。勉強しましたけど。小学 4 年生ね。3 月に 4 年生になったから。

—上敷香から、荷物を持って逃げたというのはどういうことですか？

それはね、上敷香でロシアの、ソ連の飛行機が飛んできて、上敷香には飛行場があったんですね、軍隊の。高射砲撃つのが見えたけど。爆弾を、爆撃をされましたけど。敷香、ポロナイスク、上敷香から、敷香まで、記憶がないけど、車かなんかに乗ったと思うんですけど、うちのお父さんとお父さんたちはみんな残されたんですね。男は残して、女と子供だけ、そこに。敷香の駅まで来たんですよ。そこで、うちの親戚たちと会って、上敷香と一緒に住んでいた親戚と会って、お兄さんの家族ですね、それと集まって、一緒に、汽

¹⁰ この一連の移動は「緊急疎開」によるものと思われる。

車に乗ったんですよ。女の人と子供だけで。その汽車が大泊までまっすぐ来たんだよ。大泊の埠頭があるでしょ、大泊見ました？大泊の駅まで来てから、歩いて行くんです。たいして、遠くないけど。歩いてから、埠頭まで行ったんです。して、そこで、記憶では、待ってたんですけど。おばあさんもいたし、うちのおばあさん、おばさんだな。4人に、うちのおばさんのうちの子供がいて、5人かな。それで、船に乗ったのよ、そして、一昼夜くらい待ったのかな。何日かわかりませんが、船に乗りました。乗ってから、それが最後だったのかわかりませんが。乗って、稚内まで行って、8月25日に着いて、そこで直接まっすぐ、函館まで行って、函館から青森まで行く予定だったんですけど、それやめて。函館と青森の連絡が切れたんですね。そこで、江別へ、疎開者は集まりました。韓国人だけですね、朝鮮人だけ。

—どの段階で日本人と朝鮮人は分けられたのでしょうか？

それがわからないんですよ。私は今でも。どうして分かれたのか。

—函館までは日本人と一緒にだったのですか？

そうそう、みんな一緒ですよ。

—江別に来たら、いつのまにか朝鮮人だけになっていたのですね？

ええ、そうです。それ私、わかりませんが。稚内で乗る時でも、記憶に残ってませんが。お母さんに、江別まで行かないといけないと。疎開者だというけど、そこには朝鮮人だけ集まっています。どういう風に集めたかはわかりませんが。して、そこで待っていたのが。そのあと、連絡が開いたと思うんです。函館と青森で。8月から10月まで住んでいたんですけど、そのときに母さんたちが、14年生まれたから30歳ですね、お父さんたちのとこに帰らないといけないと、女たちはふた家族で10何人になるんですね、子供たちが。したら、もう、どうすることもできない、それで戻らないといけなくということ、そこで、どういう風に連絡したかはわかりませんが、稚内まで行って、密航船に乗って、そしてそこで、6家族で、うちのお母さんが、宣伝というか、行きたい人は行きましょと言って、6家族集まって、江別出るんです。稚内来てから、10月の末ですね、船があって、10月30日ころに、船が出るようになって、船に乗ってから、小さいボートなんですよ、発動機というのが、人が私たちが、30人くらいいて、日本の方もいました。同じボートに。

日本人たちは、上の方、甲板の方。ボートといっても、本当に小さかったですね。上の方には、日本の方が20・30人いました。二回もボートが泊まって、心配したんですけど。ところが、朝7時に出たのが、夜に着いたのが、真っ暗で。海岸のところに。向こうから船が来て、連絡があったらしいですね。それで、樺太に着いたんです。内幌、というところあるでしょ。内幌と稚内は、見えるんです。海岸が。40kmくらい。そして、今度、詳しいことは、うちのおばさん、おっかさんの兄貴の人で、知っている若い人が来て、カシホっていう街があったんだよ、カシホ。ロシア語では、アドルメというです。元泊ってあるでしょ。あの下の方。そこに、行ってみましょって。行ってみたら、本当にね、みんな集まっているの。彼らもどうにかして、船を捜して、樺太を出る計画をしていたんだけど、そのときは難しくて出れなかったですよ。それがあったんですね。

—そのとき、お父さんはいたのですか？

そのとき、お父さんはいなかった。いろいろな密航船が歩いて。内路、内路ってあるでしょ。敷香の上の。それにいるって言わせて、行きました。お父さんと会えました。サハリンから出ましょって、考えて、船でもなにか。そして、そこで、ガステロで住むようになったんです。そこに飛行場あったでしょ。ロシアの群の飛行場ができて、ロシアの飛行機が来て、その裏で私たちは、住んでました。内路にはロシアの飛行兵がい

て、将校たち、彼たちは本当に、よく住んでたというのか、十分な生活してから、彼たちのどこに行って、物の交換とかして、それでもいながら、仕事してたんです。そのとき、私たちは腹が減って仕方がなくて。他の地域もそうだったんですけど、飛行場があるってことで、なんちゅうか。

46年から、51年に大水があったんです。家が流れてなくなって、そして、隣の町、村というのか、泊岸というところ、ガステロの上に、泊岸という町に移ったんですね。そこで住みました。そこで私はロシア学校に、私は朝鮮学校にも行ってらるんですね。日本学校を4年まであるいて、戦争の直後には。ガステロには日本学校があったのかわかりませんが、朝鮮学校っていうのができて、学校っていうのは名前だけで、先生というのはいなかったですね。ハングルというのは、わかっている人に習いました。先生というの、字をわかっている人が、韓国のハングルを分かっている人が、教えて、漢字とかも教えて、数学は一年二年の数学をやって、そういうのを教えて。そして、朝鮮学校っていいましたけど、朝鮮語は全然できなかったですね。私はまだ日本語。漢字を少し覚えて、漢字だけは、いま残ってるんです。そこで、4年間、48年に私は初頭学校4年終わって、形式で終わって、47年度にポロナISK、敷香に朝鮮学校ができて、7年、学校が小学校、中学校、高校というのがあったんですね。十年間みんなあるくと、中学校、ロシア語では中学校というの。7年生まで勉強して、そこでまた、勉強したらですね、仕事の専門学校とか入りたくて、大学で勉強したい人は、8年、9年で勉強しなくてはならなくて、それで、サハリンのポロナISKの7年生の朝鮮学校ができたんですね。

先生は主に、中央アジアから来た人で、中央アジアには朝鮮大学があって、卒業生たちが来て、彼たちがハングルをわかっていて、先生をして、それで7年生を終わって、そんなときやっぱり、そのときの韓国語というのは全然わからないんですよ、それでも少し韓国語を勉強して残っています。私が7年生を終わった時には、その上の学校はなかったです。朝鮮語の勉強するところは。それで、7年生おわって、ロシア学校7年生にあがったんですよ。それで、全然もう言葉が通じなくて、勉強できなくて、ひとつの学校に行ったら、断られたことがありましたね。6年生か5年生行きなさいと。数学はね、数学は朝鮮学校で勉強して、当り前に勉強して、数学好きで、数学はロシア語でもわかったんですけど、ただ、ロシア語ですね。入ってから勉強したのが、なんというのか、いま考えたら、そのとき私がどう勉強したのかわかりませんが、かなりロシア語を覚えなきゃいけないという覚悟をもって。辞典あるでしょ、日本の辞典で勉強して、ようやく7年生終わって、終わって、8年生、9年生、中学に入るようになって、ロシア学校ですね、はいって、それで、まあ、ロシア学校で勉強しているときはもう、本当に難しかったですよ。言葉っていうのは、そのときにわかっていたのは、日本語だけで、ロシア語も全然だめだったし、韓国語も、うちではね、うちではまたそのときは、日本語しか使っていなくて、親たちは韓国語も言いましたけど、私は日本語。お父さんたちも日本語でしたからね。ロシア学校をようやく卒業しましたね。本当によく勉強して。

それで、ロシア学校おわって、51年度に朝鮮学校を終わって、55年度にロシア学校を終わって、大学へ行つつもりで、大学を受けたんです。サハリンに師範大学があったんです。それに私は、私はどうしても大学を卒業する目的があったんですね。学校では、数学の方に行きなさいって言われていたんですけど、サハリンには数学専門の大学ってなかったんです。これあの、師範大学ですから、先生を育てる。専門にやる気になると、ロシア語で университет、総合大学があるんです。そこで、数学が専門に勉強できるってわかって、師範学校の試験受けた、試験はよく受けたんですけど、結局は、国籍がないということで、断ら

れたんですね。どうしてもだめですね。勉強したいけど、仕事しなさいって言われて、勉強したいんですよ。それで、中央アジアから来た朝鮮・韓国人、高麗人という朝鮮人たちが、政治部長とかはちがうんだけど、彼らたちのところに行っても、あんた仕方ないって、言われて、仕事しなさいって言われて、彼たちにそう言われて、涙出ましたね。そのとき、私たちは他国に住んでいるんでないか、って差別のあれを感じたんですね。お父さんの目的は私をどかして勉強させるってことで、国籍をとりなさいって、それで、私はロシアへ、申請書を出して、そのときは、申請書を出すと出てきたんですね。

ロシアの国籍を持ってから、サハリンには残らなくて、大陸まで行きました。一年目は、まあ入れなくて、二年目に入りました。長い話ですけど。数学を力学数学科に入って。学部で。入って、5年間勉強しました。入学したのが57年度で、卒業したのが62年度。専門はですね、応用力学っていうんですね。応用。そのとき、モスクワ大学を卒業しても専門が少なくて、いろんな機関から来てくださって、言われたんですけど、私はモスクワにのころうと思ったんですけど、親たちが、サハリンに帰ってきなさいって言って。

それで、サハリンには研究所がひとつあったんですね。海洋地質物理研究所、というのかな。小沼の。極東、サハリンの専門家は少なかったです。直接この、研究所長が来てですね、モスクワ大学に来てですね、私に話に来て、行きませんか。そのときに、ロシアでは若い研究者には住宅代を出してくれる条件なんですね。一番難しいのは、若い人、専門家が住むところがなかったんですね、その関係から、所長が私にあげますから。それで私はね、良い家をもらいました。私は何十年も、運が良かったと思いますね。2000年度までいて、論文も書きましたしね。ここに書いてあるように、専門は地震と津波ね。地球物理の専門の。地震、津波で、私の主な専門は津波でした。津波に対して、材料を集めて、太平洋地域の津波のカタログを2冊出しました。それは、世界でも使っています。

—ソ連国籍を取得したのは、55年ですか？

55年ですね。56年にとりました。55年は卒業して、55年の末に出して、56年の春にももらいました。

—研究所ではどんな立場だったのですか？

研究員ですね。ロシアでは教授というのは大学でしかないんですね。その時は私はまた、上級研究員ですね。博士号はとったですよ。

—論文を書くときは、ロシア名ですか？

私は全然使いませんでした。ゴ・チョンナムでした。ロシア語で。

—このころ、モスクワとサハリンというのは、行き来するのは飛行機ですか？

56年に、実は私の目的はモスクワではなかったんですね。近い大学に行きたくて、今のウラジオストックにありますけどね、その時に一番近かったのは、イルクーツク。そのとき飛行機に乗るのは難しく、そのときは2日くらい乗換しなきゃならなくて、汽車で行くのが一番便利だったんです。汽車の切符を買う時に、ひとりで初めてハバロフククに行って、ハバロフスクからモスクワに行く列車が来ていて、モスクワまでの席が空いているというので、買ったんです。

して、大陸出たんですけど、うちではどの大学に行くのかもわかってなかったんです。して、汽車に乗ってから、モスクワに行きます、と親に電報だけ送ったんです。して、やっぱりもう、今だったら、モスクワまで行く勇気がなかったんでないかなと思いますけど、そのときは何にも恐ろしいものはなかった気がして、田舎から来て、ひとりでモスクワまで行ったんですからね。今考えると、本当に。

—願書はモスクワに着いてから出したのですか？

ロシアはそうですよ。試験の時に行くんです。一年目は、点が少なくて通らなくて、二年目に、もう一年やってみようと思って。

—一次の試験までモスクワにいたのですか？

いいや、違う。うちに帰る気がなくて、うちに帰ったらもう一度は来れなかったですね。だから、私の友達がウクライナに住んでいて、友達が私を呼んで、私の近い人がウクライナから移ってきた人だったんです。うちに寄って行きなさいと言われて、そちらの方に行ったらですね、友達の親がですね、なんでサハリンに帰るんだ、ここに残って仕事しなさいと言われてから、残って仕事したんですよ。準備して。

—ウクライナの知り合いというのは、サハリンからウクライナへ行った人ですか？朝鮮人ですか？

いいや、ロシア人。泊岸で、一緒に街に住みながら、近しく住んだ人です。

—ウクライナでは、一年間受験勉強の他には何をなさっていたのですか？

農業でなくて、工場。レンガを作る工場で、なんていうんだ、レンガ運びをする機械、一ヶ月か少し動いて。そして来て、私は運がよかったのが、そのときにサハリンから大陸に来て勉強した人はそうはいなかったですね。モスクワ大学に入った人も6人かな。一緒に勉強しましたけど。物理とか科学とか、法律がひとり。私たちが来て、他のひとが転がったんですね。ノボシビルスクとか、イルクーツクとか。割とそちらの方。モスクワは遠かったから。

サハリンではいろいろな問題、サハリンでは、樺太では相当さびしかったんですね、これはもう今でも気にしますけど、差別というのは、国籍を持っていない人というのは、もちろんもう、無条件になんでもできなかったですけど、国籍持っていると、なんちゅうのか、出生地にレベルがあって、黨員にならないとロシア人は出世できないんですね。朝鮮人は黨員にはいれません。難しかったです。して、ロシアのなんちゅうのか、日本ではなんていうのか、新聞とか、マスコミとかは黨員でないといけないんです。新聞社ね。そういう仕事をしている人たちはみんな黨員だったんです。そういうこともあったし。黨員でも、出世というのはある程度レベルまであがると、それ以上はいけません。今では、州の議員とか、出てますけど、難しいですね。それはロシア人の、ロシア人自身が面白いひとたちなんですね。おなじ、ロシア人でしょ、どんな人でも、必ずロシア人を選挙します。それはアメリカと少し違います。だから、難しいですね。

—選挙があっても民族という要素を優先してしまうということですか？

民族というか、朝鮮人が出ると、もう、そちらの方にはあげないんです。投票しないんです。そういうのがあるんです。差別というのはですね、サハリンで樺太で朝鮮人がいるんですけど、大陸に出ると、差別は感じなかったですね。ソ連というのは多民族の国、民族の多い国、ですからね。勉強するのに、何も差別はされないんですね。サハリンでは少しそういう差別があったんですね。私はそう思います。

—会共産党には入りましたか？

私はもう全然入ってないです。入るつもりもなかったし。誘われたけど、駄目でした。共産党のコムソモール、ロシア人は若い時に、ピオネール入るでしょ、ネクタイが赤い、その次がコムソモールで、その次が党なんですね。大学に入った時に、コムソモールに入りなさいというので、私は全然最後まで入らなかったです。どうしてかわかりませんけど。

して、サハリンに住んでみると、いろいろな人と話してわかりましたけど、いろいろ苦労したこともありますけど、それが代表的というの、普通はロシアではよく住んだと思います。よく住んだというのは、サハリンでは、なんていうのかな、農業では朝鮮人はロシア人に負けないから、それは東洋人は農業では比べられないです。して、みんなねサハリンでは朝鮮人は普通、良い方なんです。ロシア人は貧乏で住んでいた人もいたと思うけど、韓国人の中では少なかったと思います。

私は研究の仕事しましたけど、ロシアでは研究者と、学校の先生と医者、一番、月給がすくなくて、私は120~180ルーブルのところ、300ルーブルもらってましたからね、要するに、学位を持って、博士を持って、全然彼たちは、労働者よりもらっていました。ロシア人は学者というのは認めていなくて、何もしないで食べていっている人なんだと。そういうような、扱い。それで、それでもね、私たちはね、ロシアではね、月給が多い人の人に入っているんです。労働者は月給の少ない人です。私たちは月給の多い人になっていましたね。なんていうのかな、何かあってもいつも労働者の方に関心を持っていて、私たちには関心を持たないですね。今でも見ると、今でも学者たちは、いい月給もっていませんね。お医者さんたちはもう、お客さんのお金があって、個人的に頼みますと、お金を持っているらしいですね。先生はまただめです。

—ロシアは昔から給料は少なかったのですか？

少なかったです。科学が発展していないとね、経済もうまく行かない気がするんですよ。ロシアは違います。科学の方にはお金を出さなかったし、核はロシアで発達していて、そういうのはね、どの国でも金を出して、発展しているでしょ、ロシアでも、そうですね。ロケット、武器をつくる技術があるでしょ、それでも儲けてますけど。そういう方面で仕事をしている人はいい月給をもらってましたね。

—永住帰国は2000年の2月ですか？

2月16日になりますね。

—帰って来る直前まで研究所で働いていたのですか？

40年くらい働いていました。62年には行って、38年間。

—サハリンから、韓国への永住帰国を決意したのは、どういう理由になるのですか？

理由というのは本当に私ね、まあ、私はまあ、55年度に差別されてからね、大学で、あんたは朝鮮人だと聞かれたときに、やっぱり私は、他国に住んでいる気がして。私は一度は朝鮮半島に住んで。私はこうしてここで話をしていますけど、大学卒業する二年前かな、60年の時に、私は友達何人かと、大学卒業した時に、北朝鮮で仕事しないかと、そういう気持ちもあったんですね。一度は、北朝鮮の大使館に行きました。そして、聞いたらね、私たち卒業した後、北朝鮮に行って仕事をしたいんですけど、と行ったら、どうぞどうぞと言いましたね。その代わりにひとつの条件がありますと、最後に一年でも二年でも留学生としておいてくださいと、学費を与えて下さいと。そしたら北朝鮮に行きますと。するとね、何日後かに答えが来て、あんたたちね、大学終わった後来なさいと。それなら私たち行きませんよと。そういうこともありました。それくらい、朝鮮半島に来たい気持ちはありましたね。

ところがね、もうかなりサハリンで仕事をしながらね、南朝鮮に対して、主に、サハリンに住んでいた人は、主に南の人なんです。57・8年度に日本の日本人の引揚の時に、そのときに引き上げたんですね。私たち朝鮮人たちは行きたかったんですけど、駄目でした。どういう風に区別したのかわかりませんが、朝鮮人の男の人たちで、日本人の女の人たちと結婚した人たちが、戻った例があったんです。そのときね、

もう北朝鮮ができていましたね。だから、南朝鮮に帰るといふ話はできなかったですね。まあ、そのときの話では、朝鮮に帰りたいなら、北朝鮮に帰らなさいと。でも、そのときには誰も北朝鮮には、行きたがる人はいなかったですね。して、だから、そのときに、北朝鮮に行きたいという気持ちはなかったんですね、北朝鮮に対する情報貼りましたね、親戚がいるということで、行った人が、ひどい生活をしていると、そして、58・59年、57・58年かな、北朝鮮から来て、宣伝があったんですね。北朝鮮の国籍をとりなさいと。そのときに朝鮮学校があって、私が大学に行ったあとなんですけど、なんていうのかな、朝鮮の中学校ができたんですね、そしたらね、朝鮮学校7年まで終わった人は行くところがないから、10年生まで行くんですよ、10年生まで終わったら、ロシア学校しかないでしょ、言葉の問題があって、試験を受けることができないんですよ。試験を受けても落ちるんですね。それを利用して、北朝鮮は、出なさいと、私たちはみなさんに大学に行ける条件を出しますと。そして、行きましたけど、だいぶ入った人もいますよ。多くの方が戻ってきました。逃げたり、つかまったり、いろんな事故があったんですよ。たくさんの方が行方不明になったんですよ。親たちがこっちにいながらもね。どこに行ったのかわからなくなった人がたくさんいます。

そのときは、北朝鮮に対しては情報はあったんですけど、南朝鮮に対しては、情報が全然なかったんです。宣伝では、南朝鮮は、戦争で何も無い国で北朝鮮より苦勞していますよと。そういう情報しかなかったんですね。それで、私も研究所で仕事をしましたからね、経済に関する本とかも出てくるんですね。見ると、南朝鮮が経済ができています。それを見ると、どれくらい発展しているのかはわからなかったですね。よくなっていることはわかりましたけど、どういう風に発展しているかはわかりませんでした。75年度に一度、観光で日本に来て、はじめて、して、そのときに日本を見たんですね。そのときは本当に驚きましたね。ロシア人はもう、本当にびっくりしました。ロシアと比べものになりませんでした。国が変わってました。物ももう、ロシアはもう、物を買うこともできなかったのに、販売というより、配給の制度だったんですけど、それで日本に来るとみんな違うんですね。して、75年度には、韓国はそれほど発展していなかったと思いますけど、韓国という国は、お金があって、88年度、88オリンピックがあったでしょ。そのときに、ロシアから代表団が来ていたでしょ。その中でサハリンから来た人はみんなびっくりしていましたね。韓国とはこういう国だと。85年のペレストロイカが始まってから、私たちも社会団体たちも動き始めて、運動が始まったんですよ。そのときにあの、日本の奥さんをもらった、パクノハク(朴魯学)という人、がいたんですよ。彼が、樺太裁判、サハリン裁判というのを、起こして、裁判に勝つことはできなかったけど、弁護士の高木さんが、彼と一緒に日本でサハリンに対して、日本では関心を持ち始めた感じを持っていた気がします。

永住帰国の問題は本当に話すとも長くなるんですけど、永住帰国の実現できるまでの過程というのは本当に難しい過程で、ここでは話すことはできないんですけど。日本の政府でも力を入れてくれています。日本の政府だけですよ、お金出してくれたのは。50億、50億円で27億円がアパート造るのに、日本で出してから、私たちはいま住んでいますけど。いまもう、日本側でも、赤十字の方から。

私らの考えでも、日本も大きな責任を持っていると思いますね。私は樺太で、戦後どうして日本人だけ帰って、私たちだけ残ったのか。小さかったからわかりませんが。国のない人になりました。誰も私たちを探してくれる国がなかった。日本でも、ロシアでも大した関心を持たなかった。あなたたち韓国へ帰らなさい、とはならなかった。そのときもう、して、韓国の政府もどうしたわけか私たちのことを忘れていましたね。それがわからない。韓国の政府に、どうして、韓国の政府が私たちを忘れていたのか、裏切り、不満ですね。日本

は、本当に私の考えもそうですが、一番責任をもたなければならなかった国ですけど、ロシアの国も私は全然、私個人はもう不満を持っています。あんたたち帰らかったら、帰りなさいという話もなく、北朝鮮ができた後は、全然そういう話も出すことはできなかったです。韓国に帰してくださいというデモがあったんですね¹¹。すぐそれが、KGB につかまって、韓国じゃなくて、北朝鮮へ、国に帰りたければ北朝鮮に帰りなさいと、それで北朝鮮へ行って、行方不明になっていますね。そういうこともあったんです。一言も口にだすこともできなかったんです。ロシアの方も責任を持っていると思いますよ。歴史から見ると、国と国、三つの国が大きな責任を持っていますね。日本が一番責任をもたなきゃいけない国じゃないかと思っていますけど、やっぱり。ロシアも責任持っています。韓国もどうして忘れていたか。ここに住んでいるみんなも不満を持っています。どうして、探してくれなかったのかと。そのときは、もうわかりませんが、難しいことがたくさんあって。サハリンにこの、朝鮮人が残っていたのは韓国の政府もわかっていたんですが、わかっていなかったのか、わかりませんね。それ私はわかりません。

—確認したいことがあるんですけど、泊岸に行ったのは何年ですか？

45年から51年まで内路。51年の9月に、大水があって、その年に泊岸にきました。56年に泊岸を発ってから大学で、62年からユジノですね。そのあと、親も泊岸から出てきましたし。

—泊岸の海沿いですか？

入ったとこです。

—楠山ですか？

泊岸炭鉱がありまして、泊岸炭鉱に入ったとこでした。

—ほかにも住んでいる人はいましたか？

いました。泊岸炭鉱というのは、線路があるでしょ。線路をずっと本線まで出していて、それを日本人が使うことができないで、そのまま戦争が終わったという話です。

私は62年に大学を卒業して、64年に結婚して、結婚はモスクワの師範大学で勉強していた。子供は二人です。うちの奥さんは、モスクワの師範大学を終わって、教員として、少し学校として働いているときに、私が研究者としてひっぱったんですね。研究者としてまた働いて、最後には永住帰国する何年前には、コンピューターの会社に入って、ここに来てからは、私を手伝っていますね。息子はサハリンにいます。娘は、アメリカですね。娘は、子供はここで一緒に暮らしていますよ。娘は離婚しているんですよ。韓国人と結婚したんですけど、いろいろ合わなくて。息子には子供はいないんですよ。

—泊岸炭鉱は、当時は営業していたのですか？

炭鉱は動いていました。いまでも動いています。お父さんはそこで働いていました。泊岸炭鉱は、石炭を積んで車が動いていました。車がですね、その泊岸炭鉱と、泊岸の間に車の水いれるところがあって、そこでうちの父さんは働いたんです。何十年間か。まあ、51年から70年まで、20年くらい。月給がすくなくたってですね。朝鮮人とロシア人の差別があって。ロシア人は同じ仕事をしているのに、朝鮮人よりも二倍・三倍ももらっていたんです。ソ連国籍を取ってからですよ。彼らと月給が同じになって。それがですね、64年くらいで、フルシチョフがその制度をなくしましたね。同じになった。朝鮮人も同じ給料になった。

私たちはね、いろんな差別を受けましたけど、本当にまあ、それがもう、無国籍の人だとまず自由に歩くこと

¹¹ 都万相事件と思われる。

ができなかったですね。それがわかっているんですよ。今でもそうですけど。

—今でも、無国籍の方はいるのですか？

います。あの、したらうちの父さんなんか言ってました。戦後にね、ロシア人たちが日本から私たちを解放しましたよ。解放したって意味がわからないって、お父さんはわからないって言いました。何から誰を解放したのかって、日本時代はそれでも、朝鮮人は自由に歩いたんですよ。どこでも行きたいところに。ところが、ロシア人が来てからね、何もみんなどこに行くにでも、自由に歩けなかった。自由を失った人たちがね、誰が誰から、誰に解放したのかって。わかりません、て。

歳をとった人たちには本当に大きい不満があったんですね。それで、本当に多くの人たちがどうかして韓国へ、母国へ帰るって、そう思っていたんですけど。結局、それが全然できなくて、うちのお父さんももう亡くなりましたけど。うちのお父さんは、ロシアの国籍とったのは目的があって取得したんです。子供を勉強させなきゃだめだって、それで国籍を取りました。私国籍を出すときは、私一人しか出さなかったんです。したら、そのあと、弟、妹たちも勉強するためには国籍を出さなきゃいけないって、出したんですけど、うちのお父さんとお母さんは死ぬまで無国籍でした。

—北朝鮮に留学した人たちがいまどうなっているかは、もうわからないのですか？

わかりませんね。

No.12 金相吉 1936年3月25日、大泊生

(聞き手:三木理史・中山大将)

お父さんは1910年生まれ、慶尚北道。みんなあそこは農村だったから。お母さんは15年生まれ、同じ慶北。そのとき朝鮮でしょ、若い時何していたかは見ることでできなかったし、そうでしょ、サハリンでは、今で言う風呂敷商売、行李に背負って、他の歳に出張行って、うちでは、鶏を飼っていて、卵を組合に納めていました。母さんの仕事、母さんと姉さんの仕事。僕は小さかったから、後ろをついて歩いて。

—ご兄弟は何人いらっしゃるのですか？

全部で、だから7人だったんでしょ。姉さん一人亡くなったし。長男ですよ、上は姉さん。姉さんは、一人だけ、33年生まれ。亡くなった姉さん。何年かな、90年度に。弟が三人、妹が二人。

—大泊のどこにお住まいでしたか？

大泊住んでいた時に？本町西一条、何番だったかな。

—学校はいつまで通っていたのですか？

47年度までだから、4年(生)終わったんかな。

—戦争が終わったということは、どうやって知りましたか？

9歳だね。まあ、あるのは、わかってるのはわかってるしね。まあ、ロシア人の兵隊たちが入って来て、それは残ってます。放送は、あのときはラジオなんてないんです。誰からというのでもなく、具体的には、ああ、学校の先生、僕らの担任の先生、男の先生だったんだと、その男の先生が言ったことを記憶しています。僕は、君たちに一つも嘘を言ったことはない、ただひとつ、嘘ついたのは、戦争に勝つと言ったのに、負けたことだ、って。そんなこと言ってたよ。

—その西一条というところは朝鮮人が多かったのですか？

いえいえ別に朝鮮人が多いわけでは無かったよ。僕の学校で、僕の知っているところでは、朝鮮人は僕ひとりだったよ。まあ、大泊は大きいから、学校は何箇所かあったはずですよ、他のところで、朝鮮人がいたかないかは。だけど、あの時代は自分が朝鮮人なんだとか、表さないんですよ。日本でもそうでしょ？日本人みたいな恰好をして、知らんふりして。

—学校ではどう呼ばれていたのですか？

成金相吉(なりきん・そうきち)。そのとき日本政府のそういう政治で以て、韓国の朝鮮人はみんな日本の名前に改正したんでしょ。だから、父親は、成金キヨウラ。その前は、金成、これね、朝鮮の名前。

—家の中でみなさんどんな言葉をしゃべっていたのですか？

日本ですよ、全部日本語です。僕は小さいから、朝鮮語なんてわからなかった。ただ、ふたつみつつ、「やかん」を朝鮮語で、주전자って言った、それと、なんだかふたつみつつ

しかわからなかった。

—ご両親は、どんな言葉をしゃべれたのですか？

母さんは、その方面では、日本語は下手だったんですよ。家にしかないなから。もちろん、朝鮮で、なんか学校あるいて、習ったと思うけど。父さんは、学識があったんだね、どこで朝鮮で何を習ったかはわからないけど、日本語は達者でしたよ、何も問題なかった。書くのも、そうです。母さんは書けなかったでしょ。

—ご両親の間ではどの言葉を使っていたのですか？

そうですね、そんなときね、どうだったかな。朝鮮語はつかわなかったでしょ。朝鮮語や朝鮮人ってのがあってことはわかってたんだよ。日本時代にそういうときに、国語実習とかいう厚い本があったんです。それを朝鮮人たちに日本語を習うように、そういうこんな厚いのがうちにひとつあったんです。それで好奇心で見たんです。習う必要もなかったし。そういうのがあったから。どっかで、本が出て来方のか、わからないけど。父さんは日本語達者だったですよ。

—日本時代は、自分が朝鮮人だという意識はありましたか？

小さい時から。学校あるいていたときから。周りの人もわかっていただろうし。友達同士で、朝鮮人とかどうとか、どうだったのかな。隣が二階建てのうちで、半分、うちで半分为警察だったんですよ。その息子が、僕と同じくらいで、タケダススムって。予科練行くって、45年かな。その兄さんが。子供たちはみんな一緒に、学校のそばに山があって、そこに行って、相撲を覚えてくれたりね。まあ、普通だったですね。特別にお前は朝鮮人だって、差別は。子供たちはわかんなかったかもしれない。僕が朝鮮人だってことを。親たちはもちろん知っているでしょ。話してみたら違うでしょ。発音とか。母さんなんか話したらすぐわかるでしょ。

—お母さんはどんな服を普段は来ていましたか？

着物を来てましたね、ふだんは着なかったでしょ、祭りとか。普段は着物なんて着なかったよ。日本人もそうだったよ。普段から着物を来ている女の人もいたようだったね。そんな人は、なんだ、職業はなんだかわかんないけど、三味線だ琴だって。それが、ちょっと記憶してます。芸者だかなんだか。

—外国人を見掛けることはありましたか？

他にはいなかったですよ。先住民なんか全然見えなかったし。たまあに、白系ロシア人ってのがいて、見たけど。南樺太が、日本に入った時に残っていた人。何人もいなかったよ。一ヶ所いたけど。「ハッケロ」だって。したから、このソビエト政権は、赤でしょ。その前のが、「白系」っていったんです。それが主権を争ったから。白いって。

—終戦の時は周りはどんな様子でしたか？

戦争終わったってね、みんな日本に疎開するって、うちでも荷造りしてから、騒いでたんだ。そういう考えがあったか、当局のするようにしかできないから、荷造りはしてたんだよ。一緒に手伝って。そのときは、もう北から西から朝鮮人がぎって、下りて来たんです。

疎開するって。疎開するって、たくさんの朝鮮人が。ああ、そのときにこんなに朝鮮人がいるのかって。みんな解放されたって、疎開するって、それが当然だって。きみたち朝鮮人、疎開させるから下りて来いって、そういうことはなかったです。どうしてかって、日本政府はそういうことを考えていないし、これは自分勝手に、大泊に来たんです。船に乗るから。

—終戦になったから、朝鮮人は帰れると考えたのでしょうか？

政治のことはよくわからないし。子供だったから。歳とった人の話だと、当然の話だったみたい、日本が戦争に負けたから、朝鮮は解放されたって。認識してた。日本が負けたら自動的に我々は解放されたって。日本負けたって、戦争負けたって、日本人は涙を流しているけど、朝鮮人たちは、酒飲んで酔っ払って、喜んで歌うたって、そんな真似をしたんだね。見たんでなく、聞いた話。見ることはなかった。朝鮮人いなかったから。でもずっと北の方には、朝鮮人がいたんでしょ。解放されたって、喜んでそういう人は酒飲んで。日本人は涙を流して、世間がそうなっているときに、朝鮮人は喜んでん。したから、悲劇がいまでも、日本人が朝鮮人をつかんで、集めて射殺したとか、集団的に殺したとか。そういうのが関係あるでしょ。

—そのときに朝鮮人は、韓国へ帰るといふつもりだったのでしょうか、それともとりあえず日本へ帰ろうとしたのでしょうか？

朝鮮に帰る、というより、日本に帰るって。日本人だから。そうだな、みんな朝鮮に帰って、集まって来たような。うーん、迷ってしまったな。韓国に帰国するって集まって来たのか、それとも日本に帰るって言ったのかな。

—日本時代に別の地域へ行ったことはありますか？

5・6歳のときに一回韓国に。

—韓国へ帰るといふことについて、どう思いましたか？

子供としては、いやだとか考えるあれもなんにもないし。親父が言うから。帰ったらいいのか、悪いのか。それはあとで、大きくなってから、国籍をもらうもらわない、韓国に帰る帰らない、でいろいろ考えがあるけどさ、そのときは45年46年は小さいから、政治のことは何にもわからない。

—大泊に集まった人たちは、親戚を頼ってきたのでしょうか？

親戚ってのはいない。まあ、日本人の空き家が残ってたんですね、みんなそこに入って。解放した後で、みんな帰国したいって、下りてきたんでしょ。(船に乗れなくて)戻っていった人もいるし、残った人もいるし。だから、大泊は、そのあと、朝鮮人が。それまでは全然見えなかった。そのときから、45年から始まって、町でもみんなこう、朝鮮人が集まった朝鮮語だし、強制労働で引っ張られた人、はみんな学識のない人で、日本語を話す人もいるけど、朝鮮語が聞こえましたよ、みんな朝鮮語で。

—戦後は学校はどうなっていましたか？

朝鮮学校が46年かね、46年に開けたと思います。日本の学校は46年まであったんです。

まだ全部、疎開してなかったんですね。ソ連軍が来るまでに疎開した人はそんなに多くなかったんですね。金のある人とか。そんな人たちとか。主な疎開は、ソ連軍が入って来たあとで、始まったと思うんですね。ソ連政権になったでしょ、そのときに日本人が大量に引き揚げる。朝鮮学校開けたっていうのに、そのまま何ヶ月かは日本学校を歩いているんです。

—大泊に人が大挙して混乱は起きませんでしたか？

別にそんなことはなかった。来る人は、船は一日に一回か、一週間に一回か、そんなことわからないでしょ。とにかく帰るって、帰国するって来たんでしょ。帰国もさせてくれない、疎開もしない、日本人疎開するときに、自分たちだけ行ってしまって。他のところで何が起きていたのかわからないけど。日本人が集めて殺すとか、喧嘩するとか。聞くことしかないけど。大泊ではそんなことなかったですよ。朝鮮人いなかったから。

—朝鮮学校へは入りましたか？

入るのは、4年生、もうそのとき朝鮮学校の子供たちは、正しく勉強して来た人間でないんですね、僕は日本学校をはじめから入っていたけど、勉強もよくしたし。朝鮮学校に入った時は、日本語で言ったんですよ。いま、日本学校あるいてきて、今度は朝鮮学校あるきたいって。日本で言ったんですよ。したから、4年かそこらで、何カ月やってみたけど、他の生徒は全然なんにもかわらないんですね。それで、すぐに5年生にあげてくれたんですよ。7年で終わったんですよ。

—当時、学校では生徒はハングルを使えたのですか？

ハングルしゃべれる子はいましたよ。上手っていわないけど、自由にしゃべれる。日本語しかしゃべれない子の方が多かったです。

—朝鮮学校の先生どのような人たちだったのですか？

朝鮮学校の先生は、同じくサハリンで解放された人たち、日本時代に来ていた人たち、その人たちも、まあ、ちょっと小学校終わった人とかね、漢字なんかも知っていた人、そういう人が学校の先生になって。2年3年たって、今度はロシアの、ソ連の大陸から朝鮮人、大陸朝鮮人。先生たちが入って来た。なぜかという、ソ連の政治政策で、我ら樺太、サハリンにいる朝鮮人を教育するって、政治的、学問的に教育するって、そういう目的で、スターリン時代にスパイって言われた人が、そこで教員大学とか言うんだけど、短期大学、二年だけの、そういう人たちが来たんですよ。あの人たちはロシア語をしゃべるんです。まあ、発音もいい、そういう人もいたし、今思うと、発音もやっとな、外国語だから、人によって、外国語を発音をよく話せる人もいるし、学識はあるけど、発音は駄目なひとも、いろいろいたし。そういう人たちが来たから、だんだん、前に教師をしていた人は下がっていくでしょ。なぜかしたら、思想的に違う。ソ連時代はそうでしょ。第一に思想だからね。共産主義思想、それがあつたもんだけ、教育を受けた人だけ。だから、前にいた人はだんだん退ける。だから、僕ら7年終わる時は、校長も、あそこ、大陸から来た人で、いばって、僕たち来る時は、スターリンと直接、握手して来たっていばってた。学校は学校で、

そういう分野だし、経済的には工場とか職場では、政治部長って、おもにみんな朝鮮人ね、日本語もわからない、ロシア語もわからない、みんな無知識の人たちがたくさんだったから。だから、そこで何をしたかという、政治部長ってのをやって、工場とかね、そういうのに、大陸から来た朝鮮人が入っていばってから。

—彼らが大陸から来たというのは、知っていましたか？

ああ、私は知っていた。別に知らせなくてもわかってたんですよ。隠すこともなかった。むしろ、宣伝してたんだから。スターリンと握手したとかなんだとか。

—戦後にお父さんはどのような仕事をなさったのですか？

行商は、戦争終わって終わりで、戦後はね、精米所で、日本人が置いて行ったんだか、わかんないけど、そこで仕事をして。麦粉も作ってたんだよ。だけどね、それは、自分の工場でなかったんですよ。日本人が売ったとか、個人所有でなくて、食料組合っていうソ連のがあったんです。そこに登録されて、国家のもので、そこで仕事していたんです。仕事もわかっているし、日本語もわかるし、学識もあるからと、一番指導者として、でも、工場主みたいに何もしていないわけじゃなくて、そういう意味でなくて、一緒に仕事したんですよ。他の朝鮮人たちと一緒に、何人くらいいたかな、10人くらい。一緒に仕事してたんですよ。工場がなくなって、解放直後はね、船でもって米の籾を持ってこないとだめでしょ。あとでどうなったかというものが来なくなったんですね。そのあと、父さんは、組合の他のとこに移って、うどんを作る工場、大きい、日本時代の機械で、しました。そのあと、いろんなことをしたんですよ。写真館とか。49年、50年くらいかな。なんだかよく、いいことなかったんだね。そして、何年間、労働者として、普通の労働者として、他の朝鮮人と一緒に、市水道部で仕事をして、そのあとはやめて、家で、畑の仕事を。個人の家を買って、個人の家を買う目的はみんなそのときは、個人の家を買えば一緒にね、畑がついてくる、ダーチャとは別で、これは市内にある。居住、住むところですね、個人の家を買って、植えるんだね。ねぎ、トマト、かぶとか、そんなもん、そいでもって生計をたてて。町の中で。町の中に個人の家がたくさんあったんですよ。ダーチャってのは、郊外で、なんか植えるとか。それでなく、前は、今でも町のはずれにちょっとありますよ。それが今では古くなったから、改装して、二階建てとか。でも、始まりは小さい家。丸太絵で作ったとか。日本時代はそんななかった。ロシア人が住んでたんですね。

—お母さんは戦後は何をなさっていたのですか？

働くところがなかった。話もできないし、もう働くところもなかったし。主にだから畑の作物をバザールで売るんです。朝鮮人はそれでもって売ってたんです。戦後は。仕事もない、ロシア語もわからない、だから、男たちは労働者としてね。スコップ持って、つるはし持って、それが主な仕事だったし、他にする仕事もなかったし、話もできなかったし、女たちも。仕事しながら男たちは畑でも働いて。女たちは家に残ってその分、仕事をして、今度は一生懸命持って行って売るって言う。朝鮮人、みんなそういう個人の家ですんでいきましたよ。大泊だけでなく。畑がないと食っていけない。個人の家を買うんです。畑が

ついているから、みんなそうしてました。その時の住む方式はみんなそうでした。他の方式で住んでいる人は少なかった。

—お父さんは、ソ連になって、行商を続けることができなかつたのですね？

政治が違ふから。個人の自由な商業は、ソ連にはない。なぜそれをしなかつたかという、いろいろな原因があつたのかもしれないし、複雑になつたでしょ。日本時代は、戦争前は静かだつたでしょ。背負つて、農家に行つて売つて、なんも別に問題はなかつた、うるさいことはなかつた。終戦後は社会がうるさくてね。誰が、商品をくれるんですか。それもいない。親父は昔どっから、商品を、卸売りで、それとも大きい百貨店のようなところから下ろしたのか、それはわからない。ただね、家で、行李、竹でもって編んであつて、いまでもあるでしょ、それに風呂敷、裏は赤いし、表は黒い、出て行くのを覚えています。

—その畑のついた家というのは、どういうものなのでしょう？

ソ連の時もね、個人は駄目だつて、社会主義だから、国家のもんだし、そうだけど、個人営業つて言うのもまだ少し許可してたんですよ。写真館も個人営業だつたし、床屋、食堂、最初はあつたんです。あとで、なくされたけど。なぜかつていうと、金が入つてこないでしょ、国家が食べていかなきゃいけないから。個人営業つてのも最初はあつたんです。家もね、これも個人で。変に考えるかもわからないけど、みんなソ連時代は、個人不動産はあつてはならない政治だつたけど、個人の家つて言うのはあつたんです。家には、畑も入れて、600平方メートル。それをしたから、家は自分のものだ、土地は、国家が一時、貸してやると、そういふもんだ。今は違ふ、今は何も売買する。買いたいつて言えば、いくらでつて話して、買う。登録する、売買契約して。

—もともと畑として使われていたのですね？

もともと畑だつたんですよ。で、ロシア人たちはね、個人の家を持っていても畑をしなかつたんだよな。まあ、それでなくても、ロシア人は仕事しない、植えるつてことがわからなかつたんだよね、いもしか、じゃがいもしかしないんだよ、いも植えたら簡単でしょ。なんも手かけなくていいし。朝鮮人たちは家を買つたら、いもを植えるために個人の家を買つたんでないからね、市場に持つていく、目的でもつて、畑をよく作らなきゃだめですよ。

—朝鮮学校卒業後はどうなつたのですか？

朝鮮学校7年しかなつた、7年で終わつて、してからロシア夜学校に入つたんです。夜学入つて、10年終わつたんですよ。56年に。まあ、通信大学とかやつたんです、すぐにね、通信大学やつたときに、国籍がね、そんとき無国籍になつてたんだ。「元・日本公民だつた」つて。それでロシアの規則で、自由にね、動けなかつたんですよ。大陸はもちろん行けなかつたし、サハリンの中でもね、大泊から豊原まで行くのも不法だつた。つかまつたら、捕まつたで、罰せられたり。56年に通信学校へ入つて、試験受けに受けに行かないとだめなのに、許可証をくれない、仕方ないんだけど。したから、58年度に豊原の国立教育大学へ行つたんですよ、それで63年まで。その教育大学が広がつて、いまは総合大学になつて。

でも、はじめは教育大学。物理数学科です。忙しかったからね、長男だし、家が大変だったから、三年大学やってから、通信に切り替えて、移ってからね63年に終わったんです。寄宿舍に住んでたんです、寄宿舍に住みながら、ボイラーの仕事もして。あるときは大学に勉強にもいかないでね。一晚中、ボイラーしたらね、眠たいんです。そしたら呼ばれてね、そんなんしたら退学させるって。通信しながらね、学校で仕事をしていたんです。夜学で。そのときは朝鮮学校、そこで先生をしていたんです、教師として働いていたんです。

—大学を卒業後はどうなされたのですか？
学校で仕事したのが、3年くらいで、そのとき政治的にどんなことがあったのかというと、国籍を、外国人のなんていうか、教育とか思想の方面から追いついてときがあったんです。同じ朝鮮人でも、国籍でね、僕はその時、大学に入る時はね、無国籍だったけど、学校で教えるときはね、無国籍では仕事できないんですよ。人間が空中に飛んでいるような、無国籍ですね、ソ連の国籍を持つか、北朝鮮の国籍を持つか、どっちかを持たないといけないんです。無国籍、これは宙を飛んで歩いているんならって、批判されて。それで、そのときは北朝鮮の国籍をとったんです。あれは、63年か、64年かね。学校に先生とするためには、ソ連の国籍は、北朝鮮の国籍が必要だったんだよ。して、北朝鮮の国籍をとったんです。そのあと、北朝鮮の国籍も、同じ社会主義国家だけれども、外国人だと。そういうことになって、学校からも、出て行くようになったんです。

そのときから、ビール工場で、普通の修理工として、運搬工としても仕事したしね、68年にねユジノでね、移って来たんです。62年に結婚して。僕ら夫婦同士で、親同士が約束していたんです。設計部、工場の設計部の上級技師として、予算技師。そこで7年くらいやってから、そのあと、レンガ工場でまた今度は一般労働者として、レンガ作るところでね。金が少ないから、レンガ工場の方がいい。上級技師とか、ああいうのは月給でしょ、月給だから、いまとは全然違うでしょ。レンガ工場は、月給でないから、仕事したいだけすればいい。仕事たくさんしたら、今度は、レンガ工場の人たちが僕のところ来て、怒ってるんですよ。一人で金を儲けないで、みんなで分けて仕事しなさいって。プランってあるでしょ、一年にいくら、一ヶ月になんぼって、レンガなんぼ出さなきゃだめだって。それが忙しくなるでしょ、そしたら、僕呼んでね、朝昼なしに仕事するんだよ、おお、やれやれって。後で今度、そんなに必要ない時がある。プランがね、そんなにしなくていいときがある。そういうときになって、仕事していると、一人で金を儲けているわるいやつだって。だから、自分だけ忙しい時は英雄だって言って、名誉掲示、豊原の道の掲示板上に写真をあげてもらったり。自分たち忙しくなくなったら、今度はなに一人で金儲けている悪い個人主義者だって。英雄だったり、個人主義者だったり。そんなもんだと。

—大学に入るときに国籍は必要なかったのですか？

無国籍でも入れたんです。

—レンガ工場ですっと働いたのですか？

レンガ工場は長くやってたね。年金をもらうまでだから、75年から、10年以上でしょ。僕

は年金を55でもらって、92年かそれくらいまで。ペレストロイカになってから、みんなわやになったんです。ロシア経済がね。そのとき僕がね、レンガ工場の敷地で、花鉢を作ってたんだ、それを2・3年やったんですよ。そして、年金者になって、サハリンは一般それ地域と違って、5年早くみんな年金者になったんですよ。大陸より5年早く。年金貰うようになって、仕事辞めて、今度は畑に、花作って、花植えて。ユジノで。個人の家を買ったんです。そこでいろんなもんを植えたんです。ペレストロイカになってから、年金者になってから、花を作ったんです。ダーチャとは違う。

—永住帰国はいつですか？

2000年。それまでは花を作っていました。2000年の4月。すぐには2月に来れなかったんですね、うるさくて。観光団でも来ましたよ。母国訪問って。一ヶ月の期間で以て。91年に来て、遊びに来たようなもんです。一ヶ月こっちで遊んで、親戚のところでね。僕の方から親戚、親父の方の、それから妻の方の親戚。そのあと、また僕もうちのものもね、何回も仕事しに来たんです。いまは通訳。いまは、若い人たち仕事しに来るんだよね。

—ソ連国籍を取得した理由はなんですか？

北朝鮮籍も、外国人だっていって、いろんな方面で不便だったんで、ソ連国籍に移ったんですよ。それが、70年代、72・3年か。手続きするそれをわかってたんです。北朝鮮におくれって、パスポートを返したという証明書を、ソ連の当局に、出入国管理署に渡して、警察でやってたんです、パスポート管理を。何カ月か何年済んだら出してやるって。うちの人（奥さん）ははじめからソ連国籍。ずっと家の人は、家淵とかああいうとこにいたから、すぐにみんなソ連国籍を出したらしいです。うちはね親父が出さなかったのはね、国籍を出したら、その国の人になる、そしたら、もう朝鮮に帰れないって、そういう理屈で以てね、誰よりも遅くまで無国籍でいたんです。KGBから何から呼ばれてね、いろいろやられたんですよ。みんな出してるのに、って。反社会分子って。歳とった親たちは、故郷としてなじみがあるわけだから、帰りがたかったですよ。僕たちは違う、韓国に何があるか、韓国に買えるために国籍を出さないとかあったときにいつでも親父と喧嘩でしたよ、僕はここで勉強したい、勉強するにはソ連国籍を出さなきゃだめだって、大陸に行かれないって、サハリンにだって教育大学があるじゃないかって、あんなどこは頭のないやつらばかり集まるところだって、親父は自分の観念で国籍を出したら、この国の人になるって、朝鮮に帰れないって、そういう風に強情ばって、強情ばって、後で出したんですよ、なぜかたいたら、僕の下の子たち、妹たちが勉強しなきゃだめでしょ。で、親父は親父で何も希望がなくなった。韓国が僕らのことを考えているようなそんなあれもなかったし。だから、あきらめたらしい、親父も、したから出したらしい。僕の弟たちと一緒に。それが、70年かな。それくらいなっていたでしょ。父さんは75年に亡くなった。母さんは2001年。みんなサハリンでなくなった。お母さんはサハリンに残ったんだ。

—永住帰国をどうして決心したのですか？

やっぱり韓国が経済的に進んでいる、ここで住むのが、経済的な問題ですね。向こうでは

年金だけで暮らしていけないから。ここなら基礎生活費は韓国人と同じくらいもらえるし、家ももらえるし。あっさり言うと、そうです。

故郷故郷っていうけど、若い奴らは済むためですよ、ここが悪かったら来ないですよ、帰国した人の中にも、故郷が北鮮の人はたくさんいますよ。その人らはなんで、故郷に行かなかったんですか？あそこは済むのに悪いからですよ、でも、ここには来ている。だから、正直にって、ここに住むのが楽だから、そうですよ、実際そうになっているし、私は年金もらいながら、子供たちの負担になるでしょ。ああだこうだ言ってね、済みやすさのためだけになんで行くのかなってね、そんなこと言ってたやつらもみんな来てますよ。なんていうのか、魚は水の深いところを探していく、人間は楽で便利なところを探す。来てから、外国ってそんな、ロシアで済むよか、精神的には楽ですよ。ロシアに何十年も暮らしたけど、他の人はわからないけど、慣れている人もたくさんいるけど、僕はもともとね、人とそんなにコンタクトできないんですよ、嫌がるんですよ、人との付き合いが、ロシア人とは学校でも職場でも付き合うけど、こう、お互いにね、うまく、通じ合えないですね。ここは同じ韓国人だから楽ですよ。別に悪いって言ってわけじゃなくて、向こうにいるときからいやだったけどね。自分の好きなようになっていく世間でないからね、いやでも済んでる。経済的な理由が大きい。

No.13 平山清子 신(申) 보배 1939年2月19日 西柵丹生

(聞き手:三木理史・中山大将)

ここの名前ですか？日本では平山清子っていうんですよ。昭和14年2月19日。今ここに
お兄さんも来ているんだけど、私より2・3うえで。お兄さんが来てんだけど、2・3日前に函
館に行きました。それで頼まれて来たんだけど。

—お兄さんは何ていう方ですか？

ここにいる兄さん？平山カツミっていうし、ここでは、신 용순っていうんです。兄さんは
昭和8年生まれ。二番目の兄さんがいま札幌にいます。平山カツオっていうんです。

—お生まれはどこですか？

恵須取、町中だね。その幼い時代の生まれは、西柵丹です。お父さんは早く亡くなって
しまって、9つのときに亡くなってしまってね。お父さんはね、韓国のねカンウォンドで生
まれたんだけど、樺太に来たでしょ、いろいろ調べて、炭坑って出ました。出ましたけど、
もっと調べる場合には民政署、お父さんが北朝鮮なってるって、戦争のときにカンウォン
ドが半分になってしまって、北に入ってしまったからね、それで探すことができなくなっ
てしまって。

—お母さんはどこでお生まれになったのですか？

お母さんは日本生まれ。母さん、生まれね、美唄だと思います。母さんね、1908年生まれ
なんです。お父さんは1900年。お母さんの兄弟はね、母さんが一番上で、弟たちがいま
した。私、80年度に行った時には、おじさんたちまだね、いました。もう歳が歳で亡くな
りましたけど。(お母さんの家族は)お父さんについて来たんです。日本で結婚したん
です。日本に渡って、日本から樺太に。美唄かどっかで一緒になったと思うんだけどね。

80年だかテレビで、私たちをみんなを案内してくれたときにね、昭和11年で見せてくれた。
お母さんが43年くらいに里帰りするってことで、フジテレビで作った番組で、伯父さん
たちと会うときからね、そこに私たち呼ばれて、森光子さんとか案内してくれて。なかな
か日本には行かれなかったんです。日本から招待状をもらって、すごくフジテレビでよく
してもらったのね。東京のプリンスホテルで七日間だか、そのとき総理大臣のね、そこに
会ったりしました。写真とかもありますよ。官房長官なる人とか。庭なんかも案内して
もらって、本当にありがたい思いして来ました。30年も前だったから。日本に、お母さん
がうちの父さんと二回目の結婚だったからね、はじめの結婚が日本の人として、そっから
生まれた子供がひとりいたわけね、そして、その姉さんを置いて樺太に来たんです。そし
て、ちゃんと43年ぶりにあうということで、よくしてもらいました。

—学校はどこで通ったのですか？

日本の学校には2年間通いました。1年生と2年生。39年だと一年しか行かないのに、早
生まれだから二年行って。戦争始って終わってしまって。日本の字は片仮名くらいしかわ
かんないですよ。その前に習ったらよかったんだけど。言葉は通じるんだけどね。いつで

も家ではお母さんと日本の言葉を使ったからね、したから、会長さんに来て頂戴って言われたんだけど。お母さんは韓国の言葉全然できなかった。わしはしたから、日本の言葉をずーっと続けたからね、したからいま、日本の言葉がこれくらい使えますよ。兄さんたちはね、日本の学校に行ってるからね、長男の兄さんは高等学校1年まで行ってるからね。いま札幌にいる人は、5年か6年まで行って、ロシアの大学を卒業して一生懸命、勉強して、日本のNHKで仕事したの。10年間くらい仕事しました。そして、日本へ帰国しました。いまは年金生活で。

—終戦時のことは覚えていますか？

まだ思いだすもんね。小さかったけど、飛行機かなんか飛んできてね。潜水艦とかね。

—西柵丹には朝鮮人はたくさんいましたか？

たくさんいました。そこにはね、韓国からね募集で来た人がたくさんいました。そこには日本人もたくさんいたけど、疎開してだんだん少なくなって何軒もなくなりました。そして49年に父さんはなくなったんです。病気で。落盤で腰を使えなくなってね。寝ていました。医者もない病院もない、ロシアの人が来た、言葉がわからない。大変なことでしたよ。48年頃までまだ日本の人はたくさんいました。すぐに日本に帰ったでしょ。10軒か20軒くらいしか残ってない。48年、49年に。

引き揚げ船のときね、私らはまだ小さかったけど、兄さんは13・14・15歳くらいで、兄さんの考えは、韓国に帰れる場合は韓国に帰るって、母さんも、もうやっぱりね、カツオが長男だし、自分は歳とって行くから、カツオの言うとおりにするって。そして残りました。札幌にいる二番目の兄さんが、母ちゃん行こうって、引き揚げようって。私がここに2000年に来たでしょ、あの人は2001年に。あの人はロシアの学校10年行って、本国の大学を出たんです。もしもお母さんが帰れば帰れたのに、兄さんが行かないって。

—どうしてお兄さんは帰らないと言ったのでしょうか？

やっぱり父さんが、ここだったから。そうでしょ、男の人たちの気持ちはよくわかんないけど。二人とも美唄生まれで、4つと2つの時に樺太に来たんです。私たちもね、韓国の人と付き合うようになってから、韓国の学校を歩くようになってから、韓国に対しては全然わかりませんでした。歴史とか、何にも。ここにきて、10年が近くなってきて、テレビなんか見て、こうだったんだって。朝鮮学校7年おりました。46年に。53年か54年に終わりました。やっぱり朝鮮の人が残ったし、日本学校はすぐになくなって、田舎には少し残りましたが。朝鮮学校になったときに、本国のウズベキスタンちゅうところからね、来たでしょ、先生とかしたでしょ。

—戦後は言葉で苦勞しましたか？

ありましたよ、やっぱりね。したからね、やっぱり日本人だからね、言って聞かせたもんね、なんていったらいいか、いつでも自分がしっかりしてなきゃだめだよって。

—文字は身につけましたか？

日本の字がちょっとくらいしか書けないです。韓国とロシアの字。朝鮮学校終わった頃に

は、朝鮮の人と話すのも、発音ね、できるようになって。ロシア学校行って、何年か行って。それしかなかったからね、書いてもロシア語で。うちでも夫も日本の学校を出た人だから、ふたりでいても、日本語を使いますよ。下手な日本語を。

ロシア学校はそんなとき10年までなかったの。朝鮮学校7年終わって、2年くらい夜学でロシアの勉強を習ったんですよ。してそのあとに、30年、裁縫かい、裁断士に、30年勤めましたよ。恵須取で30年つとめて、年金出てね、すこし韓国の道が開いて、韓国に来るなんて夢にも思わなかったんだけどね、まあ、どのようになったんか、一度行って合わなかったら、帰って来るって気持ちで来ました。来てみたら、いろいろな人が、ありがたいと思います。

—ソ連国籍は取得しましたか？

国籍ね、戦争すぐ終わったときね、朝鮮、韓国の国籍の人もたくさんいたし、そんなときはもう、北朝鮮に帰るって話もたくさんあったんですよ、したけど、兄さんたちがロシアの国籍をとったんです。50年頃に、兄さんロシアの国籍をとりました、家族全体ね。大学に入るのに。韓国の人たちが、本国の大学に行くなんてないときですよ。56年の4月1日にカズオさんがたって、7月16日にカツミさんが。ケーメルってところ。シベリアだね。大学でなくて、技術学校だね、あの人頭良くてね、最優等で受けました。してね、学校の先生してくれて頼まれたけど。西サクタンと一緒にいたけど、大陸に出ました。今はハバロフスクにいます。カズオはトムスクの大学に行って、あそこはたくさん大学があって、何て言えばいいの、みんな学校ね、大学とか。あの人、工業を終わりました。電気の方ね。そのときみんなが国籍をもらいました。

妹がひとりおります。46年生まれです。46年1月4日です。あの子も韓国に来ました。ここでないけど、少し離れたところに。カツミはケーメルからサハリンに帰って来て、あの人ね、51年か49年かね、博士でしょ、日本人がロシアの捕虜に入って、そしてその人が出て来てね、兵隊さんたちの病院がありました、そこにレントゲンあるでしょ、レントゲンが壊れたから、これを直したら日本に帰してやるって言われて、一生懸命直したの、して日本に帰りました。そのときにね、カツミさんが15かそれくらいで、この人に電気のことを習いました。そして、すごくよく習ってね、あの人ね、電気のすごく明るい人になりました。

カズオさんも帰って来て、ユジノサハリンスク、豊原で、そこで、電気のところに入っていて、仕事していました。技術者。電気もね、なんかね、自動式のだったもんね、そういうことがよくできてから。それから日本に帰国しました。2002年。

—お母さんは戦後はどうなさっていたのですか？

何もしてなかったです。家にして、イモなんか植えたり。畑もなかったけどね、山に行くと、戦争の後に、火事とかで焼けたでしょ、したから山を荒らして、畑を作って、イモなんか植えたり、豚なんかを養ったりしてね。

—西柵丹にはまだ日本人は残っていますか？

おりました。西柵丹に日本の人は今でもおりますよ。

—ソ連軍が来てからも、自由に農業ができたのですか？

その時はね、畑を勝手に起こしてもね、別に何も。ロシアの国は大きな国でしょ。そんなこと頓着しないもんね。韓国来てみたら本当にね、もう区域がみんなあってね、誰のだって、樺太なんてそんなことなかったもんね、山行っても川行っても。山も川も、野菜でもなんでもフレップでもなんでもとれたから、あそこでは誰も。自分の力あったら。畑がもう、土がたくさんあるけど、作ったものは売ることはできないんですよ。韓国みたいでないもんね。韓国来てから、わかったけど。作っても少し売るくらい。したから、樺太なんか、サハリンなんか、畑の土がいい土だもんね、いい土ですよ、トマトでも、多いし、みんな草畑になってるよ、今では。誰もいらないんだもん。したって、なんもないもん。私たちもここに来るときに、ダーチャがあったけど、投げて来たもん。草畑になってる。

暮らしはアパート。日本時代は家で、すばらくはすんでました。このアパートなんて、70年代近くなってから、できたから。そんなときまでは日本の家もたくさんありました。日本の人もちょいちょい来ましたよ、恵須取も大きかったからね。あそこなんか神社もあるし、学校もあるし。恵須取にいるときは、しょっちゅう日本人の人と会って、案内して、そうしました。西管内では恵須取が一番大きかったですよ。恵須取が樺太全体で一番。人口が多かったし、いいとこだったけど、後から段々段々。そういう日本人が建てた家に暮らした人もいたし、ロシアのひとたちが丸太で作った家に住んだ人もいたし。

したから、仕事したらね、家をくれたんですよ。一生懸命したら。お金で買うなんてことなかった。今になって、それはあれして、売ったり買ったりできるようになったけど。90年くらいまでなかったですよ、売ったりとかは、国の家だってから。今は自分のものにして、売ったりするけど。ゴルバチョフがなった後に。

—お母さんはいつごろ亡くなられたのですか？

お母さんはね、82年に亡くなりました。お姉さんに会いに行って、ガンがよくなって。やっぱ日本行って来たところに。日本の話はたくさんしてくれました。日本行った時にいるんなことを聞いたらね、いや、日本は変わったって。

—50年代末の日本への帰国事業のときにお母さんはどんな考えをもっていたのでしょうか？

そうそうありました。それが最後でしたね。そんなときはお母さんは、そんなときはなんも行く行かないはなかった。お母さんはね、白戸ツキ、お父さんはね、朝鮮のしかないんだよね。平山っていうのは、父さんがね、よくわしらわからないんだけど、本籍になるんですか？朝鮮にいるときの、それをまたすると、「申」になるんですよ。あとこの人たちは、「申」って言ったら、なんの「申」ですかって、聞かれるんですよ、したら、もう平山の「申」だって。

—申さんの日本語は北海道の方言に似ていますね。

北海道の言葉って聴きやすくてね、いいもんね。秋田とかは、東北だとかはね、弁が入っ

てね。

— 裁断士の仕事はどんな仕事だったのですか？

工場ではないけど、国家で建てた建物だけど、国家の仕事なんですね。私の前に、縫う人が10人くらい、そういう人をつれて、わしが裁断してやったら、そのひとたちが。ロシアはみんな国家でしょ。まあ、そこで、男の洋服の人もいたし、70人くらい。職場の名前はね、アッテリーてね。こういう名前持ってました。アッテリーてのは、服注文して作ったりするところだね。89年に年金をもらいました。女性は50歳ね、サハリンでは。大陸では、女性は55歳、男性は60歳。もう2・3年したらペレストロイカですね。

そのあとに、畑の仕事をしていました。グーチャを買うんですね、使っていた人たちがいるからね。家も、自分で建てた家を売りました。国家でもらったものは売ったりできなかったけど。お母さんは西柵丹で、私は恵須取だから。恵須取と西柵丹と、あそこは田舎だし、炭坑があるけど、田舎ですよ。距離は、100kmくらい。車で乗って行ったら、4時間くらい。

学校は西柵丹、仕事は恵須取。結婚は、60年度です。あの人は恵須取の「王子会社」の人です。製紙工場はね、王子会社って呼んでたんです。あの人の韓国の名前は、パクナムスン。あの人も、日本生まれです。小田原ったかな。東京の人。あの人も日本学校6年まで行ったから。あの人も昭和8年生まれだから。父さんと一緒に韓国から日本に渡って、何年か暮らして、日本から樺太へ。なんか、この人たちは農業をしていたようです。

旦那さんの家族は妹だけ。妹もソウルへ出てきてまして。小さい家で暮らしています。ここはびっちりだったから。韓国の人たちと一緒にね。家もね小さいですよ。ここはね、おっきいけれど。

— 妹さんの旦那さんもソ連国籍を取得していたのですか？

そうです。59年だかに、ロシアの国籍をとったって。私たちは53年でしょ。

— 北朝鮮からの帰国の呼びかけはありましたか？

そのころ、北朝鮮からは何もなかったですね。北朝鮮にね、渡るようになったのはね、62年頃。みんな韓国のひとたち、国籍ば、ロシアの国籍をもらわないでいたでしょ、したら大陸に行かれない、したけど、みんな勉強したいし、北朝鮮へ渡った人もたくさんいますね、みんな苦労して、亡くなった人もたくさんいますね。宣伝が来たからね、北朝鮮もおなじ、朝鮮の国だって。たくさんおります。行った限りは、みんな違って。亡くなった人もたくさんいました。恵須取の人もいたけど、詳しいことはわかんないですよ。

— 職場はどうでしたか？

ロシア人と一緒。やっぱり、ロシアの国だったから、仕事させたり、お金のこととかみんなロシア人がしてました。人の国に暮らすもんだから、よっぽど自分でしっかりしなきゃだめだって、気持ちったから、怖じ気づきはしないけどね、一生懸命しました、お金ももっともらおうと思ったりね、やっぱり。日本でも韓国でも、食べるものが違うでしょ、あの人たちヨーロッパの人たちだし。食べ物もそうだし、なんか作っても違うんだよ。なん

か違う。ロシアの人たちは、気持の広い人たちです。私たち、韓国とか、日本の人は、ちょっとでもあれば、ね、後にねしょうないって言うか、ロシアの人たちはね口争いとかしてもね、すぐ抜けてしまうの、後がないの。そんなところがあるのね。わしらはなんかあったらもうあれだけど、あの人たちはなんでもないの。仕事好きでないけどね。そういう人たちだ。私たちはね、小さい時から、親のね、あれがあるから、どこいっても何しても、失敗したらだめだって思って、一生懸命やったから、そんなロシアの人には負けなかったね、ロシアの人と働きながら、自動車も持っていたしね、家も買ったり持ったりしてる人も多かったし。ロシア人たちもね、日本が戦争に負けたでしょ、大陸から来たんです。ロシアの人たちはね、なんかこういうね、トランク一つ持っていればいいの。それ持ってきたら、それで寝るし、食べるし、なんかそういう人たちの、馬賊みたいなね。家の中にあるいたら、靴はいて歩くでしょ。わしらそんなこといやでしょ。家の中は。この人たちは靴はいたままなんだ、すぐなれたけど、いやだった。60年もある人たちと暮らしたけど、いまはなれました。ここでも、布団しいて。韓国も日本と同じですよ。ロシアの人はそういうないですよ、寝台で寝るから、床は汚くていいんですよ。なれてしまった。今はロシアの人たちも家行ったら靴脱いで、スリッパとかはいて。私たちは子供ん時から靴をぬいで。

ソ連時代も。別にロシア人とは付き合いもなかったし。職場とか学校とかくらい。別にあの人たちには情は行かないですよ。60年っていったら大きいけど、別に情は。戦争まで何年もなんないでしょ、でもその何年の間に、日本人の人にすごく情がたってね、すごく正しいね、その気持ちが残っているけど、ロシアの人は60年たっても、そういう温かいものはね、ないですよ。で、いまここ来たのに、テレビは日本語もあるし、ロシア語もあります。みんないろいろ言うけど、私はロシアが遠くなっていますね。なんかね、だいぶ遠くに行ってると思う。もう10年だもん、2000年の3月1日に。

—永住帰国はどのように決心したのですか？

宣伝が来たもんね、家が建って、政府からお金も出るし、行くか行かないかって、したけど、そのときのお金は小さかったんですよ。それでも行くんですかって言われたけど、行くって言って。に食わなかったら帰るって、そういう気持ちで。家も売らないで置いて来たから。ああいまも、お金があれば一年に何回も行ったり来たりしているんですよ。ここに来てから、ここを捨てて帰った人は主にいないですよ。今は行かない。サハリンには誰もいないですよ。娘が一人いるんですよ。息子が亡くなって、89年に亡くなりました。娘はモスクワに暮らしていました。モスクワに4回行ってきました。したけど、2000年からここに来たけど、サハリンは一回も行かなかった。誰もいないからね。お墓はあるけど、お墓参りはしないといけないけど、それではなかなか。家は売りました。旦那さんはね、韓国に来る前にね、眼が見えなくなりました。目が見えなくなりましたね、韓国が医学がロシアなんかより、いいかと思って来てから、あちこちしたけどもう遅いって言われました。見えないままです。

一旦那さんとご自身とでは、どちらが永住帰国に積極的でしたか？

ふたりとも帰ろうって、政府からお金をもらって暮らすからね、楽な生活でしょ、別に何も明日のこと、来月のこと考えないでしょ。あれこれ買うものもないし、いい家くれたって。来てみて韓国いくないって思ったら帰ろうと来たけど、そういう気持ちにはなんないですね。毎年、ばあさんたち行ったり来たりしてます。お金集めてね。いまもうたくさん出て来たもん、サハリンの歳とった人たちはいなくなってしまう。わしらが2000年に初めてここに出て来たけど、そのあとにずっとなかったんですよ、そのあと3年くらいして、歳とったひとがどんどんね。出るようになって。みんな出るようになったから、サハリンに年寄りってないんですよ。

一故郷の西柵丹にはまた行きたいと思いませんか？

そうです、死ぬ前に一度は行かないといけないなって思ってるんですけど。

一韓国での暮らしはいかがですか？

なんも、ここはサハリンから来たひとばかりだから、言葉もあうし、生活も合うから、韓国の人のそばに暮らすっていったら辛いと思います。やっぱり、もう何十年も、あの人たちが見るには、見下げてみるでしょ、ロシアの人だからって、と思います。口では言わないけど。したけど、わしらサハリンから来た人が1000人来たから、韓国の人いらないうですよ。

一外の韓国の方とは交流はありますか？

しないしない、必要もないから。することもないし、話言ってみても、気持が違うのね、なんだかわかんない。付き合うこともないし、付き合いたくもないし、ここの人でたくさん。いまここ来ているでしょ、80くらいの人たちはみんな日本語を使っているよ。ここは中学出た人もいるけど。いま来てから、9年になったから、韓国の人とも話の相手になるけど、すぐ来た時は、相手にできなかった。あの人たちも私たちの言う言葉は全然わからなかったし、わしらも彼らの言葉がわからなかったしね。いまはだいぶ。

一旦那さんとは、どの言葉で話していたのですか？

ロシア語でもしゃべってし、韓国語でも。したから、3国の言葉をわかったっていうけど、満足にわかったものはひとつもないですよ。日本語もそうだし、ロシア語もそうだし、韓国語もそうだし。韓国のひとたちもね、日本語を使ったらやな思いの人もあるよ。でも、関係ないから。

一カズオさんはなぜ韓国ではなく日本へ帰国したのですか？

そんとき日本に帰国できたんですよ。2001年。わしが来るときにね、一晚豊原に泊まったから、カズオさんに行こうって、韓国行こうって、いやあ、日本の人たちが、あの人は勉強もした人だからね、いろいろな仕事もたくさんあるから、来なさいって、そして日本の仕事もしてみたいって、そういう気持ちがあったんですよ。65歳になったら日本は仕事できないでしょ。日本国籍もらいましたよ。カズオさんも、今でも樺太に帰りたいて言ったら、帰れるんですよ。日本に引き上げる方法があったんですよ。96年ごろから。日本で

は家族一人、子供の家族を連れて行けたんですよ。韓国はそれがないですよ。韓国は夫婦で来たならそれひとつね、いま運動しているんですけど。国で、家をくれて。国からお金をもらって。

—カズオさんは、お母さんが日本人だからということで、日本に帰国できたのですね。

そう、して、奥さんが、韓国の人だから、日本の国籍をもらえていないと思います。

—清子さんは、お父さんが韓国人だからという理由で、韓国に帰国できたのですか？

そうですね。私も日本に帰れたんですよ。したけどね、日本にもね、同じ村で暮らした人もいるけど、ぼちっと一人になるのがいやですね。ここに来るときは、1000人一緒に来て、恵須取からも20・30人一緒に来ました。したから、何十年暮らして近しいひと、遊ぶときも何からかから、それで来ました。

—韓国に来たのは、みんなが来るならさびしくないだろうと思ったからですか？

そうです、そうやってきました。兄さんが91年に来た時に、キヨちゃん、日本に来なさいって、したけど、わし日本に来ないよって。日本も韓国も行かないで、恵須取で暮らそうと思ったんですよ。そのときは、あの人は、いろいろ樺太に一年に一回行くんでしょ。親戚に会いに、一時帰国で、そのときに案内したり。あの人はいつでも主にそんな仕事しているから。大陸の方にも、抑留されて大陸に残ってロシアの人と結婚して、歳になって、そういう人たちもポチポチとおりますよ。

—カズオさんの奥さんは、どんな方ですか？

あの人は韓国生まれですよ。私たちの歳に樺太生まれの人はすくないですよ。2・3歳の時に来たとか。日本語はほとんどわかんないですよ、歳はわしよか2・3歳下だから。そして、わかんなくて、日本に行って6カ月勉強したらしいですよ。いろいろ苦労があったみたいですよ。

—周りには、朝鮮人と日本人の夫婦と言うのは多いですか？

何軒かおりましたね。お父さん母さん日本人と言う人はみんな疎開しました。父母が韓国人と言う人が残りましたね。恵須取にはね、二軒だけいたの。ホロキシっていう田舎に、バレーチ、田舎だから農業するところでしょ、そこに日本のひとたちが、二人いました。ひとりはカガヤ、ひとりはナラさんって言ったね。73年頃に、カガヤさんはそのまま恵須取にいたけど、ナラさんだけは、豊原に出ました。カガヤさんはおじさん、おばさん亡くなったのに、子供たちが多かったんですよ。8人か、9人いたのに、みんなロシアの人と結婚したのに。(帰らなかったのは)何か事情があったんでしょうね。

—その方たちとは、お付き合いはあったのですか？

子供たちと少しあったね、おじさんおばさんとは、会ったら礼するくらいで、そんなにはね。70年頃に亡くなったから、まだ私たちも若かったからね、そんなには。お母さんでもそばにいたら、もっと詳しくお話したんだけど。したけど、日本人として、懐かしかったです。カガヤさんでも、ナラさんたちでも、日本人だから、少し変わっているんでしょ、韓国の人とは。樺太に残った人たちはね、すごくやさしい人たちでね、欲なんかなか

ったんです。韓国の人たちは欲の深い人でしょ、もう、ほんとうにもう、人の物とるくらい、欲の深い人で、もの売りながらなんか持っていったりしたら、すぐに売るのがね、日本人が同じ物を持っていても、それをもっと大きいのに、韓国の人のを買うって。したから、持っていくことないって。あつたらあるように自分のもんで生活するって。日本人は欲なんかないって。韓国的人是ぎりぎりだ。下手に会ったら髪もみんなとられるような。頑固頑固、気に入らなかつたら、髪をつかんだりね、今、韓国来てみたらね。それまでは、韓国の人のはわかんないもん。あそこにいる韓国的人是でもないけど、そこに人はそんなに。固いし、欲も多いし、したから暮らしもいいですよ。

—裁断士は給料制だったのですか？

仕事した分だけ。ひとつ裁断したらなんぼって。ロシアの人はね、なんつったらいいか、ケーメルとか行って仕事したから、このロシアの人ね、仕事ひとつやって言ったら、男の服は男の服、ズボンたらズボン、あとのことできないもんね。したけどね、韓国的人是、ズボンはするし、洋服はするしね、それくらい頭が器用なんだか。個人に習いました。一年見習いに行つて。

—こちらに来て食べ物で困つたりはしませんでしたか？

食べ物は主に韓国の食べ物を作つたりしてたから、ここ来ても合いますよ。食べ物も合うし。すぐは合わなかつたけど、今はね。

—お母さんは日本人ですが、キムチは作つたりしていましたか？

知つてましたよ。日本料理もあつたし、韓国料理もあつたし。そのときね、お米なんかなかったですよ。パンもないくらいでね。60年度には少しよくなつたね。韓国来たら米でもなんでも、どんなんでもたくさんあるもんね。ないものがないでしょ。もちごめから何かから。

このロシアにはそんなもんないでしょ。ロシアの人はそんなもん食べないから。遠いタシケント、ウズベキスタン、あつちの方から小包で送つてもらつてね、それをすぐに食べることに出来ないでしょ、お祝とかそういうときに。したから、だれかからきいて、住所もらつて、お金を送つたら送つてくれるんです。そんなこともたくさんありました。小豆なんか、ロシアの人は食べないから。韓国来たらなんでもあるでしょ。しかし、韓国の人たちは、なんていうか、外で食べるんですね。私はそんなことしないから。自分で作つて食べるから。もう、みんな若い人も。サハリンは、うちで、なんでもできることはうちで。おかつしの韓国の人たちの話を聞くと、おかしはそうだったつて、いまは変つたつて。

No.14 文道心 1924年 慶尚南道生

(聞き手:今西一・許粹烈・金鎔基)

24年生まれです。大阪で育ったんです。生まれは朝鮮生まれです。7歳の時に。朝鮮の慶尚南道(キョンサムナンド)。7つのときに、おばさんに、母さんがいなかったもんだから、連れられて、東京につれられて、それから大阪。大阪の鶴橋あるでしょ、朝鮮人はいっぱいそこで生活しているから。

—朝鮮では農家をしていたのですか？

農業です。お父さんはね、区長してたんです。仕事してなかったんです。区長だから。구장。お母さんは、いなかったんです。継母がいたんです。その継母が、いるから、おばさんがね、子供がいないからね、東京へ行ったんです。そこで2年くらい暮らして、それから大阪に行ったんです。東京のどこかは覚えてない。あんまし小さい時だから。

—大阪では何か仕事していたのですか？

何もやってません。その伯父さんがね、仕事して、三人で暮らしてました。早く言えば、土方みたいな。学校は、鶴橋で。5年生までしかしなかったから。朝鮮人の猪飼野町ってところで。済州島の人も多かったです。ああ、日本人と一緒に勉強しましたよ。今、考えてもね、不思議でならないのがね、日本人は貧乏でもなんでも、子供が7つになったら学校へ行かすのが、目的ですよ。朝鮮の人はおかしいから、工場へ行って仕事をしれて。だから私決心したの。わたし、もし嫁に行ったら、勉強させるなあって。みんな、わたしの思う通り勉強させたんです。女の子が3人だしね、男の子1人なの。男の子は医学大学の勉強して。

—樺太に来たのはいつですか？

ああ、樺太にね、樺太は18歳の時におばさんがね、今度はね、16人募集してね、樺太に行ったんです。何の仕事っていうと、選炭場の仕事で行ったの。そのときにね、昭和組ってどこ行ったんです。

—鶴橋ではどんな仕事をしていたんですか？

ゴム工場ね。靴をはるとか。朝鮮の娘はみんないっぱいそこで働いたんです。

—学校で朝鮮人差別はありましたか？

少しあったね、わたしきかないから、負けなかった。小さい時からきかないからね、負けないんです。チョウセンナッパだ、アオナッパだって、こそこそ言ってるの聞くしょ、したらやっつけてやるの。口げんかしたら負けなくて。取っ組み合いはしないけど。日本は取っ組み合いなんてしないんです。日本はね、教育が違うから。

—賃金はどうでしたか？

給料少し、それは覚えてないです。悪い給料じゃないみたいね、いま考えたら。あんときはねお米とか安かったからね。1日1円はくれなかったんですね。1日50銭もらえば、いいところ。日本人はね、奥さんたちが、二人いた。済州島の娘たちがいた。その娘たちも勉

強しないで、工場で。はあ、いっぱいいます。

—鶴橋では貧しかったのですか？

貧しいったら、わたしたちは貧しかったけどね、貧しいのが当たり前でしたけど。懐かしいね。いま考えてみると。お風呂行ってから、お膳屋行ってね、2 銭あれば、餅入れてちゃんね、お膳食べて。

—鶴橋ではハングルを使っていたんですか？

みんなの友達の中でね、朝鮮語を使えばはずかしような。濟州島の娘たちは濟州島の言葉で。名前を呼ばないで、私だけ着物着て、みんなはね、チョゴリとか着て、わたしはもう三尺結んで。そこにいてもね、娘たちはチマチョゴリ来てからね、私はお盆かお正月になったら、はじめてね朝鮮のチョゴリとチマを着て。

—食事はどうでしたか？

朝鮮の食事ですね。だけど、私ね日本人の方が大阪にいて、名古屋に行った時はね、みんな私のこと好きでね、ふみちゃんおいでよ、お風呂が沸いたぞって。日本人は毎日風呂わかすからね。銭湯に行くと、お金かかるからね。今考えたら、その方にわたしは慈悲しいけど、いつも呼んでね。風呂入りにおいでよ、ふみちゃんって。今日、風呂沸くよって。いつも好きだったね、その日本人たち私を。そこにいるときも、朝鮮の方はなかなか、自分で桶にお風呂沸いたりしないから、行けば銭湯の風呂。3 銭出して行くけど、日本人はね、自分の家があるから。私たちは、バラック、長屋ね、部屋ふたつとか。それにお勝手が。6人も8人も。いま考えたらね、そのときの日本人はね、親切でしたよ。親切な人の方が多かったですよ。男の子がね、10 歳過ぎてても学校へ行かないで子供おぶってお前なんで学校に行かないんだって。行かしてくれないもん、なんで行かないんだって言われても。いじめなんだね。おかしい癖あったね。日本に来ているから、朝鮮人は、お父さんお母さん、子供を学校にやればいいのに、やらないんですよ。そんときの日本人は、黙って考えてみると、親切だったね。

—樺太ではどんな仕事をしていたのですか？

あんときはね、サハリンのね。私は働かなかったんです。歳をとってから、なんかしなきゃなって、美容師に入って、そこで働いたんです。そんときは学校はなかった、行ってお掃除とかして習うんです。髪を切るとか、髪を染めるとか、それが専門でしたよ。そのときは個人の主人です、経営者がいて、いてから頼おんです、わたしを使ってくださいって。黙って見て、いらぬとは言わなかったね。日本人の経営者です。まあ、給料は悪くなかったね。そうして仕事をするもんだから、あんときはね、子供が大学へ行っても。

—いつご結婚なさったのですか？

19 歳で結婚して、トラックの運転手。子供 4 人いたけど、娘ひとり死んでから、娘は嫁に行って子供一人産んでから死んだ。

—旦那さんはどうして樺太へ来たのですか？

ああ、あの人はね、自分で来て、東京へ来て。東京から樺太へ、サハリンへ行ったんです。

仕事があるだろうって、樺太来たら大金をもらうことができるだろうって。

—戦争の時はどうでしたか？

配給ありました。配給あってもね、そんなに少なくなかったね、樺太は。特別なあれを配給してくれるみたいで。大豆マメをたくさんくれてね、その大豆マメを、みんな余っていた。いまみたら、豆腐もつくるし、納豆もつくるし、今考えたら作ればいいのに、みんな店に行って買って食べる。2年後になったら、豆腐は自分でつくる、納豆も作る、みんな自分で作るんです。なんでも作る。

—空襲はどうでしたか？

樺太は空襲なかったんですね。空襲はあったけど、豊原に空襲はありましたけど、焼夷弾とか、人間を全滅するようなのはなかったね。

—ソ連兵はどうでしたか？

恵須取で。恵須取で住んでました。わたしは逃げてね、みんな置いてね。後で戻ってきたら、家の中こんなになってね。ところどころで、悪いことは聞いたけど、私はわるいことなかった。おかしいことあったね、何がおかしいって、ロシアの軍隊をね、日本の娘が誘うくらいのね、朝鮮の女はそんなことなかったです。日本人はね、みんなわたしたちは不思議に思ったんです。日本人は怖くないのかなって、朝鮮の女性は、はずかしそうにね、付き合いがないので、見たら逃げてしまう。でも、日本人は手を組んで歩いたり、わたしたちびっくりして。私たち、怖くないのかロシア人、て。目、見てもこわいじゃないかって。

—樺太では朝鮮人ということで差別されましたか？

なかったね。私はない。そんな差別はあったことないね。ここではおばさんがた、日本人は大して差別したとか言ってるけど、わたしはなんもなかったから。

—終戦のときはどうでしたか？

それだけは区別はあったんですね、大きい区別ですよ。疎開に行ったら朝鮮人も日本人も一緒に連れて行けばいいのにね、朝鮮人はひとりも連れて行かないで、日本人だけね、疎開船。そんなときね、日本人と、朝鮮人の男と一緒になるでしょ、それは行かせた。私もそのとき頭を使えば、行けたかもしれないけど、それはできなかった。警察に用があって行ったらね、通訳したら、ロシアの女がね、なしてあんた日本へ帰らないかって、真岡ってところあるんです。真岡に行って見つかったら、懲役へ行くんだもん、子供がいるのにどうして行くかって。そんなとき子供一人しかいなかったけど。そんなときは行けたかもしれないけど。あとで黙って考えたら、渡らなくてよかったんですよ。日本にいたらね、私の子供が大学へ行くことなんて、できないんです、絶対。女の子3人は、ピアニストにね、みんな成功させました、息子一人は、医学大学に行ってね。

—戦後は無国籍だったのですか？

国籍は、ソビエト国籍はありませんでした。あとからね、ソビエト国籍になりたくても、なれなかった。わたしたちは日本国籍は持ってませんでした、韓国人にはね、日本の国籍

なんもくれなかったんです。こう、なんちゅうんだか、비공민 (非公民) ですね。

—戦後も美容師をなさっていたんですか？

主人は、運転手ないときは土方ですね。戦後は、わたしは働かなかったんです。

—北朝鮮の国籍は取得したのですか？

北朝鮮戸籍はありました。いっぱいあったんです。北朝鮮戸籍ありました。そしてあとでね、ソビエトの国籍をもらいました。90年代。それなかったら、ここへ帰国できなかったんです。日本へは帰国できないし、北朝鮮のあれ持っている人も。して、今度、ロシアのあれ、国民のあれ持っている人は帰国できたんです。

—お子さんの国籍はどうだったんですか？

親が비공민 (非公民) だったら、くれないんです。

—ロシア語はどうやって身に付けたんですか？

少しね、少ししたんです。ソビエトのね、言葉はね、ほんとうに難しんです。したから、勉強しないとね、子供、女それがみんな同じじゃないから。少しね、文法わかんないとね、仕事もできないし。ソビエトのも少し勉強したんです。個人でね、先生を頼んで、みんな集まって、先生を招待して、わたしそんなん好きだったから、となり歩いて。たいした、それが得になったんです。してあの、市場へ行ったら、トマトか何か売ってるのにね、**хазяйка**(女主人)、**хазяйка**、何かわかるかって、**хазяйка**って、お前のことだって。**хазяйка**は奥さんのことです。奥さん、これ買いなさいって。男だもん、**хазяйка**ってわからないもの、**хазяин** (主人、旦那) って言えって。少し勉強したっけね、それだけわかるようになったもんね。子供はね、朝鮮学校もあったんです。朝鮮学校は、あっちから先生が来てね、朝鮮学校は、露語の先生もあるし、英語の先生あるし、けども、朝鮮学校行かない、面倒くさいから。ロシアの学校行った。うちの息子はね、朝鮮学校、中学校、いっつもね手紙出すのにね、上手ですよ。90何年にね、親戚がいるから、招待してもらって、息子が医者をやっているときね、みんなに褒められたんです。ロシアで生まれたのに、そんなに朝鮮語も上手だしね、ロシアで生まれたのに、朝鮮語がよく言えるし、えらいって。どんなに母さんが教育したかって。今はね、子供は朝鮮語わからないんです。してから、いつもおこるんです。母さん父さんが朝鮮人なのに、朝鮮語わかんないって、それが理解できないって。

—息子さんはどこの医科大学を出られたんですか？

ブラゴシベシチェンスク、そこに **граница** (国境) があるんです、中国、**Китай** が見えるんです。

—息子さんはいつソ連国籍を取得なさったのですか？

すぐとったんです。大学行く時まで비공민 (非公民) で。そこ行ってすぐとったんです。ロシアはね、大学をね、コンクール、多いです。大学だけあがったら、なんもね、そこでね、優等なんかしたらね、お金を出してくれるんです。息子はお医者です、家には、息子がいっぱいいます。孫がね、孫二人がお医者さんにね。孫がお医者さんの嫁さんをもらったから、

お医者さんが4人になってしまったもの。お医者さんだらけだよ。

—御主人はいまどうなさっているんですか？

ここ来てから。2000年に帰国したでしょ。7月に亡くなったんです。

—どうして永住帰国しようと思ったのですか？

ゴルバチョフでなかったときはね、悪くなかったんです。年金もらって生活できたんです。ゴルバチョフがひっくり返ってしまってね、ひとつはねいいけど、ひとつは大してわるかったんです。

—生活が苦しいから、永住帰国を決心したのですか？

そうじゃなく、何ていうかね、やっぱし、生活がそこで個人の家だからね、アパートじゃないから、パンも買わないといけないし、それから、今度、パンをバケツに運ぶのも、ここ痛くなるんです。韓国へ帰国したら、みんながもう、したけどね、韓国言ったら年金をね、10万円しかくれない、それでも行くかって。行く行く、いいからって。来てよかったんです。アパートにね、あれするし。ここあったかいし。娘がね、サハリンから来るでしょ。母さんいるととあったかいね、あんなにきれいな花も咲くしね。あんな花なんか見たことない。私仕事するとき、休憩くれるんです。ソチ、ソチってところあるんです。そこにここみたいな花咲くんです。そして今度、母さんいるとここんなにきれいな花が咲くって、私ソチ行って、こんな花見たって。歳が歳だから、それが悪いんです。日本はね、樺太からね、自分で連れて行きたい人みんな連れて行けたでしょ、孫まで。ここはね、どういうあれだか、45年まで。家の娘ははね49年生まれだから、これないんです。それはなっていない、話なんです。49年だから、もう今年61だからね。私がもう89だからね、帰国させて。いま、あれ東京にいますか、先生、高木さんいます？80の時会ってから。49年のね、娘が来たくて、来たくて、どうにもならない。勉強もしないしね、少し悪い娘がいるわけです、一緒に帰国したらいいのに。黙って考えて、高木先生に頼むかなって。でも、駄目だってね。金だけ使って駄目だから、やめよかなって。45年の人は来るし、46年も47年も48年もだめだって。たまげてしまったね。

—永住帰国に対してお子さんたちはどういう意見をお持ちでしたか？

49年に生まれた娘を呼びたいけど、できないから。娘もそこで生活が悪いから。ピアニストは卒業したけど、いまはもう60歳になったから。若いピアニストが来てから、使わないわけさ。私の年金あげてきたわけです。みんな高いし。お母さん、ここみんな生活困ってるって。お前だけじゃなくて、みんなそうだから仕方ないじゃないかって。私の年金までみんなあやって来てから。お前、私の年金もらってるんじゃないかって。朝鮮の老人たちは、腹減って死ぬ人はいないけど、ここ来てからいつも言うんです、母さん、ロシアの老人たちはね、母さんみたいに年金貰ってからね、家賃も足りないくらいだ、死ぬ人がいっぱいいるって、朝鮮の人は死ぬ人いないでしょって。モスクワ行った、ソチも行った。韓国言ったら、もしロシアで暮らしたより、モスクワみんなであって。モスクワやっぱり有名ですね。

—北朝鮮へは行ったことはあるのですか？

行ったことあるよ、一回。何年に行ったか。71年かな。言葉で言えない。個人の人たちは、私たちを見てから、うらやましがってね。40過ぎてたけど、30くらいにしか見えないって。40くらいのときは、まだバリバリしてたから。いまは、5代目、6代目かい？みんな腹減ってから。話は言えないね。行ったことないでしょ。行くもんじゃないですよ。人間はね、みんな同じなのにね、みんなうらやましがって、着るものから何からジロジロ見るし、あっこは行ったことあるんです。

ソ連の国籍をもってね、朝鮮国籍をあれしないで、ソ連の国籍を黙って、持っている人で、子供たちみんなつれて10年目で帰って来た人います。そのときは、戸籍を、朝鮮戸籍ってわかんなくて、来た人いるね。

—北朝鮮への帰国は考えたことはあるのですか？

うん、とれとれって言われても、あそこで早く頭を使わないで、してから、10年して大使館へ行って、おれ帰るって、ソ連の大使館、平壤（ピョンヤン）にあるからね、ああ、帰るか、帰るなら帰れと。いま、あんたがた行ったら、よくしてくれるって。迎えるからって。大きい息子だけ置いてけ、置いてけって頼んだけど、なかなか置いて行かない。

—お子さんたちは安山へいらっしゃることはありますか？

息子は一回しか来ないけど、娘はもう、夏になったらね、母さん私行くよ、行くよって、お前行くよ行くよって言うけど、行くよじゃないじゃないかって。ハバロフスクからこっちへ来るときね、家を売って、その、自分のね、**машина**（車）売って、自分のあるから、わたし大阪行って買ったんですよ、それあるのに、娘が行ったり来たり何度もして、その金みんな使ってしまった。ここに下りるお金は、余る時もあるけど、みんな使わないといけない。ここも葬式あるとか、何があるとかね。いっぱい。金がないと言われたいし。お前去年2回も来たじゃないか、だまっとれって。家を売ったし、**машина**は売ったし、みんな使ったようなもんです。ハバロフスクにいる娘は、有名なピアニストだから、それは娘が来たら、母さん金やる、いくらやる、100万やるかって、50万やるかって、いい、金なんかいらないうって。

—戦後は働かなかったのですか？

それからあとで、またしたんです。また美容師です。私の仕事は美容師、57歳までしたんです。個人じゃないですよ。**план**（計画）があるんです。3,000 だったら、3,000、4,000 だったら、4,000、一ヶ月にやるんです。そしたら月給くれるわけさ。ソ連人に負けないくらい、仕事したから。パーマでも、髪を染めるとか、頭切るとかも上手じゃなきゃだめですよ。切るのをよくできないと、駄目なんです。だから、ソ連の女性に負けないから。喧嘩になったらいつも私が勝つもの。仕事にね、負けないから勝つこと出来るでしょ、でもね、ロシアの女の人たち、仕事、髪を切るのが下手だし、出て行って、私が言うんです、言えばね。

—お子さんはどうやって育てたのですか？

子供のときは、4年くらいまで、1年か2年の時は優等したのにね、あとで勉強しないでどうするんだって、えい、って叩くんだね、私ね。日本にいるときは、貧しくて勉強できなくてね、御飯より恋しかった。だから、たたくの。腹減って勉強しないのか、着る物がなにか、靴がないか、なんで勉強しないかって。叩いて、もう、みんな怖くてね。10年生、中学卒業したときね、息子がね、どの大学行くかって言うから、医学大学行けって。医学大学行かないって、クンチュッパク、建築、そこ行けって、わし言ったわけさ。医者だったら、人の殺すかもしれないから。そこ行ったら、母さん、家ひとつ作るの下手だったら、何の責任持つかわかるかって。したけど、医者はね、医者はね、責任少ない方だと、だから、おれ医学大学行けって。自分で行けって言うから行った。うちの娘がピアニストだから、姉さんにピアノ買ったりするけど、俺にもその音楽、男が音楽？音楽はな、昔の、ベートーベンとかね、子供の5つか6つの音楽をしてやったらえらい人になるけど、お前は今頃しても、駄目だって。音楽はやめれって、医学大学へ。出世したんです。医者でもね、有名なね。セルゲイって言うんです。

—娘さんはどの学校でべんきょうしたのですか？

音楽学校行ったんです。音楽学校卒業して、専門学校行って。ふたりは専門学校卒業して、一番小さい娘は、ハバロフクスクの大学卒業したんです。

No.15 黄龍門 1930年3月10日 珍内生

No.16 張永福 1933年12月30日 小田州生

(聞き手:倉田由佳・中山大将)

黄：黄龍門と言います。昭和5年生まれで、3月10日です。

張：34年の、本当は昭和8年の12月30日なんですよ、でも戸籍上はあまりに遅いので、一年差でもって34年の1月5日にしたんだよ。

—生まれ育ったのはどこですか？

張：僕は小田州。

黄：私は珍内、この方は今のパールスツナイ。終戦後ですね、珍内に戻って。生まれは、泊居です。うちの両親は1913年にすでに日本に来ていたらしいんですよ。私は日本生まれ、サハリン生まれですから、韓国のことは全然知らなかったです。91年に初めて韓国訪問をして、それまでは全然知らなかったです。

張：僕は92年にはじめて韓国に来ました。92年の四月に。韓国側の協力があって来たんです。

—韓国へはどのように来たんですか？

黄：赤十字社ですね。韓国と日本の赤十字社が協力して。直通便で来ました。

張：日本を通過して来たのは、89年のときです。そのあとは直接。89年の頃は、日本経由じゃないといけないんです。僕の妻の母親も日本を通過して、東京通って釜山へ来ました。

—ご両親はどうして樺太へ来たんですか？

黄：お父さんは一度日本へ来て、九州へ来て、それから大阪に行って、北海道に来て、それからサハリンへ来たって。私が30年生まれですから、その前にサハリンに来たというのは確かですね。父親は、北朝鮮の平安北道です。私行ったことも見たこともないけど。母親は、慶尚南道、釜山ですね。いまそこには親戚がいるけど。60年も会ったことなく、1992年にはじめて来て、私のおふくろの妹がまだ生きていて、その妹が私の叔母だと証明してくれたんです。叔母が私が三歳くらいまでサハリンにいたっていうから。それから神戸へ来て、終戦後に韓国に来ただけど、それを叔母が証明してくれたんです。それじゃなきゃ、全然わからなかったですよ。文通も何もなかったですから。終戦前はありましたけど。それから終戦後は全然なかったですよ。泊居には小学校3年までいて、それから、別のところへ移って、それから珍内に移って、帰国まで。終戦した時は、昭和19年に高等科を卒業して郵便局に勤めていました。はじめは配達、一年間は事務で、それで終戦。留久志（ルクシ）という町で。郵便局は、学校の校長先生が紹介してくれて。上に進学すると言われてたけど、家庭の都合上、勝手にできなくて、貧しいながら、高等2年まで行って、仕事しますと。そしたら、家と近くて、校長先生がここに行ってみると。それが14歳の時です。1945年の9月までそこにいたんです。ソ連軍がやってきて、郵便とかありませんし、事務員一人と局長残して、辞職ですよ。何もすることないから、15歳の子供ですから

ぶらぶらして。その時は、小学校出るまでは両親と一緒にいなかったんですよ。両親は山の方で造材業していましたから、私は日本の方のところに下宿しながら通っていたんです。終戦後に父母と暮らしました。最後の配達は、9月のなか頃ですね。もう郵便物なんて来ないんですよ。電信、電報くらい。珍内に行ったのは、珍内の上にスギノっていう、小さな炭坑があったんだよ、そこに造材部があったんです、そこに親が行ったもので、私もそこに行ったんです。それは、終戦前ですね。

—終戦の時はどうしていたんですか？

張：僕はまだ小学生で6年生の8月までいたんです。卒業はできなくて。したから、8月まで勉強したんだけど。そのあとは朝鮮学校が組織されて、通うようになった。ロシア人が全然来ない、朝鮮人だけ。ロシア学校もあったし、日本学校もあったし。

黄：それでもですね、日本のそこに残った先生たちは、ほとんど生徒もいないんです。

張：朝鮮学校はハングルでしたけど、教科書もないですよ。

黄：正規の人じゃないんですよ、この人が少し知識がある、ハングル少しわかるって人が一時。それから数年経ってから、大陸から教員が来るわけです。そこで、名目は朝鮮学校だけど、内容は全部ソ連式です。

張：元からいた先生たちは信用してくれないんですね。したから、ロシアから来た先生¹²が教えるんです。元いた先生ってのは、元から樺太にいたある程度教養のある人ね。カザフスタンとか、ウズベキスタンとか、そっち方から来ていました。

黄：ああいうところはスターリンが強制的に移動させていたから。家もないなんもないところに。それは後になってわかったんですね。

張：年寄りたちの話を聞くと、一晩のうちに何にも荷物も持たないでそれで、直接野原にばらまかれたんです。

黄：相当苦勞したんですね。餓死した人もいるし。前から、そういう歴史は知っていたんです。沿海州ですね、1937年38年ですね、北朝鮮の方から帝国主義に反対して行った人間たちがいるわけです。農業をして、その時は国境もきつくなかったんですね。この話を聞くと、スターリンが、彼らは日本に近いと、スパイになるかもしれないと。犯行したら、その場で銃殺です。何か言ったらすぐです。

—無国籍だと、どんな不便がありましたか？

張：僕ね、留久志でイモを植えたんです。珍内から通って、して、海岸通れば近いわけですよ。朝とか行くと、沿岸警備隊につかまって。

—中央アジアの朝鮮人のことは知っていたんですか？

黄：中央アジアの朝鮮人のことは、日本のときにうわさで聞いていました。沿海州とは戦前は全然交流はなかったです。

張：沿海州から日本時代に渡って来た人もいます。沿海州で暮らしていた人が、日本時代に樺太に渡って、僕らと暮らしていた人もいます。密航してきてね。革命時代、1917

¹² 「高麗人」のこと。

年、そういう人もいましたね。

黄：普通に暮らしている人だけど、憲兵がやってきてね、ソ連の人だから。でも、送り返すことはなかったですね。亡命みたいな形で、ずっといました。

張：僕らと同じですよ。今もいますよ。

黄：数はそんなにいないですけど。あの人たちはね、北樺太から国境を越えて来たんですね。中央アジアから朝鮮人と私たちは社会が違いました。それから、中央アジアから来た人は、憲兵の人が多いですね。将校なんです。中尉、大尉、で。彼らが私服で部落を回ったり。民族は同じって言うけど、裏では全然違う。

張：日本時代からいた人間なんて、信用してくれないもん。大陸から連れて来た朝鮮人を信用して。

—大陸から来た朝鮮人は共産党員だったのですか？

黄：大陸から来た教員は、共産党員でね、普通の人じゃなれないもの。ソ連国籍がないと難しいし、あっても難しいし。たくさんいますよ、党員にならないと課長とかになれないですから、入党したくなくても、入党してしまうんですよ。私は長く無国籍でね、ペレストロイカの時まで。考えがにぶかったんですね。48年頃、日本人はみんな引き揚げて、こんどは我々が韓国へ行くんだと、国籍なんて必要ないと、今日明日に韓国に帰るんだからと。ですからね、光陰矢のごとし、というか、歳月は人のことなんて考えてはくれませんよ。結婚して、子供ができて、子供の教育とか自分の生活に追われて行きますから。でも国籍のことは出てくるんですね、なぜならば子供たちが困るので、中学校に行けないんですよ。自分たちで、国籍を取るんです。我々、行くとあんたがたは必要ないでしょ、死ぬんだからと。こんなことは言われました。無国籍のパスポートもね、2年に一度更新します。

張：僕たちその時は、国籍を出したかったけど、だめでしたよ。

黄：何回も上層部に嘆願書を出しましたが、そのたびに断られました。

張：なぜ国籍をだしたかったと言えば、通行ね。他の街に行こうとしたら、必ず許可がいるんです。それで僕は、不便ですから、ソ連国民じゃないと。

黄：12km以外は、証明書なしじゃないといけないんです。つかまったら罰金で。証明書をもろうには、警察で。

張：こういうことがありましたよ。僕の妹の主人が肺病になって死んだから、警察署に行って書いたわけさ。これこれこういうわけで行かせてくださいと。でも、警察署長がいなわけさ。それでもって待っても待ってもいないし、待ってもどうせ許可してくれないし。仕方なしに、行ったわけさ。行ったらつかまるわけさ、沿岸警備隊に。仕方ない。でも、行かないといけないから、賄賂を使ったわけさ。賄賂を使ってから、これこれこういうわけで、証明をもらえなくて、来たわけですから、どうぞ頼みますって、行って来たわけさ。

—当時は賄賂は一般的だったのですか？

黄：私が1991年、初めて来たときに、友人たちが招待してくれて、そのときはちょうどロシアの国籍になっていたから、招待状をもらってすぐに翻訳して、ナホトカに領事館があ

ったわけで、そこで日本人の人が、私の友人 60 人が招待してくれています、って言うてくれたんですけど、行くときに大泊で税関があって、毛皮類はだめだとか、何が駄目だとか、何かでもってね、持って行きたいんです。女性の税関で、違反しても持って行くと。ご主人はいますか、お子さんはいますか、って賄賂の合図をしたんです。帰る時は、またその税関で、私は用意して来たんです、女のストッキングとか、ガムだとか、ライターだとか。そしたら、兵士の眼があるから、足の方に置いて、女性が、すぐに感づいて、通りなさいって。

この方のように、亡くなった場合、じゃあ、証明書を持って来いと、病院から死亡証明書を持って来いと、こんなことを言ったんです。そんなことをやっていたんですから。人情も何もない。言葉で指示して。証明書を出さないくせに、罰金になったらお前の責任だぞと。それでも無視して行くんです。忙しいときだから仕方ない。必ずしも調べるというわけではないんですけど。

—朝鮮人でも軍人や警察官にはなれたのですか？

張：軍隊や警察もロシアの国民になれば、なれます。

黄：ロシアの国籍あれば、18 歳になれば徴兵ですね。国籍とったのは、ブレジネフ第一書記が亡くなったすぐ後です。

張：ゴルバチョフが出てからだよ。

黄：だから、ブレジネフが死んですぐ。

張：どうしてもロシアに住むとしたら、どっかに行くとしたら、なきゃだめでしょ、不便だから。

黄：最初は、ソ連国籍をとってしまえば、帰れなくなる懸念はあったんですけど、それはもう別。ですから我々は、考えが足りなかったんですね。ソ連国籍は最初はいかったんです。北朝鮮の国籍をとったら全然だめです。それを捨ててまた無国籍になったんです。無国籍になったんですが、パスポートに元は北朝鮮であったと書いてあるんです。だから、全然変わらないんです。

張：最初は宣伝したわけさ、ロシアの国籍をとりなさいって。宣伝されたんだけど、北朝鮮来てからが全然だめさ。同じ共産党だからね。

黄：北朝鮮の宣伝が来たのはね、あれは私が、弟が北朝鮮に行く前だから…。

張：60 年代だね。はっきりしないけど。

黄：ナホトカに領事館があって、北朝鮮のが来て集めて、ああだこうだ、南、韓国はだめで、そこに行くと、北は金日成（きん・にっせい）の温かい胸の中でと、それは我々わかってたんです、ラジオを聴いて。日本放送、韓国放送聴いてましたよ。ですから、日本は今どうなっている、韓国はどうなっている、みんなわかっていましたよ。北朝鮮が来たからって、我々は全然。領事が来てからね、人を連れて来て、当委員会が許可してくれるんですよ。人を集めて教育をしなさいと。あれはこうだ、あれはどうだ。宣伝聞くと、そうかなるほどな、と納得のいく話なんですけど。年寄りはそのか、と聞いていたけど、我々

30歳くらいの方は、何を言っているんだと。集まりに行くか行かないかは、自由なんです。だけど、たいがい何を言うのかなって行くんです。面白半分で。

—南出身の人だから北朝鮮には帰らないということはありましたか？

親たちは、あったでしょうね。私の父親も1957年に亡くなりましたけど、常に言っていたのは故郷に帰りたいと、これは人情ですね。これは仕方ないです。誰しも自分の故郷に行きたいです。もちろん、南北がああいうふたつに分かれてなけりゃ、行けたでしょうね。韓国は行けなかったですけど、北朝鮮は行くことができたんです。観光のようなもので行くなら別ですけど。いたんですよ、北朝鮮に永住帰国した人も。そして、後悔しているんです。北朝鮮に行って、また戻ってきている人もいます。それもソ連国籍のあった人。ソ連国籍があるから戻れるんです。ソ連国籍のない人は、だめです。

張：それきり出してくれなくなる。だから、ロシア国籍の人たちはつかんでいる権利がないから。北朝鮮からも親とか、親戚とかいると来ていましたよ。そういう人たちは、北朝鮮の党員に頼んで内緒で来る人もいました。

黄：来た人の話を聞くと、みじめなもんですよ。とにかく何にもないんです。労働党党員にならないと何にもできない。彼らはね、批判とかそういうことは言えないんです。

—おふたりはどのようにお知り合いになったんですか？

黄：親たちが知り合いだったんです。そんなに韓国人が多くいなかったわけではないので、みんな親たちは知っているんです。親御さんたちは親しくしているんです。お互いに知っていたけですから。

張：僕たちは、この人たちが珍内に移ってきてから、わかったけど。親たちはわかっていたわけです。

黄：サハリンにいる親御さんたちは、もう年配の人がたは、韓国人はみんな知り合いなんです。私たちがわからないけど。たくさんいるでしょ。親御さんたちは知っているけど、子供たちは知らないんです。

—黄さんは珍内で何をしていたのですか？

私は珍内来てからは仕事をしていました、現場ですと。はじめはね、船に乗ったんですよ。漁村だったんで。海に憧れていたんです。これじゃだめだな、どっか学校に行きたいけど、金はないしと。金のかからない学校はないかなと、見たんです。そしたらポスターとかって、軍の学校ですね、少年飛行兵だとか、あの頃、あって。私は海が好きでしたから、それで北海道の小樽に海員養成所ってのがあったんです。3年間の。航海士と、機関士と。私は機械が好きだったから、機関士になろうと、局長あたりに言ったら、人が足りないからだめだと言われて。本斗まで行ったんです。そこが試験所だったんですね。それで、試験は国語と作文、あの頃はもう、試験したらその場ですぐ合格不合格がわかりました。それで、合格はしたんです。たいがい入学は4月1日だったんじゃないかと思うんですが、海員養成所は、6月1日だったんです。1945年ですよ。春に試験を受けて、これでいいだろうと、親にも誰にも言わないで。でも、船乗りになんか人間のなるもんでねって言われて。そ

れで、船とかね。アムール川とか行って、ナホトカとか、ウラジオストクのそばとかまで行きました。1954年まで。その頃、私は無国籍でしょ。

張：無国籍でよくやったよ。無国籍だと漁師もやれないよ、海へ出させないんだから。

黄：あとはいろんな仕事をして、運転手をしたり。珍内で。1985年、年金者として。でも、55歳でまだ若いから、ずっと仕事はしていました。60歳になるまで仕事をしていました。一張さんは戦後は何をなさっていたんですか？

張：朝鮮学校は、7年生終わって、ロシア学校の夜学を終わって、それから、終わった後、溶接の仕事に行っ。工場、珍内の。桶工場があっ、そこで。

黄：サハリンで一番大きい工場ですよ。漁業の魚を詰める箱とか。木は買うんです。サハリン全島、沿海州から。

張：ここ来るまでずっと溶接工をしていました。来る時まで、僕らはずっと珍内で一緒に暮らしていたんです。

黄：来る時も一緒に。

張：まあ、一ヶ月違うけど。

—ソ連時代をどう思いますか？

黄：腹の立つこともよくありましたけどね。仕方ないですよ、それはもう。共産党は差別なんてないって言うものの。ただひとつロシアで学校に行くでしょ、授業料、寄宿舎はただだったし、病気しても医療費は払わなくてよかったし。薬代、入院代もいらなかった。そして、10日だったら、10日分の日当を100%払ってくれるんです。それがいいですね。他のことはね。日本にもあるでしょうけど、有給休暇があるんです。ですから、3年間有給休暇をもらわないんですよ、そしたら約半年休めるんですよ。お金も出るし、それで旅行したり、買物したり、またお金をもらいながら働いたり。海外旅行ってのは全然行かなかったけど。

張：無国籍のパスポートでも、ソ連国内は行きましたよ。ソ連時代にね。サンクトペテルブルグとか、黒海とか。それも許可をもらうから、2・3カ月かかりますよ。

黄：全部調べるんです。日本時代に何をしていたかとか、学歴はどうだとか、親は何をしているとか。

張：ひとつ言いたいのは、はたらき賃ですね。ロシア人は働いたら、100%もらえるんです。でも、僕たちは50%しかもらえないんです。戦後ですね。国籍が違うでしょ。フルシチョフのときね、ロシア人はサハリンに来ると、加給されて、余計に払われるんです。僕たちはそれがありませんよ。それがなくなったのは、フルシチョフの制度がそういう法律が10年出ていたんです。したから、ロシア人が100円稼いだら、僕らは50円しかもらえない。10年待って、フルシチョフ時代に10年待ってやっとなくなった。したから、それが70年代ですね。ロシア人とおなじ給料になったのが。ソ連国籍があっても、サハリン居住者は一緒。

黄：大陸から来た人はそう。ロシア人でも、沿海州から来た人は我々と一緒。

張：したけど、北朝鮮から来た人いるでしょ、募集で。その人たちは払われてました。したから、同じ暮らしになったのが、70年代くらい。

黄：1948年49年、ものすごく大陸から来たんですよ。サハリンへね。コルホーズってあるでしょ。そこではね、来ると言うとおパスポートをもらえるの、コルホーズに行った人間は軍隊に行くでしょ。軍大に3年、そしたらコルホーズに帰らないんです。みじめなもんでしたよ。珍内にもあって、来ましたよ。コルホーズ国営農場は働いて給料もらいながらです。ソフホーズは、給料もらえないんです。収穫によって、バケツに一つと言ったら、ひとつ。割り当てです。食べれなかったら、それを市場に持って行って売るんです。牛とか豚とか自分で飼っているでしょ、そしたら供出が来るんです。でも、足りないと、金で払うんです。そんなこともありました。ソフホーズで働いているのは、親が働いている人で、パスポートがなくて、仕方なくそこで働いているんです。ですから、頭のいい人間は、軍隊に行くんです。軍隊に行くと、戻ってこないんです。

一引揚までの間、日本人もコルホーズで働いていたんですか？

張：日本人はなかったですよ。個人農園で。わたしの親たちも、半農で。冬は山で、夏は農業で働いて。まあ、うちは馬が一頭、牛が一頭、みんなそうして。田舎だったらみんなそうです。農業組合ってのがあって、一年にいくらって組合があるんです。イモだら、いもでなんぼって。ただみたいに安いけど、お金はくれるから、供出する。日本人がいなくなったあとは、コルホーズとかできたけど、我々は誰も入る必要ないし。とにかくサハリンは土地が広いですからね、自分でやればいくらでもできるんです。大陸からきたロシア人は、家に入りたくて、コルホーズの入る人もいるし。いろいろです。やはりね、我々、朝鮮人、韓国人はね、忍耐強いのと、団結力がありますからね。

張：戦後すぐは、ロシア人は優勢だったけど、お金をもらう差があるから。して、親たちは年寄りで気持ちが弱くて、お金が少ないでしょ。だから、稼ぐところもないし、農業とかそういうものを売って、お金にしたわけです。いまではね、韓国人が一生懸命働いて、生活費を比べると、韓国人の方が平均は高いですよ。

黄：頭を使ってね。ロシア人はね、我々を見て、東洋のユダヤ人だというわけです。自分たちで研究しているからね。土地があったら、労苦をいとわずに、トマトとかキュウリとか作ってね、ロシア人より先に売って。一番最初に出たものが一番高く売れる。

張：イモなんか植えてもね、ロシア人と同じ畑と一緒にあって、並んでいるんだけどね、韓国人の方はこんなになってね。

黄：ですから、ロシア人は盗むのが好きですよ。朝起きたら、行ってみたら根こそぎみんなイモを取られていたり。

一花の栽培はしましたか？

黄：花は多いですよ。戦後ね、ソ連崩壊後ですよ。田舎では花は売れないですよ。だから豊原ね。真岡とかね、大きな街じゃなきゃ。だからその街に住む人は、ダーチャで、大きなハウスを作って、冬からね、ハウスに火を焚いて苗を植えて。そして、金儲けになる

んです。だんだん、アメリカ人、日本人観光客が来るようになるでしょ。そしたらやはり、花ね。それから病院とか。誰かの誕生日だとか、観劇だとか。ロシア人はね殆ど少ない。

張：朝鮮人はね、金になると知ったら、もう晩も昼もないですよ。一生懸命になってね。

黄：そう、バザールへ行くとね、80%は朝鮮人ですよ。女性も多いですよ。韓国人がいないから。

張：若いもんはそんないないですよ。

黄：私たちはね、大きな畑でよくみんな自分で自給自足のようにはしてみろと、言ってみたら、草ぼうぼうになっていて、どうしたんだ、って言ったら、いちいちそんなことすることはないよ、秋になって刈ればいいんだって。それでお前たちロシア人そっくりだなんて。仕方ないですね。孫や息子は私たちから見ると、もうロシア人で、韓国語もわからないでしょ。そうなるわけですよ。私たち若いころは夫婦共稼ぎで、子供たちは幼稚園とか入れるでしょ、安いですから、そしたら今度は友達全部ロシア人ですよ。

張：今はもう朝鮮学校っていうのはないんですよ。フルシチョフ時代になくなった。

黄：だから私自身も韓国語を全然知らなかった。お父さんお母さんともそんなに一緒にいなかったしね。私たちの場合ね、韓国人の家がね農業をされていて、固まっていないんです。固まった町もあったんですが、離れ離れになっているんですが、友達もですね、私の年代の友人もないんですよ。日本人ばかりしかいないんですよ。だから、もう一言二言はわかるね。1945年までは韓国語全然知らなかった。今でも、そんな自信はありませんけど。

張：僕たちが今使っている韓国語はね、発音はね、韓国人聞けば、この人は韓国人でないってはっきりわかるんですよ。発音の出し方が。僕たちの発音は韓国人が聞いたら、この人は韓国人でないってすぐにわかるんですよ。

黄：だから私自身はね、一番よく話せるし書けるってのは、日本語ですよ。その次がロシア語、その次が韓国語。ハングルなんて習ったことないから、読んだら読めるけど、書けって言ったら書けない。なぜかっていうと、文法的にはだめ。

張：パッチムってあるでしょ。ああいうのが難しいんです。発音の出し方が違うんです。

黄：小説とか新聞とか読むでしょ。読みたい、読んでも意味はわからないんです、30%でも漢字がわかれば、わかるんです。でも、漢字が全然混じらないから、駄目なんです。韓国語はサハリンにいるときは全然。

張：サハリンでも覚えたけど、使っている言葉と全然違うし。差があります。

黄：サハリンの韓国語は、北朝鮮のに似ているんです。

張：なぜかっていうと、戦後にそちらの方から、先生が来て、教えたもんだから。親の方言より、先生方の方言の方が強い。

黄：ですから、私たちの習ったのは標準語でしょ。ですから、北海道や東京へ行っても通じますね。でも、青森だとか九州だとか言ってもわからないですよ。ですから、いま残念なのはね、サハリンにいたときに、NHK放送で、「言葉の標識」って放送があったんです。

非常に勉強になったんです。それがなくなったんで、非常に残念ですね。あのころはテレビ部がなかったから、トランジスタラジオを枕元において、聞いたんですよ。まあ、日本語のニュース、漫才とか、浪曲とか。いまでも日本ではないでしょ。いまここで、日本放送、NHKのBS1、BS2とか見れますね。日曜日の夜になると、日本の歌とかね、懐かしいの。だからうちにはテレビがふたつあるんです。一つじゃ喧嘩になるんです。家内は韓国のドラマとか見ているんです。私は、日本のとか、ロシアのとかしか見ない。二つ置かないとだめなんです。

張：僕もそうなんだよ。テレビが二つあるんだよ。

黄：ですから、日本語はね、私にしたら、忘れられないんですよ。忘れろったって忘れられません。そういう風になってしまったんだから。韓国語もね、ここへ来てだいぶ覚ええましたよ。全然知らなかったんです。

張：僕らのあいさつの仕方は、ロシア人に近いですね。

黄：韓国語、サハリンで覚えた韓国語も、来てみると違う言葉でしょ。たとえばね、田舎をね、サハリンでは、チョネ(呑)、っていうんですよ。でも、ここではチョネって言わないんですよ。シボレ(시골)っていうんですよ。わかるったら、わかるらしんだけど、そうは言わないんですよ。

張：したから、親たち使った言葉と違ってるとだよね。

黄：言葉は、方言は違うでしょうね。済州島、チェジュドは全然わからない。言葉は。釜山(ふざん)と、慶尚南道(けいしょうなんどう)、それに京畿道(けいきどう)、この言葉は違う。通じますけどね、違う。やっぱり、そのまあ、標準語はありますよ、ありますけど。サハリンでは日本語は、学校では話せないです。

張：でも、我々年配は、日本語使っているよ、ここでも日本語を混ぜないと話が出ないから。

一ソ連時代は、ロシア人の前ではハングルは使わないようにしていましたか？

黄：密告とかはないけど、わからない人の前で、日本語をしゃべったりはしませんでした。

張：僕たち同士の話だったら、ロシア語使い、韓国語を使い、日本語使いで、わかるけど。

黄：現在の韓国の人前では、とても日本語は話せないですよ。年配は日本語が上手なものですから。親はもっと韓国語を話せるようになって言ってましたけどね。1945年にはもう17・18歳になって、親と一緒にいなかったし、みんな育った後は、もう簡単に覚えられない。40年間の間に少しずつ覚えて行きましたね。ここ来たら、とにかく韓国語を話さないと、仕方ないでしょ。

張：サハリンではロシア人がいたから、言葉の使い方は、ロシア語が一番よく使いましたね、ここ来ては、韓国語余計多くなってる。

黄：役場とか、病院とか。警察は行く必要ないけど、こういう事務所とか。私たちやはり日本語・ロシア語話したって仕方ないから、いっつも韓国語を少しずつ覚えて、漢字で書いたら意味は同じでしょ。

張：韓国語を使う方がだんだん多くなってきました。

黄：私ももう何年もないでしょ、歳が歳ですから。80 歳眼の前です。いろんなことありました。子供たちはサハリンに居ります。息子が一人珍内におります。いま全部自分で独立して、みんなあちこち、大陸にもおります。大陸で大学は入って、そこで仕事をして。ロシア人の女性と結婚して。みんなですよ。婿さんがロシア人ですとか、嫁さんがとか、仕方ないですよ、どうにもならない。

張：時代が時代だから。

黄：韓国人の女性だからいいわけじゃないです。ロシア人よりひどいのもいっぱいいますから。私たちの目の前で、日本の女性も残っているわけです。夫はなくなっても。そういう人は、韓国語で話すと、私はついていけないもん。ここにもふたりいますよ。純粋な日本人なんですけど、女性がね。日本語はひとつもしゃべらない。韓国語を話すんだったら、わたしたちよりずっと。我々は年配、82・83 歳、そういうのが集まれば日本語で話すことが多いですよ。

張：私たちの世代でも、ロシア人と結婚する人はいっぱいいましたよ。韓国人と結婚できなかった人が、ロシア人の女と結婚して。

黄：ロシア人の女性と結婚して、すると、離婚率が多いんですよ。ロシア人の方は親に反対されてね、目の前で見た事ありますもん。姑ですね、ロシア人の嫁さんの腕の中で亡くなった人も、そういう立派な人もいます。人間はみんな同じですよ。言葉が違うだけで。

一朝鮮人・韓国人と言う意識は若い世代では薄れてしまうんでしょうか？

黄：そうですね、彼らだって、ロシア人の中で暮らしてですね、ロシア人と結婚して、やはり韓国人は韓国人ですからね。いまのうちはねそうだけど、歳をとればね、誇りとか、そうなるんですよ。

張：なってみないとわからないけど、そうなると思う。

黄：ひとりこういうケースがあったんですよ。子供がね、10 歳くらいだったかな、外でロシア人と喧嘩するんですよ。子供だからあるでしょ。そうしたらね、泣きながらね、ロシア人が俺を朝鮮人って馬鹿にしたって・お前それ誇りに思えと、お前は朝鮮人でなくて、ロシア人か、俺は朝鮮人だと言い返してやればいいじゃないかと。いくらあなたがですね、朝鮮人ですとは言わないですよ、日本人なんだから。そりゃあ仕方ありません。何世代かたてばね、孫、ひ孫のあたりがロシア人になるでしょ。ただしね、苗字だけは残るんです。これは変えてくれない。日本でもそうでしょ、ラジオで聞いたんですけど、結婚しても自分の苗字をもっていきたいって、そういう問題あったですね。ロシア人はね、自由なんです。自分の苗字でもいいし、夫の苗字でもいいし、また、夫が妻の苗字でもいいですし。

張：珍内から来た、僕の隣の家でも娘がロシア人と結婚した。ロシア人は韓国の苗字をもらったんです。妻の苗字。バクなんて、ロシア人なのに。

黄：私の友達の子供がね、ロシア人の女性と結婚して、その人の友達の苗字は、チョウ、

女の人はガヴリロワって苗字で、夫の苗字をとって、チョウ・ワレンチンって。

張：珍内でも混ざり子がいたんですよ。母親が日本の方なんだけど、今でも探されないんですよ。その子がロシア人と結婚して、ロシア人の苗字をもらった。イメリャーノフって。おかしいですよ。

黄：ただしね、日本ではどうか分かりませんが、ロシアでは出産証明書とか。そういうのね、父親がファンなら、ファン、チョウならチョウになるでしょ。やっぱり子供はファンならファン、チョウならチョウになっているでしょ。結婚した、そしたらね、夫の苗字に変えた、どっかかって、証明のときはね、夫の苗字のキンになっている。ここきて、旅券ビザ延期するのにね、どうしてそうなっているの、あなたのお父さんはファンだと。なんでキンなんだと。嫁にいったらそうだって言っても、信用しないんですよ。結婚証明書ってあるんです。それをここもって来て、翻訳して。

張：韓国の法律は嫁に行ったら、自分の苗字はそのまんまだから。日本は違うでしょ、主人の苗字になる。

黄：ですけど、いまはまた、自分の苗字にするように、国会でどうするか知りませんが。まあ、今の新政権、鳩山総理がどうするか。16日にはもうあれですけど。ニュースは全部見ているんです。

—ロシア名はあったんですか？

サハリンのソ連時代も、ずっとファンです。ロシア名ってのは、一緒に仕事をしている場合に、面倒くさいから、お前はオーリャ、サーシャみたいな、あだ名みたいなものです。でも、それがずーっと残るんです。でも、書類には残りません。

張：ワーシャとか、コーリャとか呼んだ方が、あの人たちは忘れないんだよ。外国の名前を言ってもすぐに忘れちゃうんだよ。

黄：ですから、人事課に行くと、韓国の名前です。コーリャなんて書かない。

—ダーチャはどうやって手に入れるんですか？

黄：ダーチャの割り当ては、差別はないですよ。空いたところがあればそこで畑をつくれればいいんです。今現在は自由に土地をつくれるんです。申請すればいいんです。そしたら税金をかけるんです。非常に少ない税金。いまでは、もうダーチャって言っても、若い人間たちはもうしないですよ。我々いたときはそこに住みながら。いまも若い人でそういう人もいますよ。まあだいぶ少ない。草ぼうぼうで。

—こちらに来てからも、畑仕事をしようと思いませんか？

張：ここでダーチャしようなんて思わないですよ。ここは物が余り放題だから。必要はないです。でも、韓国の方がおいしくないんです。魚は特に、寒いところの方がおいしいです。野菜でもそうです。ネギあたりはここでは硬いんです。サハリンでは軟いんです。おいしんですよ。果物もそうですよ。梨なんてこののはイモみみたいなもんですよ。今年は米と果物が豊作らしいです。かわいそうなのは農家の人です。売れないでしょ、そんなに作っても。気の毒ですね。日本でもありますね。

No.16 金鐘聲(김 중성 キム・アレクサンドロビッチ)

1935年 真岡(ホルムスク)生

No.17 張永福 1933年12月30日 小田州生

(聞き手:倉田由佳・中山大将)

もう日本語もやっぱしね、私は昭和10年です、昭和10年度生まれですからね。敗戦のときは10歳くらいにしかなくてなかったから、そんなに達者ではないです。日本の学校を4年生まであがりました。4年生の2学期まで。

—お名前は？

金、韓国の名前では、キム・ジョンソンと言います。きんしょうせい、と言いますね。日本の名前だと。きむしょうせいとなりますね。こうなって、声という字を書きますね。たぶん。こう、こう。きん・しょうせいと申します。

—ロシア語のお名前はありますか？

ロシア語の名前は、キム・アレクサンドロビッチと言っていました。ロシアの国で、しばらく、やっぱり職場で働きましたから。

—サハリンのどちらに住んでいたんですか？

サハリンは、あのユジノサハリンスクですね。日本時代は、豊原と言います。樺太府¹³豊原町(まち)。豊原町にいましたし、その前は、生まれた時は、私はどこで生まれたかという、故郷は、ホルムスクという真岡ですね。真岡で生まれました。親について歩きながら、んー、珍内町(まち)というところですね。珍内町、三郷村(さんごうむら)、というところですね。そこで、小学校一年生を始めました。

—そこは他にも朝鮮人の方がいる村だったんですか？

朝鮮人は私たちは、一軒しかいなかったですね。その村にはね。珍内町には、20kmくらい離れた所には、珍内には朝鮮人の方がいました。

—ご両親はどんなお仕事をしていたんですか？

はじめは、私が学校終わってから、学校終わって、そうですね、

—あ、ご両親です。родители です。

あ、родители？お父さんたちですね。お父さんは、労働者でしたね。

—炭鉱で働いていたんですか？

炭鉱でもなかったですね。その、個人の家を持ってからね、日本人の人と隣にいながら、タマイさんという人と、農業も一緒にやりましたし、農業の方が、農業の方で入りました。

—それは珍内だったんですか？

珍内で。その前には、私は小さかったから、そんなに記憶がないですね。

—自分の土地だったんですか？

そうそう。そうです。自分の畑がありました。その詳しく言ってあげればね、私のなんですか、父は、徴用で行ったんでないですからね、

—では自分の意思で来たんですか？

¹³ 1943年の樺太内地編入以降は、「樺太州」という名称が存在した。

そう、自分で。行きましたね。したから、そこ行きました。働いてから。徴用とはそんな関係なかったですね。

—お父さんは、何か仕事があるだろうと思って、樺太に来たのでしょうか？

樺太に来ましたね。

—お父さんは元々は韓国のどの地方の出身だったんですか？

ああ、韓国。韓国はね、韓国は、江原道。강원도 (カンウォンド)、江原道言ったら、この辺ですね。江原道生まれです。

—兄弟はいらしたんですか？

兄弟は六人兄弟でした。お姉さんがふたり、弟がふたり。妹がひとり。六人なのに、三人はいなくなりまして、三人だけになりました。

—後の方は今はどちらにお住まいですか？

後の方は、サハリンにいます。弟はサハリンにいて、妹は韓国の인천(インチョン)にいます。出て来ています。

—弟さんはユジノサハリンスクにお住まいですか？

弟、はい。今でも住んでいます。

—珍内の三郷にいたのは、終戦までですか？

そう、終戦までいました。それから、終戦になって、珍内町に出ましたね。そうですね、戦争の、ちょうど、戦争の45年の8月ごろに、どこにいたかという、珍内から、ヤウスっていう、患須取の下、鶴城の下に円度(えんどう)というところがあります。円度。鶴城行く前に、えんどうという小さい町がありました。円度町。円度がいま、なんつったかな。ロシア語で。記憶がないですね。そこにいまして、8月15日に敗戦が終わりましたね。終わったから、珍内まで出ました。

—戦争終わってから、また珍内にもどったのですか？

戦争終わってから珍内にもどりました。そこに、円度、鶴城の下、一年もいられなかったですね。農業やって、そこに7軒だか、8軒だか、そこに行きましたね。バラックで言うか、それ作ってね。終戦過ぎてから、うちのお母さんが、体が痛くなって。みんな、珍内から行った人ですか。珍内にまた、戻りましたですね。

—円度に行ったのは、なぜですか？ソ連軍が来ると思ったんですか？

そうではないですね、それまでは、日本が負けるか、アメリカとやって、あの、Вторая мировая война、第二次大戦ですね。負けるか、負けいないか、私は小さかったし、そんな戦争までは考えていなかったですね。戦争が負けたとして、ロシア人が来たから、私たちはまた珍内に戻りました。

—小さいからわからないでしょうけど、円度にはロシア人に強制的に連れて行かれたというわけではないですよ？

自分たちで町に戻った。8月に行ったんだかね。8月前に行きました。それは、春にきっと行きましたね。春に行って、なんしたかったら、トウキビなんか植えて、家を建てたりして、村に家を。丸太を運んで来てから、切ってから、丸太を切って、皮をむいて準備しての。山の中に入って、私は、お父さんに手伝ってあげたときに、ロシア人の海軍が来ました。それで戦争が終わったとわかりました。

—それでは、直接ロシアの軍人と遭遇したわけですね。

会いましたですね。会いました。そして、もうそれをもって、終わりましたと思って、また親と珍内に出ましたです。

—そのときにお父さんには、韓国にもどるという考えはあったんでしょうか？

そのときはそこまで考えはできませんでしたね。珍内まで戻って、韓国までもどるか。そのかわり、僕は長男坊として、長男としていつも言いましたですよ、「お前の故郷は、韓国の江原道だ」と。それで村の名前まで行ってくれましたね。名前、それから、家の何番何号に住んでいたと。そう本籍を。本籍っちゅうんですか？それを教えてくれました。そして、私がここに戻った時に、90年度に韓国に来た時に、현대（現代）っていうですか？あの、大きい。あのその、会社の、その、そこに関係のある人ですね、関係者が私を連れて、江原道まで行きました。行って、そのカンウォンドに行ったら、新聞社ですね、そこへ行って、私たちの住所を言って、そこでなんと答えを出してくれたかという、50年度、1950年度の6月15日に、南と、北の戦争で、証明書が全部焼けてしまって、なくなっちゃったと、火事があって、その江原道の国境ですか、あそこはね。北鮮とのね。そして、そこで、新聞記者というんですか、新聞記者を出してくれて。出してくれて、三人でこの、お父さんが住んでいた、そこへ行きました。住所を探して。そして行ったら、その隣の人がきつとこらへんに、私たちの、636 だから、私たちの家は、お父さんたちの家は636番と、덕실리(トクシッリ)というところがありました。トクシッリ。こうですね、사천 (サチュウン)、江原道、カンウォンド、사천면 (サチュウンミョン)、トクシッリ636番地だと言いましたね。そう探していたら、もう家はなくなりまして。それから、隣の人が出てきてから、「きつとこの家だ」と。ここはもう潰されて壊されてないんですと。それで、戻ってきまして、誰も探されなかったんです。

—お父さん側の親戚の方はそこにはお住まいではなかったんですか？

お父さんの親戚は、どっかにいるんですけど、探されなかったです。そのときは私は子供だったし、お父さんの、どうですか、お祖父さんの名前でもわかっていたら、よかったですけどね、名前を聞いておかなかったし、お父さんの名前も聞いておかれなかったし、だから、全然探されなかったです。

—お父さんはひとりで樺太へ渡ったんですか？

それから、行った後、うちのお母さんの女房の、自分の女房を呼び出しましたですね。そして、そこへ来て、生まれた私が、サハリンですね。

—樺太には親戚はいたんですか？

います、いっぱいいます。わたしはしたから、韓国から出た人間でもないし、朝鮮の人間でもないし、樺太生まれです。樺太の、ホルムスク、あのときは真岡と言いましたね。北真岡。

—お母さんの親戚は韓国にいるんですか？

お母さんは京城(けいじょう)にすんでいましたね。1942年度に私が、こう京城に来たことがあります。お母さんと一緒に、弟と一緒にね。それで、その家まで行って、一ヶ月くらい住んで、またサハリンへ帰りました。樺太に帰りました。そのとき。その住所、よくわかんなくてね。ソウルのね、なんたっかな、ハワンシン、とか、なんかそんなところにいましたね。いま、もう全部町が、戦争の時に全部つぶれてから、もう新しい町は全然探されなかったです。そのとき私は7歳だったです。そのときの私の記憶が、母が、母さんのおじいさんの、何

ですか、きっと私の考えでは、お金持だったと思いますね。なんしてか、って言ったらおおきな家だったし、外に番兵も立っていたしね。それから、タバコ工場がありました。タバコ工場の社長だか、なんかやりましたよ。お母さんの妹は、学校で、日本の学校で先生をやっていましたね。それから、お母さんの弟は、そのタバコ工場の会社の、帳場をやっていました。そして、今の私の考えで、きっと金持ちだなあ、とそんな感じはありましたね。

—お父さんの家は、農家だったわけですね。

そう、お父さんの家は農家ですね。

—徴用でサハリンへ来た朝鮮人と、自分のように自分の意思で来た朝鮮人の子供とでは、意識が違うと思ったことはありますか？

私はそんな、考えがなかったですね。それまで考えもしなかったし。そしてまた、あの徴用で行った人は、あの、さっきのカンさんのように、どんな苦勞したのか知れませんが、私たちはもう、そうですね、日本の人と一緒に横に住んでいながらね、住んでから、そんな区別は。学校ではやっぱしね、やっぱし、学校とかは、それは何と言うか、学生の生徒のそのときの、あの、考えですから、なに、お前、朝鮮人とか、朝鮮ナツパとか、言いましたけど、それまでは、そんなにまでは、私たちは、お前ら日本人だとか、チョッパリだとか、言いましたね。そんな、心、そんなに感じはしなかったです。したけど、やっぱし、そんな区別はありましたね。ありましたね、やっぱし。私はそう認識しています。

—日本語は小学校で覚えたんですか？

小学校で。そして、そのときは、もっと、いつも、日本の学生を相手して、日本の方たちと会ったから日本語、もっと、ちょっと言いましたけど、いまは、もう、それから 50 年という時代で、流れて行ってね、忘れましたが。学校あるいたから、漢字もちょっと書いたし、片仮名、平仮名も全部。そして、そしたら、今では日本語は全然できないですけど、忘れちゃったですね。

—ロシア語を勉強し始めたのはいつからですか？

ロシア語を始めたのが 46 年度から、朝鮮学校ができましたから。珍内からはじまって、ユジノサハリンスクで学校を終わりました。そのときは 8 年生で、小学校 8 年生までやりました。そのあと、夜間学校と言いましたか、晩にやっていた学校も、それも私は終わりました。

それは昼にあるいて、夜間の学校をそれを 11 年生まで。そうになりました。ロシアの学校で私が、その珍内にいるときは、ロシアの学校は歩かなかったです。朝鮮の学校を終わりましたね。そして、ユジノサハリンスク、どうやら、8 年生を終わった後、朝鮮学校 8 年生を終わったあと、今度はロシア学校へ行きました。ね、ロシア学校。したから、8 年になってから、ロシアの夜間学校あるいていました。ここでも、ロシアのありました。科目って言うのか、ロシアの先生が来てから、ロシア語を教えてくださいました。一緒にまぎって。ロシアの先生に習って。韓国人だったんですけど、学生は韓国人、先生はロシア人、みんな大陸(だいろく)から出てきた、ロシア人が、私たちに勉強させた。

—大陸から来た朝鮮人の人がロシア語を教えていたんですか？

中央アジアですね。中央アジアから来た人が、あの人たちが、ロシア語を教えましたね。ロシア語を教える人もいましたし、また、ロシア人が、ロシア民族がまだ、教えることもありました。ロシア語の学校で。ロシア語を教えてくださいました。

—朝鮮人の学校というのは、全員朝鮮人で、日本人はいないんですか？

そのときは、もう、ほとんど日本人はいなかったですね。日本人は、47・8年にみんな、なんですか、帰国したんですか。そのときは、私たちの考えでは、まだ若かったから、学生だから、日本人に対して、日本人は靴までもっていきましたね。私たちは、パスポートはね、「国籍」というんですか？国籍はね、日本時代は日本の国籍を持っていましたね。もちろん。それから、ロシア人が来てからは、私たちは、無国籍というんですか。そのあとは、北朝鮮の宣伝でもって、北朝鮮の国籍を持ちました。

—北朝鮮の国籍を取得したのは何年頃ですか？

それが、それがね、60年の頃ですね。61年度、58年度。わたしが60何年にロシアの国籍を出しましたから。ロシアの国籍を出さなば、働くことも、不便でしたし。そして、大学行くのも不便でしたし。それから、もう、職場へ行って、いいポストをもらえなかったしね、そんなあれがあって。北朝鮮の国籍をとったのは、61年か62年頃。はっきりしたことは、私記憶にないですね62年度くらいでした。いましたから、62年度にレニングラードに行っていましたから。レニングラードに行って、モスクワに行って、67・8年度には、私はきつと、70年度位になって、きつとロシアの国籍を出しましたね。そう思います。はっきりしたことは覚えていません。

—北朝鮮の国籍をとったきっかけは何ですか？

それはね、あのときは、ロシアの国が共産党でしたね。北朝鮮も同じ、共産党の国でしたですから、北朝鮮から、あのときはね、宣伝者たちがね、ものすごく入って来たんですよ。そして、北の国籍を出したら、大学も勉強させてあげる、いろいろしたげると。そして、そこに対して、宣伝に乗った人もいるしね、それから、やっぱり、そんな国籍だ、出して、なんかあるかな、と。そんな考えもあったかもしれませんが。そんな、私は考えはなかったですけど、夢中でもって考えはなかったですけど、そんな考えがちょっと、あったかな、と思います。

—北朝鮮へ移住しようと思ったことはありますか？

全然なかった。私は、1989年に出張でたことがあります。団体でもって。23人の団体でもって。あのとき、もう私は朝鮮語も達者でなかったけど、ロシア語は、できたですから、あの、団体でもって通訳をしました。そして、その行った後、私がある北朝鮮に行くと、そんなあれでもって、私の娘がモスクワ大学で勉強しました。そして、ちょっと体が痛くなって、すぐ、北朝鮮で、出してくれて、そこでもって、私の妻といっしょに行ってきたことがあります。招待状を出してくれて、そしたら私も、いろいろな話がありましたね。いろいろな話が来てから、あなたの状態ちゅうんですか、あなたは仕事もできるし、と。でも、そんな考えは私は全然なかったですけどね。ロシアの国でも、いい職場で働いていましたから。

—どんな仕事をなさっていたんですか？

私のはじめは、すぐ若い時は、青年の時は、結婚もしていないときは、運転手、車の運転手をしていました。そのあとからは、あの、なんですか、国の、会社ですね。大学を出たんでないんですから。11年生ですから。中学と同じもんですからね。中学とちょっと違う。専門学校ですね。それくらいの程度ですね。信用してくれて、そこで、その大きい、なんちゅうかな、わかりますか？私はそこでナンバー1をやりました。そこはね、なんちゅうんですか、日本語では、鳥の工場ですか？プロイラー。鳥の会社です。そこに、800人くらい働いていました。サハリンで一番大きい会社ですね。ユジノサハリンスク。今も、あります。その会社へ、運

転手で入りましたんですけど、運転手から下ろされて、今度は、それをやってくれと。そこでやりました。そこでやって、そこで年金をもらうようになってからは、出るようになりました。出るな、出るな、なして出るかと。私のその会社の人が樺太の知事になりました。後で。僕にいつもかわいがってくれるんです。そしてそこで、私が、しばらく、なんですか、生産するの、全部町に、樺太州、**область**(州)、卵が、私が、そんなところ行かしたり、オハ。全部店屋は全部、ユジノサハリンスクには、68 の、68 件の店屋が全部私のところから、そうやってもらって、そういうところで私は働きましたから。そして、モスクワとか、タシケントとか、出張で、卵を入れる箱とかみんな、出張行ってから、持って行ってから、そのときはロシア語がわかりますから、そうこう、領収書、お金の、全部預かって。もう僕が持って歩きました。それに職場のハンコだけあって、僕のサインさえあれば、空港に行ってもそれを積んでから、やったり、出張あるきましてから、85 年度になって私が、年金をもらって、**директор** (社長) は、市長、じゃなくて、樺太知事になりましたね、なって、そこから私に株式会社をあげました。4 人でもって。コペラーチア、コペラーチアは、株式ですね。そんなもんです。日本語で。有限会社。4 人であげました。4 人であげて、お金をちょっと儲けて、全部払ってやって、そこで社長になって、会長になりました。そして、帰国するまでそこで働いていて、そのときは日本の大阪の西宮というこの町に、ビーコムという会社がありました。そこと、貿易をやりましたし、韓国のピッコム、釜山にある、ボモンとも貿易をやって、そうしました。そうしたいろいろな仕事をしました。で、来る時まで働いていて、いまは貿易は子供たちに継いでやめさせて、こう、いま息子一人、娘ひとりですね。息子は、ロシアの大学を出て、それから、二つ出ましたね。娘は、専門学校でましたね。

——ユジノサハリンスクにある学校ですか？

ウラジオストクの、法律の、あの、調べるの、刑事たちが調べる。それを出ました。そしてそれからまだ、もう一人は、**торговли**(商業)二つ出ました。息子。そいで、ここに来る時、あんまり大仕事をやれば駄目だから、その、お前たち一つずつ持って、ふたつを立てました。レストラン、って言うんですか？焼き肉とかね。息子はそれをやったしね。娘は違うところで、やりました。そして私はここへ来ました。今も、サハリンのその、レストランを経営している。建物をやって、そこでもって、**директор** (社長) をやっています。娘も、**директор** (社長) をやっています。日本の人が来たら、とくここに来るんですけどね。**Лугабое**。書きますね。ロシアの字で。こうですね。ここで働いています。ここにカフェってありますね。村のね、名前です。村の名前をもって、カフェをたてます。新しいカフェの。そこで働いています。これを日本語で言うと、**Лугабое** っていうと「草野」って意味です。日本時代の草野です。

—仕事も成功していたのに、どうして韓国へ帰国しようと思ったのですか？

私はそんなにも成功とも言わない。そんなんですけど、経済的に困ったことはなかったですね。全然とは言われなかったけど、金持ちとは言われなかったけどね、不便ではなかったですよ。私は。

それもね、こう、ね、チェースネ(ロシア語)、ってわかりますね、チェースネ・ルーバネ。もう、ここへもう、来てくたくたにね、飛び込まなかったですよ、私はね。私がここに来るっていったら、みんなびっくりしました。何のために、来る。したのにね、2000 年ですね、永住帰国なったときね、こんなこと言えばいいんだか、知らないですけど、はじめだからね、話は来る来る、帰る帰るって、話はありましたけどね、そこで、全部寵をもって子供を連れて、ここ来て、どんな状態に来るか知らない、どうなるるか知らない、みんながね、あれしました、考えもなかった。迷いましたね。したら、私は 35 年度生まれですから、仲間に入らなかったん

ですよ。一世でなかった。一世でないんだ、二世ですからね。したけど、したけど、私、あれがありました。キムさん行きたいか、と。行きたいば、行かしてやると。して、私考えてみたら、家もくれるんだし、アパートもくれるんだし、もう、こっちにもどってくれば、こっちに家もあるんだし、そんな意味で来ました。正直に言えばね。そんな意味で。ここに、もう、それが第一でしたし、第二は、なんですか、親の故郷ですね。親の故郷へ一回行ってみたいし、そんな考えもありました。そんな意味でもって来て、いま十年くらいになります。それ私の、心からの正直な話です。そして、そんな考えで来ました。

一年に何回くらいサハリンに行ったりしますか？

私は、一年に一回はかならず行きますね。いまも行ってきまして。それは自分の、子供たちがいるから、行ってみたいし、どう働いているか、私が残してきた会社がどうなっているか、それも見たいし、そんな意味で。まあ、会社ではないですけどね、今は。元は、大きな会社。有限会社でしたけど、いまはもう、兄弟がひとりずつ、建物を持ってから、それも行ってみたいし。そこも 50・60 年住んでるところでしょう、やっぱりね。昭和 45 年に、戦争が終わりましたから、私が 10 歳。もう 74・75 歳だから、55 年もそこに住んでいたところですからね、やっぱりね。そんな意味で行ってきまして。別な意味はないです。

—お孫さんたちとは離れて暮らしていますが、こちらに帰国してよかったと思いますか？

ひとつはいいしね、やっぱり、いいものもあるし、不便なものもありますね。子供たち置いてきたからあれだし、子供たちも来るもできないし、来るもできないよか、いろいろな関係がやっぱりありますね。来るもできないし、来る考えもできないですよ。やっぱりね、ロシア人とおなじもんですから、やっぱりね、若い奴らだからそうです。ソ連になってから、生まれてから。

—お子さんは生まれたときからソ連国籍なのですか？

そのときはもう、生まれたらすぐ、ソ連国籍です。

—国籍取得について悩む時期はありましたか？

そう、私ははじめはね、無国籍ですからね、それから、北朝鮮の国籍、無国籍。いまは、韓国の国籍。

—2000 年に移住したのと同時に国籍も変わったのですか？

そう、そう。

—ソ連時代から永らく働いていらしたわけですが、ロシアから年金は支給されるんですか？

出ます。出ます。その、共産党時代は、私たちのころ、年金は貰いましたけど、120 ルーブル、それはトップです。労働者としては、それはトップです。通帳つくって、私の通帳さ入れてくれます。それで一年に一回行ってから、それをもらうんです。

—ここに移住する前に韓国籍になるのですか？それとも韓国に入ってから韓国籍になるのですか？

韓国になってから、韓国籍に。すぐにくれましたよ。私は三カ月の間に、すぐにもらえたですね。

—帰国の話は誰から持ちかけられたのですか？

それは、そこに、朝鮮のなんですか、韓国協会ですね。あるんですね。韓国統一協会。そこで全部あれしますよ、チェックしていますからね。ほしたら、そこから、金さん、お前行く人が少ないから、来ないか、足りないんだ、空いてましたから。空いてました。みんな行きたい行きたいっていいですけど、口だけです。みんな実際行けとなったら、全部。こんな考えがありました。してから、いまはいいこと言ってんですけどね。そんなことがありました。したから、若いやつらが、私が、一応、若い方だと言うんですね。僕よか若い人もいる

にはいるけど、もう私たちは若い連中に入りますね。私この、600人ですね。私たち若い人は、全部、夫婦と来ましてですね。全部夫婦です。すべて、全部は夫婦になってきてます。一緒になってからこっちに来ました。別にここに来るために一緒になった人たちは、相当、苦勞していますね。きっと、私たちの考えではそうです。苦勞していると思いますね。残念です。

—ここでの生活の中で、韓国人ではあるけど、育ったのはサハリンだなど感じる時はありますか？

そんな考えは、僕は別にしないですね。そんな考えはないです。ただもう、このもう年がこんなに時間ちゆうんですか、時期がこんなに早く過ぎて行ったのか、それが残念ですね。70年間こんなに早く、過ぎていったんだか。

—周辺住民との交流はありますか？

話はするけど、私はそんなに出て行ったりはしないです。私たちのグループがいますからね。私の同級生といふかな、そんな人たちとつきあったり、うん、そんなことしますね。年がそんなに、そんなに見方が違いますね。私たちと。やっぱしね。

—どのような点に違いを感じますか？

どういふかな。年をとった人は経験があるんでしょう。やっぱし、そういう人たちは経験があって、その人たちから習うものももっと、あるのだな、と思いますね。そんなに、協力っていうんですか、こう、どうですか。今の時代を見てから、判断しないとだめですね。そうです。

—たとえば、今の韓国社会を見て、ロシアの方がいいと思う部分はありますか？

今までね、ロシア共産党時代ですね、スターリン時代から、フルシチョフ、ゴルバチョフで終わりましたがね、その時代が私たちの生活のトップです。生活はいかったし、経済的にも良かったし、働いたら、なんも心配はなかったです。なんも心配がなかったです。ペレストロイカが来てから、経済的に、全然、もう、悪くなったし。それからそのときは、経済的には、なんでもなかったけど、民族の **дискриминация**(差別)、労働者たちは自分の勉強したものが無いから、口でもって、馬鹿にして、**кореец**(朝鮮人)だといふけど。また社長は、**директор** は、話はしないですけど、いばって表して、お前は朝鮮人でねえか、お前は日本人でねえか、お前はアジア人でねえか、と。入っていたら。仕事のために入って行ったり、なんでこの朝鮮人、そんな責任を持っているのか、と、それを証明書も見ないで。こうやって、ちょっといばって。ロシア人は、人間はいい人間です。民族は、いい人間です。したけど、ロシア人の国です。それは覚悟して、私たちは。絶対これは、ロシア人は、ロシアの国は、そうですね。主人がいないんですね。韓国とか日本行ったら、私この5月に日本に行ってきました。日本人もよく会いましたけど、そこへ行ったらもう **порядок**(秩序)。どんなに、**порядок** ありますか。韓国も私、行ったことのないところないですよ。あれは、経済の方でも、国民が住むのにも、ほんとにきちんといい国です。私の考えではそう考えています。ものすごい良い国です。人間の、人の、知識というのはないかもしれないけど、**культура**(文化)、ちょっと私の考えでは、はずれていますが、**европейский**(ヨーロッパの)文化がもっと高いと思いますね。したけど、こっちは文化は少ないけれど、人間はみんな熱心に働いて、もう、そんないろいろな考えが私には入ります。音楽とか、チャイコフスキーとか、そんな方面の文化、科学技術とか、そんな方面とか、服装とかね。したけど、その **культура** が、胸の中まで、心が **культура** でなかったら、だめですね。そう考えています。私は。個人の考えです。私も日本時代に、友達も死んだしね。あのときは昭和14年、昭和15年、敗戦して、日本の

人は間違いですね。いまは、日本はちょっと。私がね、4・5年前に、日本に行って働きました。稚内。

—昔の小学校時代一緒だった日本人の同級生とは、いまでも連絡をとったりしていますか？

いやあ、ひとりを探したんですけど、全然探されません。タマイユキオさん。その人も35年生まれでね。横に住んでいて。その人は、なつかしい。涙がでるくらいですよ。三郷村小学校、国民学校。一年生から、そこ終わりました。僕の隣にタマイさんって人が店屋をもって、商店でやりました。個人の家で、一軒の家で。ふっついて。タマイユキオという人を一回探したいですよ。あってみたい。いやあ、ほんとに見つけてくれれば。その人が生きてるんだかな。もう年が74歳ですからね。ユキちゃん、ユキちゃんって言って、喧嘩も昔ね、よくふっついて歩いたし。

—その頃は、タマイさんはキムさんのことを、なんて呼んだのですか？

タケシって。

—日本の苗字は何と言うんですか？

日本の苗字は持たないでやらね。あの円度来たときね。日本の苗字を持たないとだめだとして、珍内から、日本の苗字を持って持てと言われてからね、なんたっけな、ムラオミとかハラオミとかって、苗字を一時持ちました。持ちましたけど。それは、僕は使いもしなかったし、言いもしなかった。そう、三郷にいたとき。北海道に行っていたんだか。そこのあのね、あの、タマイユキオの姉さんの旦那さんが、ハタケヤマという人でした。日本の兵隊から来てから、兵長。兵長もってから、私たちに体操とか、そういうことしてくれたし¹⁴。

ハタケヤマと言ったんだけどね、結婚してから、その人もタマイになりましたよ。

—学校でもタケシと呼ばれていたのですか？

いや、学校ではね、キム・ショウセイって呼ばれていましたね。したけど、みんなはタケシって呼んでいました。

—日本人が1945年以降引き揚げて行くのを見て感じたことはありますか？

そのときはね、そのときは、もう歳が子供の時ですからね、考えも何もありませんね。

(張永福＝ナカノ氏も参加)

この人もね、私たちの珍内の、一緒に住んでいたの。前、中通で一緒に住んでいたの。僕よか、ひとつ年上ですからね、日本語が私よりも達者ですよ。ね、この人の苗字は、ナカノさんと言って、ナカノさんですよ。やはり、この人たちは珍内から、まっすぐ、来ました。私は豊原から来ました。

—子供のころ家庭では、ハングルをしゃべっていましたか？

金:そうですね、やっぱりそうですね。

張:したけど、僕たちは、あれですよ。韓国語も上手でないですよ。日本人とおんなじなんだ。

金:今はもう、もう、韓国語も、そうだし、日本語もそうだし、残ったのはロシア語くらいなものだね。ちょっと達者になるのはね。

金:家では、女房とは、日本語ですね。

—子供のころ、お父さんお母さんは何語でしゃべっていましたか？

金:お父さんとお母さんと？それは、韓国語ですね。私たちは日本語で答えてあげますし、お父さんお母さんは、韓国語で。お父さんお母さんは、やっぱり日本語が、達者でなかったですね。僕よか、日本の学校

¹⁴ 在郷軍人のこと。

何年だ。お前、6年生か？一歳多いから。

張：6年で戦争に負けたんだ。

金：5年生終わって2カ月して。2学期。5年の2学期、6年の2学期で終わったんだ。私は5年生で終わったんだ。歳はお前がおれより一歳上だべ？

—韓国語は、お父さんお母さんの会話と、それから戦後にソ連が作った学校で覚えたんですね？

金：そこで、朝鮮語を初めて教えてもらいましたね。珍内で一緒の学校をあるきました。一緒に。

張：同じ学校だった。

—先ほどのあいさつ(握手)の仕方はロシア式ですよ？

張：ああ、ロシア式ですね。

—張さんは、生まれが一年お早いわけですね。

金：そう、一年上ですね。34年度生まれです。そうだべ？僕が35年だから？珍内で隣に住んでいました。

張：うん、隣に。

金：向かいに住んでた。

張：向かいに住んでた。

—それは戦争の前からですか？

張：そうです。三郷にいたときから？

金：三郷にいたときでなくて、三郷にいたときは、この人たちは、親たちは三郷に遊びに来ましたね。

張：僕たちは、このひとたちが三郷にいたときは、僕たちは、小田州(オダス)にいたんだ。珍内から12km離れた。小田州。

金：オダスっていったら、今のパールスナイというところですね。久春内との間にありましたね。

—金さんははじめは三郷にいらして、それから円度に疎開に行かれるわけですね？

金：円度に疎開に行きましたね。疎開ではないけど、歩いて行きました。したけど、ナカノさんは珍内の町にそのまま住んでいたんですよ。そして、それから私たち円度から、戻ってから、会いましたね。

—会話するときは何語でなさっていらっしゃるんですか？

張：ロシア語だか、韓国語だか、日本語といろいろ混ぜて。

—安山には帰国なさったのはいつですか？

張：2000年度ですね。僕はこの人たちより早く来たんだよ。

金：2月だよ？

張：2月に来たんだ。

金：僕は5月に来ました。こっちは速い人は、2月にしました。3ヶ月くらい早かった。

—張さんのお父さんも韓国から樺太へ働きに来たんですか？

張：ええ、僕の父さんは、東京で関東大震災あったでしょ？そのときに、いてから、樺太に渡ったんだ。

金：ここにきている人は、ほとんど日本語をしゃべれますからね。もう、達者ではないですけど、みんなしゃべれますよ。この人なんて私より歳が多いから、もっと達者でしょ。やっぱね、学校で習った日本語もそれなりに記憶に残りますからね。

—張さんのお父さんは、どこの出身ですか？

張：大邱、慶尚北道。テグ。日本語でタイキユウ。

金：ああ、そうなの。

—いま、日本語でもテグで通じます。

張：そうですね。学校で習ったときはタイキユウって。

—お父さんが東京ではどんなことをしていたのかご存知ですか？

張：父さんかい？重労働でしょ。震災の後のことはよくわからないですね。詳しいことは聞かなかったけど。

—樺太に渡ったのは何年頃でしょうか？

張：それ、わかりませんね、僕。すぐ渡ったんだが、もう少しそこで仕事したんだか、わからないけどね。僕には詳しいことはわからない。

—お父さんは独身で樺太へ行ったんですか？

張：ええ。

—張さんは樺太生まれですか？

張：僕も樺太生まれ。樺太の珍内生まれ。

金：もう、みんなそこですよ。多いですね、やっぱり、珍内からきた人は。

張：珍内から来た人は20人くらいいるでしょうね。

金：小さい町としてからはね、来た人は多いでしょう。

張：珍内という町は、戦後一番人口の多い時に、1万人だった。一時だけ。そのあとは、人口が少なくなっている。

金：何年ごろに、日本の人は帰国した？

張：そうだね46年度か47年度から始まって、48年度くらいに終わったな。

—珍内で最後まで残っていた日本人がどんな人だったのか、覚えていらっしゃいますか？

張：僕、あの名簿がありますよ。珍内から来た人の。札幌にもいるし、僕の同級生もいるし。宮城県、東京にもオダスに暮らした人ね。珍内のすぐそばの。東京にいますよ。ええ、もうしょっちゅう、電話でしゃべりますよ。

金：円度はロシア語でなんつったっけ？

張：円度、コルトヤール。

金：コルトヤール。あの、鶴城の下が、コルトヤールですよ。村ですよ、小さな。

張：鶴城が少し大きかったね。

—さっき、おっしゃった、名簿というのは、何の名簿ですか？

張：小学校でなくて、珍内に住んでいる、いた人の名簿です。

—張さんとは朝鮮人学校も一緒だったんですか？

金：朝鮮人学校一緒にあがりました。珍内でね。あの、そして、46年度にね、私たちが珍内から豊原に出ました。一番初めて出ました。みんな出なかった。うちの父さんは考えてから、町に出ないとだめだと。一番、早くに珍内から豊原へと出ましたね。この人は今まで珍内にいたし、僕は豊原にいました。豊原の学校を歩いて。この人は、珍内です。

—その頃は、自由に移動はできたのですか？

金：自由にあるきました。したけどね、あの、自由にとは言われたいですね。どうしたら、国籍を、北朝鮮の国籍を持っていたからね、共産党時代は、できなかつた。あれがありましたから、法律がありましたから。それも人によって、そこに住んでいる人間だから、スパイでもないんだし、悪いことしたんでもない、したけど、そうやって、特別悪くした人たちがいます。ロシア人が。連れてって、罰金を出されたり、もうあーだ、こーだと、言われました。

—珍内から豊原に出たときはまだ自由だったのですか？

金：それは自由でしたね、そっから、そこまでは、今でいえば、200km、80 里ですね、日本で言うと。200km くらいの距離にありましたから。引っ越すときはね、それはもう、晩に、荷台を、アメリカンスキーのね、積んで晩に。政府に行って、役場に行ってから、それを разрешить (許可)、をもらったのではないですね。

—豊原に行ってから、ソ連政府から何か言われなかつたのですか？

金：その頃には、豊原にも朝鮮人がいっぱいいたし、日本人もいっぱいいたし、誰が誰だかわかんないですよ。

—それが 45 年の何月だったか覚えていますか？

金：それがね、夏だったですね。7 月だったのかな。46 年の 7 月か 8 月だったですね。はっきりしたことは覚えていないですね。あつたかあつたですよ。日本時代、珍内はよかつたですよ。住むのに。日本人はほんとうによかつたですよ。ものすごく。いかつたです。住むのには。本当に住むのには。子供達には。

—46 年から、日本人がいなくなって、代わりにソ連人が入ってきたんですよ？

金：覚えていますよ。よく見えますから。日本人の青年たちがね、どうこうしたら、ロシア人ば叩いたり、いろんなことをしましたよ。日本人の学生が、学生といっても、中学歩あるいてからね、もう、線入って、中学 1 年、中学 2 年でありましたね。ロシア人つかまえたら、殴って帰ってましたよ。そのころ、ロシア人はまだ学校建ててなかつたですから。もう、悪だくみして、いろんなことをやりました。

—そのとき、朝鮮人の学生も一緒にやったのですか？

日本人と一緒にね。そんなに日本人と私たちは一緒だったですよ。政府の方では、дискриминация (差別)、あつたかもしれないけど。国民たちは、何も。でも、国民たちも、悪い奴は、やっぱね、いるし、いい人もいるし、そんなもんですよ。

—お父さんはなんで自分たちは帰れないのだからって残念がっていましたか？

やっぱし、私たちは、学生として何もわからなかつたから、何も感じなかつたけど、お父さんたちは、やっぱし、お父さんたちやお祖父さんたちは、もっと詳しい考えがありましたね。ものすごい、考えがありました、あつたと思います。何してかたら、日本の植民地になってから、36 年の間に、日本の国のために働きましたですね、それは一緒になって、日本の国籍を持ってから、戦争が終わって、日本の政府は、日本の国民を連れて行って、韓国人、朝鮮人はそこにおいて、それから、ロシア人の дискриминация (差別) もあつたし。そういう詳しいことはあると思います。私の考えではね。私は話はできないですけど、はっきりしたことはわからないですけど。そんな考えをもって、そんな感じを持っているひとが多いですね。詳しいなど。それが現れます。

—お父さんが亡くなられたのは、ソ連時代ですか？

60 年度に亡くなりました。

聞きましたよ。やっぱり、そんな話をたいしてしましたよ。

——江原道から来た人は樺太ではすくなかったんですか？

江原道から来た人はね、やっぱりね、何ですか？徴用で行った人間でないですからね。徴用で行った人は、全羅北道の方から、テグの方からひっぱってきましたからね。こっちは、自分の意思で来ましたから。

—(名簿の中に)張さんの名前はどこにあるんですか？

張：僕は載ってないですよ。同級生たちがこれをやったんだよね。

—金さんも行っていた学校なんですか？

金：いや、そこには入っていないはずですよ。

張：三郷は違うよ。

金：三郷は村ですから。珍内来てから、珍内のときはこれ、なかったですよ。お前のどこよ？

張：日本の人が、日本の人たちが持ってきてくれた。

サハリン・樺太の朝鮮人－安山市「故郷の村」でのインタビュー－

発行日 : 2014年3月24日

発行者 : 今西一(小樽商科大学 特任教授)

印刷・製本 : 加悦日進堂製本所

〒606-8224 京都市左京区北白川追分町67

Tel 075-781-8656, Fax 075-781-8656